

---

# 真・恋姫?無双～蒼燕流受継ぎし者

アニメ好きの愚者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫？無双〜蒼燕流受継ぎし者

### 【Nコード】

N1366L

### 【作者名】

アニメ好きの愚者

### 【あらすじ】

リボーンの本山武の10年後にできた養子、山本刃が修行を終えて世界中を旅している時、中国のある美術館で鏡を盗んだ少年を捕まえようとしたとき誤って鏡を割ってしまう。そして光に飲み込まれ、きずいた場所はなぜか武将が女の子の三国志の世界だった

## キャラ紹介（前書き）

小説を書くのはこれが初めてです。できるだけ頑張ってみますのでよろしければ応援してください

## キャラ紹介

名前 山本刃

ふりがな やまもとやいば

使える技は、時雨ノ花以外の蒼燕流の技（攻守、一ノ九・特、十ノ十一と鮫衝撃）と自分で考えた十の型

10年後の山本武がマフィア関係の施設から引き取り、以来時雨蒼燕流を教えてもらい

今では山本武以上に強くなっている。

スクアーロも師匠であり、技を教えてもらったが、刃は言う「地獄の日々だった」と

ボンゴレファミリーには属しては無いが、ファミリーの人たちをとっても大切に思っており、ファミリーが危なくなったらいつでも助けるつもりでいる。

普段の性格は山本武みたいだが、マジギレするとスクアーロのようになる。

リングの属性は雨と霧（雨の炎の方がつよい）

武器は時雨金時とスクアーロからもらった短刀

ボックスは雨燕（Ver.Vではない）

好きなものは山本武が作る寿司

刃もちらし寿司はできる。

山本武を誰よりも尊敬している。呼び方は父上となぜか時代劇ふう

## キャラ紹介（後書き）

とりあえずプロローグかきます。ゆくっくりと更新します。

## プロローグ(前書き)

がんばります(どじやん)

## プロローグ

「ふ〜中国はやっぱり人が多いな〜」

と水を飲みながら当り前のこと呟く青年がいた。

彼は最強無敵、完全無欠の剣術、《時雨蒼燕流》をつかいこなす。  
その名は、山本刃

「父上も来ればよかったのに」

刃の言う父上とは、現ボンゴレファミリーの雨の守護者、山本武のことである。  
話はすつ年前

・  
・  
・

「お前、オレの養子にならねーか？」

第一声がそれだった。

「だれ、あんた？」

当時の俺は両親と親戚の人間すべてをリチャーナファミリーに殺され、どこにも行くあてのない時、ボンゴレファミリーに拾われマフィア関連の施設におくられた。目に生氣はなく、生きるのに絶望し、あったのはマフィアに対する恨みだけだった。

「俺はボンゴレファミリー雨の守護者の山本武ってんだおまえは？」

そう聞かれたとき俺は答えることができなかった。両親と親戚を一度に失ったシヨックで記憶の一部がなくなり自分の名が思い出せないのである。

「ないんだつたら俺がつけてもいいか？」

そう言ってくる男に対し俺は言う

「あんたもマフィアなんだつたら俺の恨みの対象だぜ」

だが男は言う

「ああ、お前のことなら聞いたよ。でも、俺はマフィアとは関係なくお前を養子にしたいんだ」

「なんだそれ、しんじられねーな」

俺がそう言つと男はうーんと考え込み

「ほれ、やるよ」

といい小刀を一本俺に渡してきた。

「お前、マフィアが嫌いなんだろ、じゃあ、俺を刺せよ、よけねーからさ」

などと言つてきた。内心ふざけているのかと思つたが同時にチャンスと思つた。このまま生きていても、何も変わらないのならこいつを殺してから死のう、憎いマフィアを、胡散臭い笑顔をするこいつ

をど。

「刺さないから帰れよ」

俺はそう言っただけから離れる。

「そっか、んじゃ、また来るぜ」

後ろを向き、離れた瞬間、俺は一気に走り小刀を取って相手に向かう。

「お

相手がきずく、正直なことを言っただけで殺せるとは思っていなかった。守護者と言われるほどのだから。それでも一矢報いたいと思いきりかかった。しかし

「・・・なんでだよ」

俺はつぶやく。男は避けなかった。それどころか当たる気満々だった。だが俺は刺せなかった

「なんでお前、避けようとしなんだよ」

「刺せば、お前が信用するんだから避けられねーじゃん」

そんな馬鹿みたいなことを言う

「で、信用したか」

最後に俺は聞いてみた。

「なんで俺を養子にする」

一番聞きたかったことだった

「理由は二つ、一つはお前が剣士の家系だから、俺も剣士だし」

確かに俺は親が剣士の家系だった。でもそれだけじゃ

「二つ目はお前が死んだような眼をしてたからだ」

俺は首をかしげる

「生きてりゃいいことあるのに、そんな目してたらもったいないねーじやねーか」

なんだその理由と心のなかで思いながら俺は自分が笑っていることにきずいた

「いい笑顔だぜ」

そう言っつ俺を抱きしめる

「お前の名はやいば、山本刃だ」

俺はこの施設に来て初めて笑い、初めて泣いた

これが俺と父上の最初の出会い

それから数年

「終わりだ、俺達から教わるのは」

父上は隣にいる白銀の長髪の男スクアーロ師匠にも「いいだろ」と同意を求める

「ああ、終わりだな」

「なんでだよ、型を一回やってみただけだぜ」

俺の質問に父上は答える

「時雨蒼燕流の継承は一度きり前にも説明したろ」

「で、でも・・・」

俺はもう少し教わりたと思っていたがそのとき

「ヴオオイ！てめーは親父の剣技と俺の剣技の両方を教え込まれ吸収し、自分自身の型も作りだした。その時点でもう教わることはねえ、てめーはてめーの剣に誇りを持ちゃいいんだ」

いつも厳しいスクアーロ師匠は俺を褒める。正直褒めてくれたのはこれが初めてだ。

「ああ、スクアーロの言うとおりで。ほらやるぜ」

父上は俺に一本の竹刀を渡してきた。

「こ、これ」

俺はそれが何なのか知っている。《時雨金時》時雨蒼燕流の継承者に渡される変形する刀。

「俺からも銭別だ、受け取れ」

スクアーロ師匠は二つのリングと小さな匣、それと短刀を渡してくる。

「これ、ボックス兵器、それと雨と霧のリング」

「てめーは雨の波動以外に霧の波動も微弱だがある、持ってて損はねーだろ」

「父上、師匠・・・ありがとうございました!!」

「おう、で、どうすんだこれから?」

父上は聞く。

「しばらくは、旅をして世界中の剣士を見てきます。ボンゴレには入りませんが、ボンゴレが危なくなっただい早く駆けつけます。」

「そっか、がんばれよ刃」

「ヴオオイ!!!、てめー俺から剣技を教わったんだ、負けたら承知しねーぞおお!!!」

「はは、わかってるぜ、師匠」

そして現在

刃は父親をさそつたが「わりい、ツナに呼ばれてんでな」と言つてこなかつた。

「ツナさんたち元気かな」

ツナとは現在のボンゴレファミリーのボス、ボンゴレX、沢田綱吉のことである。刃はツナのファミリー全員と面識があり、みなと仲がいい（ヴァリアーを除く）。彼の両親と親戚の命を奪つたりチャーナファミリーを潰してもくれた。

それできがはれたと言えば嘘になる。たとえ組織がなくなつても、両親たちが帰ってくるわけではない。

だが、それでも、そこまでしてくれたボンゴレファミリーには感謝をしている。だがそれでも彼はマフィアは嫌いだ。そのため、いまでもどのファミリーにも所属していない。だがボンゴレには恩はある。返しきれない恩が。だからボンゴレが危なくなれば彼はいち早く駆けつけるつもりでいる。

「さてと今日はいろいろと回つたし、そろそろホテルにでも・・・」

お

彼の目の前にあったのは巨大な美術館だった。

「へーこんなところに美術館なんてあったんだ」

美術にはあまり興味もないが、刃はついでなので見ることにした。

「うお、すげえ！これ本物かよ」

興味が無い割には結構楽しんでいた。とそのとき

「あ、すいません」

「ち

一人の白服の少年にぶつかったがその時刃はきずいた。

「あいつ、結構強そうだって、おいおいありやどつ見ても・・・」

という彼の先にはガラスケースに入った鏡を今にも取りそうなくらい見つめる先ほどの少年だった。

(うーん、一応念は入れておくか)

その夜、再び美術館にて

「うーさむ、これで何もなかったら笑いもんだな」

しかし悪い予感は的中する。突然美術館のブザーが鳴り、窓ガラスを割って少年がでてくる

(逃がすかよ)

刃は走り、回り込んで追い詰めた。

「よ、なにやってんだ」

「ち」

やはり夕方にあった少年だった、年は刃と同じくらいだろう。その少年は美術館に展示されていた鏡をもっていた

「ほら、盗んだもの返そうぜ、今ならまだ間に合うかもしれないし、俺も謝るからさ」

「うぜえ、死ね」

そう言うといきなり回し蹴りをかましてきた。

「うお、あぶねーだろ」

それを避けると相手は避けられたことに驚き、さらに追撃をかける

(避けれるけど、ちょっと疲れるな・・・しかたねえ)

刃は背中に背負っていた時雨金時を出し

(時雨蒼燕流、攻式 五の型)

相手に向かっていく、時雨金時の形は変化し、刀となる。

(五月雨！)

相手は首を狙うと思いガードしようとするが、刀の持ち手を替えて軌道とタイミングをずらし、脇腹に峰うちを決める

「くっ！！」

はずだったが、パリーン 当てたのは少年の持っていた盗んだ鏡だった。

(や、やっちゃまった……)

「くそ、鏡が」

「やっぱり謝りに行こうぜ、俺が弁償するからさ」

そのとき割れた鏡から強烈な光が出る。

(な、なんだこれ、身体が、動かせない)

それでも必死に動かそうとしていると

「無駄だ、外史は開いた」

少年が言う

「なに、どういうことだ？」

しかし、俺の質問を無視して少年は続ける

「その眼で見るがいい、この世界の真実を・・・」

その言葉を最後、刃は意識を失った。

## プロローグ（後書き）

はい、というわけでプロローグです。  
ちなみに黒のルートです。がんばります

第一話 「光と供に現れた少年」 (前書き)

ここからが本番です。気合い入れて書いていきます

## 第一話 「光と供に現れた少年」

＊???

「ふむ、もう春じゃと言つのに肌寒いの」

祭の言葉に私はうなずき言う

「気候が狂つてるのかもね。世の中の動きに呼応して」

そう言いながら盗賊が出るという道を祭と二人で偵察しながら歩く。

「・・・確かに、最近の世の中は少々狂ってきていますからな」

祭が話を続ける。

「官匪の圧政に盗賊の横行。それに飢饉の兆候も出始めてるし、世も末ね」

私が答えると祭は同意した。

「王朝では宦官が好き勝手やっておるし、ここまで来ると真面目に生きるのをばかばかしいと思ひ、盗賊になる奴の気持ちも分からんでもないな」

祭の言つとおりだ。けど

「けど、大乱に乗じれば私の野望も達成しやすくなるわ。そのためには袁術の下から独立しないと。」

「ですな。儂もいい加減、あ奴らの下で働くのも飽きたしの」

と祭が愚痴る。正直、気持ちは痛いほど分かる。しかし、今の私たちの力は脆弱。

「何か切っ掛けでもあればよいのですが」

「なかなか、その切っ掛けが来ないのよね」

私は思わずため息を吐く。

(ほんとに、何か起きないかしら)

「そう言えば策殿。最近巷に流れる噂を知っておるか？」

「ええ、聞いているわ。でもあの噂、エセ占い師として名高い管輅が言ったことでしょう。・・・胡散臭いわね」

「そう言う胡散臭いことまで信じてしまうほど、世の中が乱れているということだろう」

継りたいという気持ちはわかる。でも

「そういうのって、あんまりよくないんじゃない」

祭もため息を吐き、同意した。

「まあ、仕方無かるうて。もはや明日のことさえ分からん時代なのじゃから」

それを聞き再び私はため息を吐いて呟く。

「ほんと、世も末ね」

そう言つと同時に偵察は終了した。

「さて、偵察も終わったし、帰って冥琳であそぼ!」

「やれやれ、ほどほどにしてやってくだされ・・・」

祭は少しだけあきれた感じで言う。

「善処するわ。でも、早く帰らないと冥琳に」

話の続きを言う前に奇妙な音がする。

「・・・なにこの音？」

音は少しずつ大きくなる。

「策殿! 儂の後ろに!」

祭が私を守ろうと前に出ようとす

「大丈夫よ。それより祭、気をつけて・・・」

そう言つて祭を落ち着かせたあと剣を抜く。

(盗賊か、それとも妖か・・・ま、何が来ようと殺してあげるわ)

次の瞬間、音は一気に大きくなり、視界が真っ白になった

「な、なにこれ、視界が白く・・・!」

そして、ズドオオン という今まで一番大きな音がした後視界が開けた。

「一体なんだったの・・・」

「策殿！無事か！」

祭が心配して声をかける。

「ええ、でも今のは一体って祭、あれ！」

「どうなされた？ん、あれは」

私が指をさした場所には煙が立っていた。

「行ってみましょ」

そう言っで私は走りだす。後ろで祭が待てと言っていたが無視した。

(何かいいものがありそうだし、待ってられないわ)

ついた場所には小さな穴と

(男の子?)

年は17、8歳ほどで、手にはおそらく竹で作られた剣を持っていて、服は今まで私が見たことのないような物だった。

「策殿、策殿、はあ、はあ、あまり老いぼれをイジメんでくれ」

「ごめん、ごめん。でも、運動不足じゃない」

「ふむ、そうかもしれん……ところでこの、こぞうは何もんじゃ」

私は少し考えた結果

「光と供に現れた少年……」

「策殿はこ奴が管輅の言っておった《天の御遣い》と思うのですか？」

その言葉に対して私は

「うん、たぶんね」

「また勘ですか……しかし、この世のものと思えん服を着ておる。あなたが間違いでななさそうじゃが……さて、どうなされる」

「連れて帰りましょ」

私は即答した

「ほつ、こ奴は妖かもしれんぞ。」

私も考えなしで言ったわけじゃない。

「本当に天の御遣いなら保護する。妖なら私が殺してあげる。・・・  
どっちに転んでも悪くないでしょ」

「確かに。名をあげるにはもってこいじゃな」

「そういうこと。それじゃあ祭、この子の連行よろしくね」

「承った」

約2時間後

「雪蓮、お帰りなさい」

「あら、お出迎えありがと冥琳」

門の前にいた女性、冥琳に私は暗い感じで話しかける

「ん、どうした？帰りが遅かったがなにかあったの」

冥琳が真剣な眼差しで聞いてくる。笑うのをこらえて私は喋る。

「それが、祭が・・・」

「！・・・祭殿がどうした！！」

必死で笑うのこらえながら私は黙る。

「まさか祭殿に・・・」

「なにも起こっておらんわ・・・」

そこに祭が登場。ついに今まで我慢していた分笑う。

「しえ、雪蓮〜！！！！！！」

「ごめん、ごめん。でも遅くなったのにはちゃんと理由があるのよ」

「うむ、拾いものをしてな」

祭が背中に背負った子を見せる。

「なんだ、こいつは？」

尋ねる冥琳。

「管輅の占いの噂知ってるわよね」

「ああ、流星とともにやってくる天の御遣いとかいうものだろう・・・  
・まさかとは思うが」

さすが冥琳。すぐに私の考えを見抜いた。

「そ。この子がそうかもしれないわ」

「私にはのんきに寝ている一人の男にしか見えないわ」

確かに冥琳の言うとおり。ものすごく深く眠り、時折寝言を言っている。けど

「ん〜でも現れ方を見るとそうも言ってもらえなくて」

どういふことと、冥琳は尋ねて、祭が説明をした。

「なるほど、それで連れて帰ったのか？」

「ええ。天の御遣いなら保護し、妖なら私が殺す。どちらに行こうと名を得るにはもってこいでしょ」

説明を終えると冥琳はなるほどという顔をし

「たしかに名を得るには最適な贄だな。・・・分かった。扱いはどうする」

「もしも本物なら、孫呉に天の血を入れるつもりよ。」

「どづいづいとじゃ？」

と聞いてくる祭に私は答える。

「天の御遣いの子孫という名の風評を作るために、この子に種馬になってもらうの」

「また、突拍子も無いことを考えるわね」

冥琳は半分あきれて言う。

「孫呉千年の大系のためよ。庶人の食いつくいいネタができるでしょよ」

「本物ならばな」

「大丈夫よ冥琳。この子は本物よ、たぶん。私の勘がそう告げてるんだから」

「まあ、あなたの勘の良さは認めるわ。けど全面的には賛成できないわね」

そう言われて私はぶーと顔を膨らませる。

「ま、こ奴を尋問してからおいおいかんがえよう。祭殿。こ奴を適当な部屋に」

「おう、扉と窓に二人ずつ、詰め所に十人ほどつめておけばいいか」

「ええ、それで充分でしょうけど・・・雪蓮、あなたはこの男に明日まで会うこと禁止」

読まれていた。

「先読みしすぎ」

ついそう答える。

「お見通しよ。おおかた、夜、部屋に忍び込もうとでもしたのでし  
よう」

そこまで読まれているとは。

「爛漫娘のお守りもたいへんじゃの」

「ちょっと、祭！それどういう意味？」

「そのままの意味じゃよ。ではこれで失礼させてもらおう」

「ええ、雪蓮を入れないようくれぐれもお願いしますよ」

その後もぶーぶー言いながら私もその場を後にした。

こうして彼らは出会った最強無敵、完全無欠の剣士に。

これから起こるかとは神のみぞ知る……

第一話 「光と供に現れた少年」 (後書き)

書き終えて思ったけど本番は次回ですねww  
しかし、がんばります！

## 第二話「どっこい」(前書き)

本来ならもう少し早く出したかったんですが家の事情でだせませんでした

## 第二話「どっだっ」

小鳥のさえずりを聞いて目が覚める

「うん……」

眼を開けるとそこは見慣れない部屋だった。

「どっだ、こっだ？」

少なくとも俺が泊まっていたホテルでないことくらいはすぐに分かった。と同時に手に持っている物に気づく。

「時雨金時……そっか鏡盗んだあいつを追い詰めて、鏡を割っちゃまって、それでピカーって光って」

考えれば考えるほど訳が分からなくなる。

「時間はAM10:37。確かあいつを追いかけていたのはPM23:00ごろ、約十一時間たって」

その十一時間の間に何があったのだろうと考えていると、不意にこの部屋にあった扉が開いて一人の妙齡な女性が入ってきた。

「おっ、眼が覚めたかこそう」

着ている服を見ると中国っぽい服装をしていた。

「気分はどうだ、怪我は見たところないようじゃが」

そう言ってくる女性をすぐに敵ではないと判断して話しかける。

「えと、だれすつか？」

とりあえず名前を聞いておく

「ん？儂か？儂の名は黄葦。字は公覆と言う。以後見知りおけ」

「うがい……その名前をどこかで聞いたことがあるような気がした。」

「あの、うがいさん？」

「なんじゃ？」

「うが中国のどこですか？」

眼前にいるうがいさんの着けている服と、この部屋の周りを見れば、ここが中国だというのはなんとなく分かる。だが

「ちゅうごく？なんじゃそれは？そんな邑、聞いたことがないぞ？」

それはどこの州にあるんじゃ？」

「……はい？」

いやいや、仮にここが中国じゃなかったとしてもだ、中国なんて国を知らない人なんていないだろ普通。

「そ、それじゃあ、うがってどこ？」

「ここは荊州南陽。我が主、孫策殿の館よ」

「けいしゅう？つか、孫策うううう!!」

「ぬお！いきなりなんじゃ」

「えーと、黄色の黄と天蓋の蓋で黄蓋さんですか？」

「そうじゃ。よくわかったの」

「で、孫子の孫と策士の策で孫策ですかね？」

俺の質問に黄蓋さんはうなずいた。

「そうじゃ。かの有名な孫策殿じゃ」

ある程度の世界中の歴史は知っている。しかし・・・目が覚めると  
三国志の世界、だが黄蓋と名乗る女性、・・・まさか!!

「お主、名は」

「はい？」

「名前じゃよ、名前」

「あ、ああ。俺は山本刃っというんだ」

名前を聞かれたので一時考えるのをやめて答える。

「姓はやま、名はもと、字がやいばか」

「いや、姓の方が山本で名前が刃。字っていうのはない」

「字がない？」

黄蓋さんは「ふむ」と言っただけで、さらに質問してきた。

「おぬしは昨日、盗賊が出るという噂があったところに行ったが、なにをしていた？」

「・・・俺、そんな物騒なところに居たの？」

「ふむ、どづいことじゃ？」

そのまま「うーん」と言っていると再び扉が開いた。

「おっ、起きてる起きてる。おはよう少年。気分はどう？」

入ってきた女性は気さくなことを言いながら近づいてくる。歳は俺よりか少し上くらい。

気さくな言葉とは裏腹にこちらの心の奥底を覗くような眼差しで見てる。

「えと、まあ、大丈夫です。さっきまで混乱してたけど、今はなんとなく現状を理解しましたんで」

「ふーん。で、あなたの名前はなんていうの？」

「ああ、山本刃って言うんだ。姓の方が山本で、名の方が刃、字っ

ていうのはねーんだ」

名を名乗った後に、先ほど黄蓋さんに説明したことを先に言っておく。

「へえ？珍しい名前ね」

「そうかな？刃はともかくとして、山本ってのは結構日本だとよく聞くんだけど」

「にほんってなに？」

日本を知らない・・・やはりこれは

「おぬし、さきほどちゅうごくとやらから来たと言ってたが？」

「いや、中国のどこですかとは聞いたっすけど、中国の出身とは言っていないっすよ」

「ねー、だからそのちゅうごくとかにほんってなんなのよ」

黄蓋さんの隣にいる女性が話しかける。

「中国と書いて中国。日本と書いて日本ですよ。えっと名前は」

「孫策よ。字は伯符。この館の主よ」

名前を聞いて少し驚く。「ここまで来るとほぼ間違いない。こっちは・・・」

「で、あなたはどこの出身で、どこからきたの？」  
孫策と名乗る女性が尋ねる。

「え〜と、生まれた国はイタリアだけど育った年数では日本の方が長い、来たところも日本だな」

とりあえず正直に答えたがよく分かってなさそうだ。

「じゃあ、出身はもういいとして、刃、あなたが倒れていた時の状況は聞いた？」

「いや、あんまり」

俺がそう答えると孫策さんは説明してくれた。俺が光と音と共に現れたということ、その理由が分からないから俺を尋問しているということ、そして

「で、この尋問であなたの素性が分からなければ、あなたは妖のものとして処分されます」

「・・・状況は理解しました」

「うん。じゃ、もう一度質問するわ。あなたは何者」

「おそろくだけどこの世界の、この時代の住人じゃない」

俺は先ほどかから考えていた可能性を述べた。

「この世界の、この時代の住人じゃない？それって・・・」

「どづいうことかな？」

孫策さんが言い終わる前にまた別の女性が入ってきた。

「私は周瑜という。貴様の尋問官の一人とも思えばいい」

「あ、どうも、山本刃っす」

「うむ。それで、先ほど言っていたのはどづいう意味だ？」

周瑜と名乗る女性は尋ねる。

「えと、俺が知ってる孫策や周瑜さんっていうのは俺のいた世界から約2000以上昔の人の名前なんですけど、でもそれはみんな男ってことになってる。で、それらを考えていえる結論が一つ」

「なにになに？」

孫策さんが聞いてくる。

「ここは、過去のパラレルワールドというものです」

「ばら、なんじゃ？」

「パラレルワールド、別世界という意味ですかね。たとえばもし孫策さんが三日後にラーメンを食べたとします。けど他の世界では孫策さんは炒飯を食べてるかもしれない。言ってみればもしもの世界です」

俺の父上も昔未来に行きそこでパラレルワールドのことを知った。未来にあるのなら、過去にもあると思ひ答えたが黄蓋さんはよく分かっていなさそうだ。が、孫策さんと周瑜さんは何となく理解していた。そして周瑜さんは尋ねる

「それを証明するものはあるか？」

「パラレルワールドに関しては説明しかできないけど、未来から着た件に関しては証明する方法が一つあるぜ」

そう言つて俺は懐からボックスを出す。そして身に着けていたリングに炎を灯す。

「うわ、なにそれ、大丈夫！」

孫策さんは心配した様子で言ってくる。

「大丈夫ですよ。これは死ぬ気の炎つていうもので簡単に言つと気のようなものです」

そう説明したあとボックスを開匣する。

「うわ、な、なに」

「貴様！何をした」

「まあまあ、落ち着いて」

睨みつけてきた周瑜さんを落ち着かせたと同時に飛んでいたものが

俺の頭の上にとまる。

「すごい。燕だ。」

孫策さん達は興味をしめして雨燕を見る。

「・・・これは、妖の術？」

「いや、どっちかってーと科学だな」

その後、科学というものについて教えた。冷蔵庫やテレビなどのことも

二十分後

「もうここまで来ると、あの噂も本物ね」

孫策さんの言った噂についてきになり尋ねると

「管輅っていう占い師が言ったの。流星と供に現れる者。それは蒼き火の不死鳥を持ち、最強の剣術を持ち乱世を鎮める天の御遣いであるってね。で、どう思う我が軍師様。」

「天の御遣いかどうかは分らんが少なくとも悪い奴でないことはたしかだ」

周瑜さんは答え、俺は聞く

「つまり殺されずに済んだってことでいいかな？」

三人が頷く。とりあえずホッとしていると

「孫策さまへ袁術さんから伝令です」

ほんわかとした口調でまた別の女性が入ってきた。俺が誰かと尋ねると陸遜といった

「そ、要件はなに」

「町はずれにいる盗賊の一派をやっつけてこいとのことですよ」

「まあ、ほんとにとことんこき使ってくるわね」

孫策さんがいやな顔したのを周瑜さんがなだめる。

「なあ、その盗賊退治、俺も連れて行ってくれねーか？」

俺がお願いすると周瑜さんは黙っていたが

「・・・いいわ。」

「いいのか伯符？確かに悪いやつではなさそうと言ったが・・・」

「大丈夫よ。見たところある程度の武術はありそうだし」

「その根拠は聞くまでもないと思うが・・・」

「そ、勘よ」

周瑜さんはため息を吐き、黄蓋さんと陸遜さんはわらっていた。

「じゃ、準備を終わらせて出陣するわよ。」

孫策さんの命令と供にみな動き出す。

「期待してるわよ。刃」

そんなことを俺に言いながら

物語の序章の戦いが今始まる・・・

## 第二話「どっだこっ」(後書き)

少し長く書きすぎたでしょうか？

さてようやく次回バトルです。

うまく書けるか今から心配ですが頑張ります。

### 第三話「剣を使つまでもねー」（前書き）

これから先、学校やバイトなどでなかなか書けなくなると思いますが頑張りますので、応援してくれたらうれしいです。

### 第三話「剣を使つまでもねー」

「すげー」

軍を見た最初の感想はそれだった。

「すげー！！すげー！！これが映画じゃねーことが一番すげー！！」  
なにもかもが新鮮で、なにもかもがすごかった。

「そこまで驚くことなの？」

孫策さんが尋ねる。

「俺のいた世界でも軍隊はいたけど・・・実際に軍隊を見るのはこれがはじめてなんだ」

ま、元の世界は戦車やら銃を使った戦争だけど・・・それは話しても無駄だから話さないでおく。

「はしゃぐのはいいが、戦闘においては期待していいのか？」

「おう！まかせとけ！」

周瑜さんの質問に対して俺はすぐに答える。

「ずいぶん自信じゃの。ま、相手はたかが盗賊。怪我をせんようにやれ」

「油断大敵ともいいますから、きをつけてくださいよ。」

と俺を心配してくれる黄蓋さんと陸遜さん。

「大丈夫ですよ。黄蓋さん、陸遜さん」

そう言ったあと、俺も馬に乗る。師匠からあらゆるものを学ばされているためすぐに乗りこなした。

「・・・ねえ、刃」

不意に孫策さんが声をかけてきた。

「なんすつか？」

「あなたの真名、教えてくれない？私の真名も教えるから」

「ほう、真名を教えるのか」

孫策さんと周瑜さんの言っていることがどういふことか分からず首をかしげて問う。

「あのお、真名ってのは」

「ん、ああ、真名というのは私たちの誇り、生き様が詰まっている神聖な名前のことだ」

「自分が認めた人や心を許した人だけが呼べる大切な名前」

「その者が許さなければ、たとえ知っていても呼ぶことはできん。」

そういう名前じゃよ」

教えてもらって俺は驚く。ここまで言うほど大切なものなのだ、信頼していなきゃ教えるはずもない。

「いいぜ。俺を信頼してくれてんだろ？それを裏切れるはずもねーぜ！！」

「じゃ、次から私のことは雪蓮よ。あなたは」

と俺の真名を聞いてくる。

「いや、すまねえ。俺の世界じゃ真名って風習はねーんだ」

「え、そうなの？」

「ああ。だから、俺のことは刃でいいぜ」

改めて自分の名を名乗った。

「ふむ、策殿が許したのなら儂も教えよう。祭じゃ。」

「改めて名乗ろう姓は周、名は瑜、字は公謹、真名は冥琳。お前には期待しているぞ刃」

「姓は陸、名は遜、字は伯言、真名は穩といひます。穩とお呼びくださいな」

みんなの真名を教えてもらったと同時に斥候さんが帰ってきた。

「大変です！ここより少し先の村が盗賊の集団によって襲われ火事に！」

「なっ！く！！！」

すぐさま馬のスピードを上げ一気に村へと向かう。

「ちょ、刃！」

「まで、先走るな刃！」

後ろから雪蓮さんや冥琳さんの声が聞こえたような気がしたがすぐに村へと向かった。

「間に合え！！！」

しかし、ついた場所で見えたものは、火事によって焼き死んだ者、盗賊によって殺された人達が転がっている地獄絵図だった。

「く、開匣！」

吐き気したそれを抑えて雨燕をだして、その力で大雨を降らせ火を鎮火させる。

「これでよし。生存者は……」

周囲を見て生存者がいないか確認する。すると一人の男性が瓦礫に挟まれているを見つけた。

「大丈夫か？」

「う、あ、いや、私は、もう、だめだ」

「諦めんなよ！！」

しかしその男の命がもう駄目だということは何となくわかっていた。

「せ、めて、この子をだけでも」

そういつて赤子を俺に渡した。受け取ると同時に糸が切れたように倒れ、絶命した。

「く、わかったこの子だけでも・・・！？」

その瞬間俺はきずいた。赤子が息をしていないことに。

「くそつたれ！！」

赤子を男のそばに置き生存者を捜す。もしかすると生存者は・・・という考えを振り払って必死に走る。

「だれか、誰かいないのか！」

叫ぶ。すると近くに某立ちになっている男の子を発見した。

「しっかしる！」

「お兄ちゃん、は、だれ？」

「安心しろ。お前の味方だ」

そう言って安心させる。

「お父さんと、お母さんが、ぼくを守るために盗賊に・・・」

「・・・そうか」

俺には、今のこの子の気持ちが高いほど分かる。だから俺はその体を抱きしめようとする。かつて自分を闇から救ってくれた、父上のように。だが

【ジュン】

「があー！」

「え？」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。目の前にいる子に矢があたり、その子の血が自分に付いてるのを見るまでは。

「あ、ああ、あああ、あああああああ！……！！……！！……！！」

声にならない叫びをあげる。すると前から剣や弓をもったガラの悪い連中がやってきた。

「おい！まあまだ生き残りがいるぜえー！！」

「くくくく、どうする？」



「お前らごときカス共に、剣を使うまでもねー」

俺は雨燕の隣にあるボックスを開扉する。中から出たものは瞬時に相手を食い殺した。

「な、なんだこりゃ!？」

驚くのも無理はないだろう。彼らの目の前にいるのは先ほど不快な笑いをした男を食い殺し蒼い炎を燃やす鯨が宙に浮いているのだから。

「暴雨鯨(スクアール・グランデ・ビオツジャ)」

その名を呼ぶと、まるで理解したかのように叫びながら敵に食らいつく。

『ぎぎや ああああああああ』

『助けてくれー!』

『ば、化けもんだ、逃げろー!』

そうして五人ほどが逃げ出す。

「逃がさねえぞおお!」

鯨をボックスに戻し、追いかけようとした。

「待つのじゃ、刃」

いつの間にか隣にいた祭さんに止められる。

「奴らが向かった先はおそらく敵の本隊がいるはずじゃ。迂闊に近  
ずくでない」

「ならあー！あのクソカス共を生かしてもいいてのなあー！！」

「そんなわけがないでしょう！」

その声の主は雪蓮だった。

「あなたの気持ちわかるわ。あたしだって、こんなことをしたあ  
いつらを許せない。だからこそ、あいつらは根絶やしにしくちや  
ならい。あいつらだけ殺しても何も変わらないわ奴らを追ってそこ  
でまとめて叩かなくちゃ。それに、あなたのことも心配なんだから  
」

「俺、の？」

「ええ、今のあなた、とってもひどい顔してるわよ」

そう言われ自分の顔を触ってみる。自分でもなんとなくひどい顔を  
しているのが分かる。

「・・・わりい、熱くなりすぎた。」

「いいのよ。私だってそうゆう時があるんだから。」

「なら、そんなときは今度は俺が止めるぞ」

「ふふ、期待して待ってるわ」

そんな会話をしていると今度は冥琳がやってきた。

「まったく、いきなり飛び出して・・・ところで刃、先ほどの鮫は何だ？それにお前の性格も今と少し違うようだったが」

そのことが。まあ、いずれ話すことだしいつか。

「鮫の方は雨燕と同じボックス兵器だ。で、俺の性格が変わったのは二人の師匠から剣術を習ってて、一人は父上でもう一人は父上の戦友？みたいな者のスクアーロ師匠っていうんだけど・・・その人の口癖がちよつとだけ身についちまって、俺が本気で切れたときあなるみたいでさ」

俺の説明にみんな少しだけ笑っていると今度は穩が来た。

「斥候さんからの報告です〜ここより約二里先に盗賊さん達の集まりがいるらしいです〜」

「よし、ならすぐに向かうぞ」

冥琳がそう言うと全軍が動き出す。

「あのさ、冥琳」

「ん？どうした、刃」

「ここの村の人たちの墓、戦が終わったあと全員分作ってくれねー」

かな？」

俺はそう言っという雪蓮は尋ねてきた。

「どうしてそう言うことを思ったか聞かせてもらえれる？」

「俺は、この村の人を誰一人守れなかった・・・その罪滅ぼしと言わなくても、なにかしたいんだ。この人たちのために」

村の跡を見て俺は言う。そして俺は決めた

(父上。俺はこれから先、今度は剣で人を殺してしまうだろう。父上が教えてくれた剣術、時雨蒼燕流によつて。でも、覚悟はできてる。そして俺は殺した者の顔をすべて覚えて記憶する。守るために俺は戦う。)

気持ちと覚悟が伝わったのか雪蓮は笑って言った

「あなたの気持ちと覚悟、見させてもらったわ。」

「おう。がんばるぜ、雪蓮さん」

「雪蓮でいいわよ」

「わかったぜ、雪蓮！」

この笑顔に応えるため、今、俺は、俺達は戦場に向かう。

### 第三話「剣を使うまでもねー」（後書き）

暴雨鮫キタこれーていうかすみません。前回戦いを見せるようなことを言っていたのですができませんでしたOTL  
しかし、次回はどうかやっても戦闘です。頑張って書きます!!

今きずいたけど、俺、毎回頑張りますって言ってんな・・・  
ま、でもそれが一番なんで、やっぱりがんばります

## 第四話「まあ、行くぜー！」（前書き）

さて、四話です。

実は自分、結構飽きっぽいのですが、まあ諦めずがんばって書きま  
す。

できれば応援よろです。

#### 第四話「さあ、行くぜ！」

荒野を進んでいると盗賊たちを見つけた。集団になっており、酒を飲んでいるためこちらにはまだきずかれていない。

「こんな所で普通、酒なんか飲むものなのか冥琳？」

俺は冥琳に聞いてみた。ちなみに冥琳も「さんはいらない」と言ってきたので普通に冥琳と呼び捨てだ。

「ありえんさ。それだけ敵は弱く、雑兵であることがわかる」

「なら、正面からぶつかってもいいわよね？」

冥琳の言ったことに対して雪蓮が提案をだした。

「却下よ。」

「え〜なんでよ〜」

そう言っつてぶ〜と口をふくらませる雪蓮。

「どうせやるなら、のちの風評にもなるような圧倒的な勝利が必要だ。穏、敵の数はどれほど分かるか？」

「はい〜おおよそ、五千といたところですよ〜」

「こっちの人数は四千ほど、さてどうするか」

人数を聞いて作戦を考える冥琳に俺は意見を言う。

「あのさ、作戦があんだけど」

「ほう、聞こうかその作戦を・・・」

十分後

「部隊の配列は済んだ。では任せだが、絶対に無理はするな」

先ほどから何度聞いたか分からないことを冥琳は言っただけで自分の部隊を指揮するべく配置についた。

「さて、向かうとしますか」

俺は敵地に来ていた

「あ、なんだこいつ一人か」

そう一人で。

「てめー、なんのよう・・・」

言い終わる前に切り裂く

「ぐぐぎゃああああ」

「ど、どうしたって、こ、こいつぁ・・・」

近ずいてきた他の山賊の一人が俺の顔を見ておびえる。どうやら先ほど逃げた奴の一人のようだ。

「こ、こいつおめーらが言ってたやろうか。だがたった一人うるたえ・・・」

「声だす前に攻撃してきたらどうなんだ」

すぐさま切り、断末魔も上げることなく絶命した。

「ち、ちくしょおおおおお！！！！殺っっっちまえええ！！！！」

今度は先ほどと違い、全軍が押し寄せてくる。

(時雨蒼燕流、守式四の型、五風十雨！)

「な、攻撃が当たらねえ！」

五風十雨は時雨蒼燕流の回避奥義だ、相手の攻撃の呼吸に合わせて避ける。並大抵の人間では当てることなど不可能。

「くそおおおお！！！！逃がすななあああああああああああああああああ！！！！」

どんどん敵は俺を切りつけようと追ってくる。俺はすべての攻撃をかわしながら後退する。

「そろそろか」

そう呟くとともに敵の一人が報告する。

「左より敵兵数は百」

「ああ！そんなちんけな数さつさとやつちまえー！！」

だがこれだけで終わらない。

「逆の方向より敵、数は百！」

「ちい、またかそいつらも・・・」

「再び左から敵だ！数は百！」

「しつげー！！さつさと・・・」

「また逆から敵が数は百！」

「だから、さつさ・・・」

「左から敵！数は百！きりがねー！！」

「落ち着けー！！」

「逆より敵！また百！」

「いつまで続くんだこいつぁー！！」

つに指揮官が焦りだす。

(そろそろ合図をだすか……)

そう思い雨燕のボックスを開匣して空に上げる。そして

「敵が来た!!」

「また百人か？」

「いや後ろから二千ほど軍隊が……」

「なにいいいい!!!!!!」

ついに本命、雪蓮と祭さんによる攻撃。

「く、てめーら、落ちつ……」

「左から敵!数は百!」

「逆から敵!数は百!」

「くそつたれがああああああああ!!!!!!!!」

もはや大混乱だな。ならそろそろ。

(時雨蒼燕流、特式十の型)

距離を付け、敵に向かって走る。そして雨燕は前を飛び、雨の炎のまくを前面に展開する。そして周りの土を巻き込みながら向かって行く。

(燕特攻「スコントロ・ディ・ローンディネ」！)

「へ？」

間の抜けた言葉を喋る盗賊の兵。その瞬間、一気に三十人ほどの盗賊が吹っ飛び、地面に落ちてきた。

「ふうふううう」

息を吐きだし、周りにいる山賊全員に殺気を放つ。

『ひいひいひい』

悲鳴をあげる者、逃げ出す者、気を失う者、もはや盗賊はなすすべがなく、壊滅していく。

「おい、あんた」

そして唯一人、某立ちになっている首領らしき男に声をかける。

「う、ああ、ぐ！」

逃げ出さず、気も失わなかったのはおそらく首領としてのプライドがあつたからであろう。

その眼光で俺を精一杯睨むが、その眼は恐怖で染まっている。

「さあ、行くぜ！」

俺は一瞬でに敵の間合いに入り込む

(時雨蒼燕流、攻式八の型)

それは、父上が一番好きだった技。

(篠突く雨！)

そして決着した。俺達の圧勝という形で。

一時間後、村跡にて

「これで最後だな・・・」

そこには百程の墓があった。これはすべてこの村の住人の墓だ。

「ありがとな、俺のわがままに付き合ってくれて」

俺は墓を造るのを手伝ってくれた雪蓮達にお礼を言った。

「いえ、お礼を言うのこつちよ。あなたの策のおかげで、こちらの被害はほとんどなかったんですから。」

「うむ、まさか兵を半分に分け、そのうち片方の部隊をさらに百人ずつ分け、左右から攻撃

とは・・・少ない兵でも何度も来れば敵は焦りだし、そこに二千の兵を見せ、なおも左右から攻撃、こうなっては敵は身動きが取れない。ここまでの策をよく思いついたものだ。」

「まったくじゃ。それに一人であれほどの敵を倒したしの」

三人から褒められる。正直照れる。

「でも、何で背中のもれ使わなかったの？」

雪蓮が俺の背中にある時雨金時の入った袋を指さす。そう、俺は今回の戦闘では一度も時雨金時をつかわず、短剣のみで戦ったのだ。

「最初見たとき、それを持っていて、しかも寝ていても手放したりしなかったから、よほど大事な物なのは分かるけど……」

「じゃが、それは相手を切るためのものではなからう？なぜそんなものを持っているのだ」

そう言われたので俺は時雨金時を出して、近くにあった木片を手に取る。

「たしかに、このままじゃなにも切れねえ。けど俺の流派、時雨蒼燕流の技を使うとき」

俺は木片を上へ投げる。そして

(時雨蒼燕流、特式十一の型)

「な、形が変わった」

その光景に雪蓮は声を出して驚き、祭さんと冥琳は声は出さないもののやはり驚いていた。

（燕の嘴「ベツカタ・ディ・ローンディネ」！）

木片に向かって技を放つ。その攻撃は突くでも刺すでもない。例えるなら、空間をえぐる。

「す、すーい」

「木片が一瞬で塵に・・・」

技を見てさらに驚いている様子だ。刀を下ろすと元の竹刀へと戻った。

「こんな感じで、形状が変化するんだ。時雨蒼燕流以外の技だと変形はしない。言ってみるなら、時雨蒼燕流専用の武器だ」

「なら、もう一度聞くけど・・・何で使わなかったの？」

雪蓮は再び問う。

「時雨金時は本当に強い敵、剣士として戦う時にだけ使っつて決めたんだ。だから、今は使わないんだ」

理由を話すと皆分かってくれた。

「しえ、雪蓮様〜!!」

「あら、どうしたのよ穩。そんなにあわてて」

「いえその、いい話ですよ。刃さんにとっても」

「え、俺にとつても？」

いったい何なのかと思った。

「この村の生き残りがいたんです！近くの洞窟に隠れていたのを発見したんです！」

「！それ、本当か？」

俺は思わず尋ねた。

「はい、だいたい百人ぐらいですが間違いありません」

「よかった・・・ほんによかった・・・」

突然涙があふれてくる。

「泣くのはまだ早いわよ刃。ここの復興作業を手伝わないと」

「ああ、わかってるぜ」

涙をぬぐい、すぐさま復興作業の手伝いをする。

（父上、俺はいま人のために、俺のみたいな人を出さないように戦い続けることを再び誓う俺が時雨蒼燕流を受け継いだ理由をここに再び・・・）

山本刃は誓う・・・これから先の未来のことは分からずとも、その心に誓いを刻んだ。

????にて

「くそ、俺としたことが・・・」

「まあ、今回にいたっては仕方ありません。まさか、あのようなイレギュラーがいるとは」

暗い空間に二人の白服の人間がいた。一人は刃が美術館で見た少年。もう一人は眼鏡をかけており、少年より少しばかり年上のように背も高い。

「ち、で、どうする？やつはあの世界では一、二を争うほど強い。しかもあのような武器を持っているは・・・」

「御心配には及びませんよ。すでにいくつか手は打っておりますから」

そう言って眼鏡の男は懐から一冊の本を出す。

「それをつかうのか？」

少年は尋ねる。

「いえ、使うのは私ではありませんよ」

黒い空間に穴が空き、そこに本を投げ捨てる。

「さてさて、あの本がどのような混乱を生むか見ものですね」

眼鏡の男は投げた先を見つめてそう呟き、静かに笑った。

その数ヶ月後、大陸で黄巾の乱が勃発することとなる。

第四話「さあ、行くぜ！」（後書き）

はい、戦闘少ねーと思うでしょうが、すみません素人で。OTL  
でもこれからもやるだけやりますので応援よろです。

ちなみに今回出た策はあるゲームからとりました

第4・5話「どづいづことだ？」（前書き）

黄巾の乱を書く前におまけをかいてみます。

ちなみに盗賊をたおしてから一週間ほどたっています。

#### 第4・5話「どづいつことだ？」

ある晴れた日、俺は唐突に聞いてみた。

「そついえばさ、俺を仲間にした理由って何だ？」

今の今まですつかり忘れていたが突然そのことを思い出したので聞いてみることにした。

「今頃聞いてくるのはどうかと思うのじゃが・・・」

半分あきれた感じで祭さんは言った。

「まあ、疑問に思うのはたしかだが、すでに一週間がたっているぞ」

冥琳は苦笑しながら言ってきた。雪蓮と穩にいたっては腹を抱えて笑っている。

「それについては私から説明するわ」

雪蓮が言うには理由が三つあるらしい

一つは俺に天界の知識、要するに俺のいた世界のことについての情報の提供。

二つ目は俺の武を借りたらしい。人手がな現状、猫の手でもほしいというわけだ。

そして三つ目なのだが・・・

「最後の理由が一番の理由なんだけど、あんたの胤を呉に入れるため、簡単にいえば私の配下の武将と口説いてまぐわれということ。つまり、言い方が悪いかもしれないけどあなたを種馬にするってことよ」

最後の意味が分からず首をかしげ聞く。

「・・・最後の理由の意味がよく、分からないんですけど」

質問を言つとまるで時間が停止した感じがした。

(あ、あれ？なんか俺変なこと聞いたかな)

「刃、一つ尋ねてもいいか？」

冥琳は俺に逆に質問してきたがなぜか逆らえない感じがしたので頷く。

「お前は、子がどういう理由で生まれるか知っているか？」

「いや、よく知らない」

嘘をついても仕方がないので正直に答える。

『・・・』

「え、なに、どうしたんだみんな？」

みな黙っていた

説明しよう。山本刃は、山本武とスクアードといったある意味女性とまったく縁のないものと、剣のことだけを考えて生きてきたため、異性について、まったくと言っていいほど知らないのだ！

なんかどこからか声が聞こえたような気がするがどうでもいいとして、いったいこの状況は

「どうということだ？」

思わず声に出してしまった。なんだろう？みんなの視線が痛い。

「刃」

「な、なんだ冥琳」

めっちゃくちゃ真剣な眼差しでこちらを見てくる冥琳。でも少しだけ怖い。

「お前はどうかやら軍師としてもやっていけそうだから、穏を教育に着けて基礎的な戦略知識と性教育を教えさせる。いいな、穏」

「は〜い。わかりました〜」

なんだろう、ものすごく嫌な予感がする・・・

「えと、拒否権は・・・」

『ない「ないですう」』

皆がそろって言った。しかしわざわざ危ない橋を渡るつもりはない。

「じゃ、じゃあ、俺はこれで」

逃げようとしたが時すでに遅かった。

「逃げられると思っているのか？」

すでに肩には冥琳の手があった。

「え、えくと、雪蓮、祭さん、助けては・・・」

手を横に振っていた。

B A D   E N D

「勝手に終わらすなああああああ」

その後基礎的な性知識を穩から教わったそうだが彼は言う

「地獄の日々がまた来た」

なにがあったかはご想像にお任せいたします。



第4・5話「どづいづことだ？」（後書き）

さあ、ちょっとだけかわいいそうな刃君はおいといて  
次回からは黄巾の乱です。

予定としては前後編でいきます

第五話「賭けをやるのさ」(前書き)

今回もがんばります。

## 第五話「賭けをやるのさ」

俺がこの世界に来て二か月ほどたったある日。一人の使者の登場でついに戦乱の世がきた。後に語られる黄巾の乱の勃発である。それとほぼ同時期、雪蓮の下に通の書簡がきた。それは黄巾党の討伐命令だった。

「軍議をやる場所を聞いた時に思ったけど、ほんとにここでやんのかよ?」

その場所は広い庭のど真ん中だった。

「軍議とかつてのは普通は部屋とかでやるもんじゃないか?ここだと聞こえる可能性があるだろ」

俺の問に対し冥琳は答える。

「いや、逆だ、ここがいい。ここが一番、他者の耳を警戒できるからな」

「どづいつい・・・ああ、なるほど」

「あ、分かったみたいですね」

つまりは盗み聞きを防ぐため。確かにここなら盗み聞きしているやつはよく見える。

壁に耳あり、障子に目あり。なら、壁も障子もない所でやったほうが聞かれてまずいことがあっても、どづどづと話せるということだ。

「儂らの周りには常に袁術の眼が光っておる。分かりやすい密談をすればすぐに袁術に伝わってしまう」

「なるほどな。どついう意図かも、俺達を取り巻く環境がどんなのかも分かったぜ」

そんなことを話していつ気になることがあった。雪蓮が軍議にいないことである。

「なあ、雪蓮はどうしたんだ？」

冥琳に聞いてみた。

「あいつは今、袁術に呼ばれている。そろそろ来るだろう」

「……………ただいま」

噂をすればなんとやら。雪蓮がけだるそうな声を出して歩いて来た。

「おかえりなさい。そのようすと、袁術にまた無茶なことでも言われたの？」

なんとなく予想はつく。

「黄巾党の本隊がいる北へ向かうように言われたわ」

「また無茶なこと言うな、袁術ってやつは」

俺は苦笑しながら言った。確か北の本隊の数は三万と少し。俺達を完全に捨て駒に使っているなこりゃ。

「それだけならまだしもなんだけどね」

と言って俺の方を見てくる。まさか・・・

「どこで刃のことも知ったのか分からないけど、袁術に刃を渡すようにと言われたわ」

『なっ！！』

皆驚く。ま、そりゃそうか・・・だが、情報が回るのが早すぎる。

「なあ、冥琳。俺のことは冥琳のことだし隠してたんだろ」

「ああ、あの場にいた兵士にも口止めはしてある」

やはりか、そもそも雪蓮の部下が自分たちを不利にするようなことは絶対に言わないだろうし。

「で、俺はどうすればいいの？」

「今から行く戦闘の後に、もう一度袁術のところに行くことになったわ。刃、あなたも一緒にね」

なるほど、おそらく今回袁術は自分の部下を数名雪蓮の部隊に入れるだろうな。そこで俺の実力を測るつもりつもりで。

「ま、そういうことは後に考えるとして、今は目の前にある問題を

解決しようぜ」

とりあえずみんなを落ち着かせる。

「・・・そうだな、お前の言つとおりだ刃」

冥琳が落ち着くとみんなも少しずつだが落ち着いてきた。

「さて、雪蓮が言つように我らは北の本隊と当たることとなった」

「なら、兵は多いに越したこと無いな。集められそうな人数はどうじゃ?」

祭さんは冥琳に問うが

「無理をしても多くて一万と言ったところです。しかし、武器や兵糧を揃える金子は館には多くなく、軍資金を集めようにも、それほど集められないでしょう」

冥琳がそう言つと皆考え込んでしまったので俺が提案してみた。

「じゃあさ、袁術にださせたら、兵も軍資金も」

「拒否されたらどうする?」

「そんなときは南の分隊を倒して、そのことを荊州の色んなところに宣伝するんだ。太守としての面子がある袁術は北の本隊に当たるっていうのだけど・・・ちよつと勘の方が多いかも」

俺が説明し終わると冥琳は頷き言った

「いい作戦だが、兵はだめだ」

「え、なんでだよ？」

思わず聞いてみた。

「おそらく、袁術は我らの部隊にお前の実力を見るための兵を何人か忍び込ませるだろう。それなら、数は少ない方がいい。」

さすが冥琳。俺と全く同じ考えた。

「大丈夫だって冥琳。俺に考えがあるから」

冥琳は一瞬だけ驚いた顔をしたがすぐさま小さな笑みを浮かべて聞いてきた。

「・・・聞かせてもらおうか。お前の考えを」

それに対して俺は答えた。

「ちょっとした賭けをやるのさ」

説明後

俺の説明が終わった後、皆はなっとくした

「それにしても刃さんって、意外と大胆ですよね」

「うむ、ここまで考えて兵を借りると言ったわけか。なかなかやるおる」

そう言っつて穩と祭さんは褒めてくる。

「やはりお前には、軍師としての才能もありそうだ」

「うん、冥琳でも思いつかないような考えを立てるとは思わなかったわ。本当に軍師でもやっつていけるんじゃない？」

「ぐぐぐぐぐん、しっ？」

軍師と聞いて穩との授業を思い出してしまった。

「いいい、いいよ、そんなの、おれには、むか、ない、し」

声が震えているのを見て穩が心配して声をかけてくる

「どうしたんですか？ 刃さんそんなに震えて」

「な、なんでもありません！！！」

つい大きな声を出してしまう。

「っつて、笑うなよみんなー！」

そこには腹を抱えて笑う雪蓮と祭さんがいた。冥琳までもが口を押さえて笑っていた。

「あの〜本当に大丈夫ですか刃さん？」

「はい！なんでもありません！！」

もはや完全なトラウマとなっている哀れな刃であった。

約二時間後、北の荒野にて

「いよいよ戦乱の世の幕開けね。・・・ふふっ、ゾクゾクしてきちゃった」

「はは、物騒なこと言つなよ雪蓮」

俺はとなりで危ない発言をしている雪蓮に言った。

「あらどうして？この乱に乗じることができれば、私達の独立へ一歩近づけるのよ。」

・・・ゾクゾクしちゃうのも分からないでもないでしょ」

確かに、雪蓮の言つとおりなんだけどさ。

「まあ、気持ちは分からんくもないが、黄巾党が相手ではのう」

「まあ、勘を取り戻すはもってこいですかね」

「それと同時に、世間からの風評も必要だ。そのためには・・・」

「圧倒的な勝利、だろ」

冥琳の言葉に続くことを言った。

「その通りだ刃。ならどうすればいいと思う」

しかし、こご聞かれるとはちょっと思わなかった。俺は少し考え、

「・・・袁術に借りた兵をどうにかして困にし、俺達が美味しいところをもらっていくというのは？」

「面白い手だとは思うが・・・だめだな。袁術の兵とは言っても、現在は我らの部隊に入っている。のちの風評のことも考えると袁術の兵も含めて、被害を最小限にしないてはならないな」

俺はなるほどと心の中でつぶやく。となるとどうするか。

「じゃあ、どうするのよ冥琳」

「そうね・・・火を使うなんてどうかしら」

すでに作戦は考えていたのか、雪蓮の質問に対しすぐに冥琳は答えた。

「いいわね、真っ赤な炎が好きよ」

雪蓮がそういうとすぐさま準備が行われた。でも

「そっか、真っ赤な炎の方がいいのか」

蒼い雨の炎をだす俺の立場はと、思ってしまった。呟いてしまった。

「大丈夫よ、刃が出すあの蒼い炎は綺麗だしそっちも好きよ」

「はは、ありがとう」

聞こえていたか。

「無駄話はそこまでにして、作戦を始めるわよ」

冥琳は俺達に注意してきた。……ちよつと怖い顔で

「そうね、それじゃ、始めましょ」

雪蓮はそれに全く動じていない。慣れてるんだな

「先鋒は伯符にまかせます。黄蓋殿と山本はその補佐を、私と伯言は左右両翼を率いて時期を見て火を放ちますので、合図をしたら軍を退いてください」

「了解した。……策殿、くれぐれも暴走はしないようにしてくれよ??」

祭さんの言葉に対し雪蓮は

「んー……分かんない」

であった。祭さんはやれやれと言いたそうな顔をした。

「大丈夫だって祭さん。そのときは、俺が止めるからさ」

そういう約束をしたしな。

「ふむ、期待しておるぞ。では策殿。出陣の号令を」

「了解」

そう言った後に見せるのは先ほどまでとは違う、武人の雪蓮だ

「勇敢なるの兵よ、今こそ戦いするときだ！天に向かって我らが武を示せ！」

その声は一番後ろの兵にも聞けるだろう。とてもかつこよく見えた。

「敵は無法無体に暴れまわる黄巾党！獣じみた賊共に我らの力を見せよ！」

こうしてみると、やはり雪蓮はあの孫策なのだと思える。

「剣を振るえっ！矢を放てっ！正義は我らにあり！」

『うおおおおおおおー！！！！！！』

皆の叫びが大地を震わせる

「全軍抜刀！いざ全軍、突撃せよ！！！」

雄叫びをあげ皆が突き進む！

「よし、俺も行くぜ！！！」

馬に乗り前進する。勝利を、平和を、その手につかむため。

戦闘開始後、約二十分経過

(篠突く雨！)

『ぎゃあああああ』

一撃で四人をしとめる。

「く、くそう、矢だ矢を放てええええ！」

数十人が一斉に矢を放つ。五風十雨で避けることも可能だが

(時雨蒼燕流、特式十一の型、燕の嘴「ベツカタ・デイ・ローンデ  
イネ」！)

これによってすべての矢を弾く。

「な、今のを全部弾きやがった」

「こんなのがいる奴らに勝てるわけがねえ、退却だー！！」

敵が陣地へと戻っていく。それとほぼ同時に合図の銅鑼が鳴った。

「さて、撤退するぜ雪蓮！」

「ええ、わかったわ。それにしてもあんなに沢山の矢を全部弾くなんてやるわね」

ほめられてちよつと照れる。撤退が終わった直後、一斉に敵陣地に火矢が放たれた。

黄巾党は突然の火矢に混乱し始めた。

「よし」

と俺が喜んでいと

「まだよ、ここで一気に総攻撃をかけるわ！」

「って勝手に動いていいのか？」

「そのほうが敵に痛撃をあたえられるんだから、ここは独断で動いても大丈夫よ」

まあ、今回は大丈夫だろうな。・・・あとで冥琳に何か言われるかもしんねーけど。

「はあ、わかった、俺も行くぜ。今回はさほど危険じゃないし」

「ありがと。・・・全軍、今こそ総攻撃の時だ、かかれー！！」

その後、俺達は敵を殲滅した。今回も圧倒的な勝利だった。

戦闘後 荊州の本城、玉座の間にて

「あなたの御望み通り、黄巾党の本隊を殲滅してきてあげたわよ。・・・これで満足かしら？」

「うむうむ。ごくろうなのじゃ。」

俺と雪蓮は玉座の間にいた。だが、正直目の前にるのが袁術なんだと思うと・・・雪蓮達の苦勞が分かるような気がしてきた。

「で、聞いておるぞよ。天の御遣いとやらはそいつかの？」

と言って俺を見てくる。

「ええ、そうよ」

「うむうむ。では孫策、少しさがつとね。」

雪蓮はものすごく嫌そうな顔をしながら後ろに数歩下がった。

「お主のことは今回の戦についていた妾の兵からも聞いておる。」

「へーそうなんだ。で、言いたいことは何だ？」

どうせ言うてくることなんて、お見通しだけどな。

「うむ。お主、我が軍に今日から入るのじゃ。」

やはりか・・・

「質問と条件が一つあるけど、いいか？」

「うむ。話すがいぞ」

さてさて、乗ってくるか否か。

「じゃ、まずは質問から。俺のことを最初に誰から聞いた」

気になっていたことをとりあえず聞いてみた。

「うむ。七乃、説明せい」

と隣いた女性に言う。言っでいいか？自分で言え。

「はい。それはですねえ、白い服を着て、眼鏡をかけた変な男の人ですよ」

白い服といわれ、美術館でのことを思い出す。確かあいつも白い服を着ていたが……。でも、最初から確証はないし、何よりあいつは眼鏡なんてかけてなかったしな。

「なるほどな。じゃあ、次だが、俺は武将なんかにはならない。だからどこかの部隊に入りたいんだけど……。どこの部隊に入るかは俺が決めていいか？」

さて、釣れるかどうか……

「うむ。そのくらいなら許すぞ。」

釣れた!!

「なら、俺は孫策の部隊に入らしてもらおうぜ」

ほんの少しのあいだ、袁術達の時間が止まったような気がした。

「・・・な、なんじゃとおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

そして動き出す。

「じゃ、じゃが、孫策は童の客将じゃぞ」

さらに食いつく。

「客将であるつと、<今は>あんたの配下に変わりはないんだろ?」

「つぐううううううう!!!!」

俺はあえて<今は>という部分を強調する。ここで違つと言えば雪蓮達の独立を間接的に認めてしまう。これが俺の考えた賭けだ。どちらに転んでもこっちは何の痛みもない。よって袁術が取る方法は一つしかない。

「・・・認めるのじゃ」

折れるしかないのだ。

荊州本城の外にて

「あー、気分がいいわー。ありがとね、刃」

「いって別に。俺だって、あんなやつの下で働くのは正直言っていやだしな」

心から思っていた本心を告げながら歩いていると、いつの間にかみんなのところに戻っていた。

「二人ともお帰りなさい。その様子だと、刃の作戦はうまくいったみたいね」

冥琳が出迎えてくれた。

「ええ、もう完璧に。あの時の袁術の顔は、冥琳にも見せたかったわ」

今まで見た笑顔の中で一番かも知れない顔をしながら言う雪蓮。

「だが、刃。もし、袁術がお前の意見を断っていたらどうするつもりだったのだ？」

冥琳は聞いてくる。だが今回にいたってはおそらく冥琳もわかっているだろう。

「そんなときは、袁術の部下になるのを断って、雪蓮の前で孫呉に忠臣をささげますと言えばいい」

「ふ、なるほどな」

そんなこと言っているがやはり分かっていたんだろうな。顔を見ればなんとなく分かるし。

「さて、これで雪蓮の風評だけでなく。俺の風評が出回るのも、時間の問題だろうな」

「そのために袁術から兵を借りたのだろう」

そう、どうせ知られるなら多い方がいい。そうすれば袁術の軍だけでなく他のところにも噂がいきやすくなるのだから

「それでさ、ご褒美っていったらなんだけど・・・」

「ん？どうした」

「今日から、一人で寝さしてくれねーか？」

本日まで勉強として穩の部屋で強制的に寝さされていたが、これを機になんとかしようと思ひ提案してみた。

「ふむ、まあいいだろう」

「そうね。さすがにちょっとかわいそうだし。」

冥琳と雪蓮は合意してくれた。

「それに、穩ばかりじゃ駄目だしね」

「え、何か言ったか雪蓮」

「グッフェ」

その夜、雪蓮が刃の寝込みを別の意味で襲ったのは言つまでもない。

## 第五話「賭けをやるのさ」(後書き)

最近、感想が増えてきてうれしいです。応援よろです。

あと《生まれ変わった人》さんが自分の作品とのコラボをやるそうなので

皆さんそちらも見てみてください(もちろん自分もみます)

ではまた

第5・5話「怒られるぜ」(前書き)

とりあえずおまけです

## 第5・5話「怒られるぜ」

「はぁー、ひでーめにあつたぜ」

そう言いながら昨日の夜のことを思い出しそうになった。

「いやいや、思い出すな俺！」

とりあえず気分を晴らすために厨房に来ていた。その理由はちょっとしたものを作るため。

「さて、許可はもらったし。早速作るか」

作り方は父上のやっているところを見てたし、教えてもらってないのでわかっている

その後

「あとは細く切っておいた卵をのせて完成つと」

できたものは寿司屋とかにあるちらし寿司だった。

「味の方は・・・」

とりあえず一口食べてみる。

「よし、いいかんじ」

味の方は問題なかった。

「けど、父上のちらしには、まだまだ遠く及ばないな」

父上の作るちらしは本当においしかった。あの味は生涯忘れること  
はないだろう。

「さてと、せっかくだし外で食べるか」

そう思いお皿にある程度のチラシをのせて外に出た。

数分後それが間違いだったということに気づく。

「さて、どこで食べるか」

どこかいい場所がないか探していると

「やーいーばー」

その声に少しだけびっくりしてしまふ。

「こっちじゃ、こっち」

そして声がした方向を見ると

「うーんおいしいやっぱりお酒は白酒にかぎるわー」

「まったく同感じゃ策殿」

酒を飲んでいる雪蓮と祭さん。というか、

「二人共、昼間っから酒かよ」

「いいじゃない別にー誰にも迷惑かけてないんだしー」

「まったくじゃ、少し硬すぎるぞ刃よ」

俺の言うことなど全く聞かず飲む酒豪のふたり。

「ていうか、飲みすぎだろ！何本あるんだよこの瓶」

足元にはお酒の瓶と思われるものが数十本程転がっていた。

「このくらい普通よー。ねー祭」

「うむ、策殿の言う通りじゃ。こんなものまだまだ飲んだ内には入らん」

これだけ飲むだけでもすごいがこれでまだまだとは……この二人の祖先は酒の神バツカスじゃねーだろうな。

「ところでさ、手に持ってるそれなに？おいしそうだけど」

やはり聞いてきたか。言われるとは思っていたけど。

「これは俺の世界の料理で、ちらし寿司って言うんだ」

「ふーん少しだけちょうだい」

言うと思った。まあ、多めには作ってあるし、少しくらいならいいだろう。

そう思っていた俺がバカだった

「刃ーおかわりー」

「全部食べちゃった!!」

「うむ、なかなか美味で、酒にも合うのう」

ちらしって酒に合うもんなのか?というより

「二人とも仕事しなくていいのか」

「らいじょぶよー」

「それに、仕事など酒を飲みながらしたところでどうという事はないじゃろ」

つまりは仕事さぼっていると、まったく、こんなところ冥琳にでも見られたらと、不意に視線を感じて顔を上げる。

「.....」

鬼の形相で立っている冥琳がいた。・・・めちゃくちゃ怖い。

「あ、あのさあ、雪蓮、祭さんそろそろ仕事に戻った方がいいんじゃないか」

とりあえず助け船を出すことにした。

「仕事など酒を飲みながらしたところかどうかというところではないと言ったであろう」

「そーよ、それに今は息抜きの時間だもーん」

だめだ、この人たち全然動く気がない

「いや、でも、冥琳に見つかったら怒られるぜ」

「冥琳じゃとふん、あんなひよっこ、なんともないわい」

「ひよっこかどうかはともかくとして、ちょっと硬すぎるわよねー」

「.....」

だ、黙ってるけどさっきよりも怖いぜ冥琳

「だいたい周家のご令嬢は今でこそ偉そうにしておるが、昔は泣き虫での」

「ほんと、あの頃の冥琳はどこにいったのやら」

そして、この人たちはどんどん火に油つきの木をいれているし

「だからわしが面倒みていたというのに、それがあのような偉そうな言葉をするようになってしまつとは」

「あんな風に育てた覚えはないのにねー」

「・・・私も育ててもらつた覚えはないのだが」

ついに声を出す冥琳。

『ん？』

後ろを向く二人。

「偉そうな言葉をするようになってすいません。これからは、もう少し気をつけるとしましょう」

そして二人とも酔いもさめて停止する。

「のう、刃」

突然話しかけてくる祭さん。

「儂らは、虎口に飛び込んだ兎か？」

「どちらかといえば調理された後の肉かな」

「それ、もう死に体じゃない・・・」

これはもうどうすることもできないな。

「さて、二人には話したいことが山ほどあるのでこちらに」

「な、離せ冥琳！」

「刃ー見てないで助け・・・」

「わりい、無理だ」

即答する

『薄情者ー！！』

そうして連れて行かれる二人を見る俺にできるのは無事を祈ること  
だけだった。

がんばれ雪蓮、祭さん。





第5・5話「怒られるぜ」(後書き)

感想や意見よろしくおねがいします  
では

**第六話「完全無欠、最強無敵だからな」(前書き)**

遅くなってすいませんOTL

しばらくの間、風邪にかかって寝込んでいました。

これからもがんばって、風邪をひかぬよう書き続けます。  
では第六話どうぞ

## 第六話「完全無欠、最強無敵だからな」

先日、黄巾党の本隊を倒したと思った俺達だったが、それが単なる一部だったことに気付くこととなる。

各地の黄巾党はまるで雲のようにどんどん増殖していき、今では本隊数が二十万にも行くという。そんな時、また無茶な命令が袁術からだされた。黄巾党の本隊を倒せという・・・

\*雪蓮

私は袁術から受けた指令をみんなに知らせた。

「黄巾党の本隊を叩けじゃと？噂では敵の数は二十万も三十万もいるというぞ！！さすがに今回は無理じゃ！！」「」

本来なら祭の言うとおりだけど

「あの馬鹿二人はそんなこと考えてないみたいだけどね」

「あゝあの二人、正真正銘のお馬鹿さんですもんね」

穩が溜息を出しながら私に同意した。

「ま、みんなを集めてから考えましょう」

「みんな、ということとは袁術は旧臣を集めることを許したのか」

冥琳が驚いたようにいう。さすがにそこまで馬鹿だとは思わなかったのだろう。

「ほんと馬鹿よね」

つい思っていたことが口に出たがどうということはない。

「その馬鹿さ加減はありがたい。・・・これで軍が増強できるというものだ」

「ええ。でも、尚香にはまだ連絡しないわ。これから先は賭けになるから」

万が一私達に何かあっても尚香さえ残ってくれたら、呉の血は絶えることはない。

「わかった。では早速各地に伝令を出す」

冥琳がそう言っ取りあえず今回の軍議は終了したので

「ねえ、冥琳。刃はどうしたの？」

ここにきていない刃のことについて尋ねた。

「ああ、あいつは修行だと言って近くの河原まで行ったわ」

なんで修行で河原かと思ったが、その理由は行ってみて分かることとなる。

\*雪蓮OFF

「は……」

肩の力を抜き時雨金時を水に浸ける。

（時雨蒼燕流、守式二の型、逆巻く雨！）

それを一気に持ち上げ、水の柱を作る。

（時雨蒼燕流、特式十の型）

雨燕が前に出て、雨の炎のまくを作り出す。

（燕特攻「スコントロ・ディ・ローンディネ」！）

走り出す。水の柱をも巻き込んでんで進み、あらかじめ置いておいた大木の的に剣を向ける。

「ふう、こんなところかな」

俺が通りすぎた後、大木は塵も残さず粉々になった。

「たまに練習しとかないと、鈍るからな。ところで、そこでなにやっつてんだー雪蓮ー」

「あら、ばれてた」

林の中に隠れていた雪蓮に声をかけるとでてきた。

「さっきの技つてもしかしてあなたの流派のもの？」

「ああ、そうだ。時雨蒼燕流の技の中には水を使った技があるからな。だからここで練習してたんだ」

そう言うと雪蓮は驚いた顔をする。

「えっと、つまり、いつもはすべての技を使えるわけじゃないってこと」

「まあ、そうなるな」

本当はその対策もある。おれの時雨金時に雨の炎を流し込めば使える。

「それであそこまで強いなんて、あなたの剣士としての才能はやっぱりすごいわね」

「いや、そうでもないぜ。俺はそこまで剣の才能はなかった。俺なんかより、父上の方が俺の何倍も才能があった。」

俺は否定の言葉を言った。

「・・・どういうことか聞かせてくれる？」

理由を聞いてくる雪蓮。

「そのままの意味さ。俺は全ての型を覚えるのに約三年もかかったけど、父上はわずか十日以内で九の型まで使えたらしい」

そう、俺には人に自慢するほどの剣の才能はなかった。だからひたすらに努力した。一つの型を覚え、取得するまでの期間は長かった。

けど諦めもしなかった。そしてその結果が今の俺だ。練習は、努力は嘘をつかない。

「なら、どうして刃は時雨蒼燕流にこだわったの」

再び問う雪蓮。

「それは、時雨蒼燕流が完全無欠、最強無敵だからだ」

そう答える。何があってもこれを忘れるなど、何度も父上とスクア―口師匠から言われたことを言った。

「それを自分で言うの？」

「まあ、一応その理由はあるぜ」

確かに普通の奴が自分は最強と云えば、それはただの自惚れだ。だが、時雨蒼燕流はそう言えるだけの理由がある。俺はその理由を雪蓮に教えた。

「自分から最強と名乗ることで、あえて敵に狙われることによって恒に流派を超えようとする流派ね。たしかにそれができるのなら、完全無欠、最強無敵ね」

納得してくれたようだ。

「ところでさ、俺なんか用があつてここに来たんじゃねーのか？」

「あ、忘れてた」

いや、忘れるなよ……

「袁術から命令があつてね、それを伝えに来たの」

雪蓮は袁術から言われたことを話してくれた。

「無茶だろ、どう考えても」

相手は約二十万、対してこちらは一万弱。しかも今回は袁術から兵を借りることはできないだろう。

「私もそう思ったけど、呉の旧臣を集められることになったから、とりあえずはみんなと合流してから考えることにしたわ」

「……それ、袁術は許可したのか？」

俺がそう聞くと

「馬鹿でしょ」

と言った。つまりは許したと、それはもう馬鹿とかそういう問題ではない。普通は馬鹿でもそんなことはしない。

「仮とはいえ、そんなやつの下に付いてると思つと虫唾が走るぜ」

今になって雪蓮達の思いがわかった気がする。

「……その気持ちはよく分かるわ」

二日後、南西の荒野にて

「はあ、なんでこんなこと……」

「どうした？溜息などついて」

心配して聞いてくる冥琳に俺は先ほどのことを思い出しながらおしえた。

約二十分前

「うーん、味が薄いと思うのはやっぱり時代の差ってやつかな」

そうはいいながらも結構おいしくおにぎりを食べていると

「やーいーばー」

「なんだ、しえ……ね、ん？」

ニコニコした顔で雪蓮が近づいてくる。なんだろう少し嫌な予感がある。

「ど、どうした雪蓮。なんかようか？」

とりあえず聞いておく。

「うん、ちょっと話しておきたいことがあってね」

「なんだ？」

「あともう少しすればさ、私の妹の孫権が合流するんだけど」

雪蓮の妹ということは・・・やっぱ雪蓮と同じで天真爛漫で、なかなか抑えのきかない人かな。もしそうなら俺の苦労は二倍・・・いや、祭さんもいるから三倍か。

「いま、なにか失礼なこと考えていたでしょ」

す、鋭い。というか、笑顔が怖いぜ雪蓮。

「えと、それよりどんな人なんだ孫権って？」

「ん〜ちよつと真面目過ぎでカタブツっぽいところもあるけど、とっても良い娘よ。かわいいし、おっぱいも大きいし、お尻の形も最高だし」

「は、はあ・・・」

そんなとこまで教える意味はあるのだろうか？

「で、結局なにがいたいんだ？」

「単刀直入に言うわ。口説いて孕ませなさい」

一瞬、食べていたおにぎりを喉に詰まりそうになった。

「は、はあ！！」 穩の教育である程度の知識は知っている

「これからの呉のためなの。じゃ、頑張ってるねー」

「お、おい雪蓮!..!」

それだけ言つと雪蓮は去つて行つた。

「いきなりそんなこと言われても」

確かにそう言う理由もあつて俺を仲間にしたのは知ってるけど...

「はあーどうすりゃいいんだよ」

その後も深く溜息をついた。

現在

「ということがあつたわけ」

理由を話し終わると冥琳は口を抑えて笑っていた。

「笑つなよ冥琳ー」

「いや、すまない」

そう言いながらまだ笑ってるし。

「さて、そろそろ斥候が戻るころだ、戦闘準備をしておけ」

そう言つて真剣な顔に戻り各部隊に指令を伝えるため伝令を呼ぼう

とした。だが

「報告！前方に黄巾党の分隊を発見しました！数は二万ほどです。向こうもこちらにきずいたらしく、城を出て布陣するようですが、孫策様が・・・」

「孫策がどうした！」

と帰ってきた斥候さんに聞く冥琳。けど俺にはなんとなく予想がついた。

「前線部隊を率いて先行してしまつて・・・！」

「ですよー！」

ついそう言ってしまった。

「言っている場合か刃！・・・全くあの子は本当に世話の焼けるわ・  
・穏！刃！すぐに追いかけるぞ！」

「はーい！」

「了解」

ま、今回は言つて止まるとは思えないが。

\*???

「華琳さま、前方約二里付近にて黄巾党と戦闘を行う部隊を発見したとの報告が」

猫耳帽子をかぶった軍師らしき少女はいう

「旗は？」

それに応えたの金髪の少女は後に魏の王となる曹操である

「孫。おそらく、袁術の客将の孫策の軍でしょう」

「猿が将を飼っているなんて、腹が立つわね」

本当にそう思っているらしく、イライラした感じで言った

「はい。それと、まだ不確定の情報が」

「なに？」

「その、斥候の話では、宙に浮く鮫が黄巾党を食い殺してると」

「はあ？なによそれ」

曹操の疑問はもつともだろう。

「私も、よくは分かりません」

曹操はしばらく考え

「なら、見に行ってみましようか。英雄の孫策にも会えるでしょう」

し」

「大丈夫でしょうか？」

猫耳少女はおそらく鯨の方を心配して言ったのだろう。

「安心しなさい。鯨ごときにやられるほど、我が軍はもろくはないわ」

そう言っつて軍を動かし始めた。

\*??? OFF

その10分ほど前にて

結局雪蓮は止められずに現在戦闘中だ。

『死ねああああ!!!!』

一斉に五人の敵が襲いかかってくる。

(特式十一の型、燕の嘴「ベツカタ・ディ・ローンディネ」！)

そいつらを全員切る。

「くそ、数が多いな。仕方ないな、開匣！」

暴雨鯨のボックスを開いた。



というこで曹操と面会することとなった。

で、今俺達の前には金髪で髪がまるでドリルみたいな少女と、黒髪の長髪の女性、水色の髪をしたショートヘアの女性が左右に立っている。

「あなたが孫策ね」

真ん中の少女が雪蓮に問うてくる。

「ええ、そう言うあなたは曹操ね。協力感謝するわ」

と、お礼を言う雪蓮。というか、この子が曹操とは……

「別に、たいしたことはしていないわ。それよりも戦闘中に私たちが見たあの鮫は一体何か教えてくれるかしら」

「それについては私じゃなくてこの子に聞いて」

と言って俺の方を指してくる。

「ふーん。あなた、名前は」

「……山本刃だ」

聞かれたので答える。

「山本刃……聞いたことあるわね。たしか、天の御遣いとか言われている」

すでに噂は広まっていたようだ。

「まあ、世間ではそういうことになってるかな」

「そう。まあ、今そんなことよりもさっきの鮫について教えてくれない？」

と言われた。まあ、隠したところで意味などないし見せるかと思いい、リングに炎を灯す。

「な、なんだそれは!？」

「お前、熱くないのか？」

曹操さんの隣にいる女性二人が驚きの声をだした。曹操さんも声には出さないが驚いてるようだ。

「まあまあ、落ちついて、えと」

「名乗っていなかったわね。夏侯惇と夏侯淵よ」

「じゃあ、夏侯惇さん、夏侯淵さん大丈夫ですよ。熱くないですか」

そう言ってもあまり落ち着いてないが、とりあえずボックスを取り出した

「開匣」

そして出てくる。

「GUOOOOOOO!!!」

大きな叫びをあげ、宙を泳ぐかのようにして暴雨鮫はあらわれる。

「な、な、な」

「・・・これは」

「へえ・・・」

三人は全員声を出して驚いていた。

「これだろ、あんた達が見た鮫ってのは」

「・・・いきなり襲ってはこないの？」

「俺が命令しない限り絶対しない。」

「正直に言って天の御遣いなんて噂は信じてなかったけど本当かも  
しれないわね」

曹操さんはこちらをじっと見つめてそう言った。

「けど、こいつを使うよりも、俺が直接戦った方が強いんだけどな」

「へえー、大層な自信ね」

「そりゃそうさ。なぜなら俺の剣術の時雨蒼燕流は、完全無欠、最  
強無敵だからな」

それを言った瞬間、曹操は少しの間だまりこんで

「それを自分で言う覚悟は持っているの」

と聞いてきた。

「そんなこと、とっくの昔にできてるぜ」

俺はためらいもなく答えた。実際に俺は時雨蒼燕流を受け継ぐ前からその覚悟はできていた。負けない覚悟は。

「なるほど・・・孫策」

「なにかしら」

それまでずっと俺に話していた曹操さんは雪蓮に再び話しかける。

「山本刃に私の夏侯惇と模擬戦をさせてくれないかしら」

雪蓮はこの問いに対して少しだけ考え

「いいわ」

了承した。

「というより、たとえ私が拒否しても、刃は戦うって言うだろっし」

雪蓮の言う通り。ここで逃げたら父上の時雨蒼燕流を汚すことになる。

「感謝するわ。それじゃ、始めましょうか」

ここに夏侯惇VS山本刃の一騎打ちが始まる。

第六話「完全無欠、最強無敵だからな」（後書き）

なにかキャラに変なところとかあったらすいません。

次回から直すようにします。

感想とかもできたよろです。

さあ、いよいよ次回は山本刃が真・恋姫無双のキャラと戦います。  
楽しみに待っていていたら幸せです。

第七話「久々に、燃えてきた」(前書き)

よし七話目です。

ちなみに刃の考えた技はまだでません。

が、今までの時雨蒼燕流にはない技を予定してますので、楽しみにしてください。

## 第七話「久々に、燃えてきた」

一年前

日本の並盛町の寿司屋 竹寿司 の裏の道場にて

「はあ、はあ、よ、ようやく八つ目だ」

この日ようやく八の型までできるようになった。

「おう、やってるみたいだな」

「ヴオオオイ！！さぼってねーだろーな！！」

声がした方を見ると俺の二人の師匠

「父上、それにスクアーロ師匠！」

スクアーロ師匠は自分のミッションがある日以外は、ここに住んで俺の剣の稽古をしてくれている。

「どうだ、刃。攻守九つの型と特式の型、ものにできそうか？」

「ああ、攻守の型はあと一つだけだぜ」

「ヴオイ！てめーみたいな奴がよくここまで来れたもんだ」

スクアーロ師匠の言う通りだ。実際ここまで来るのに二年もかかった。最初の一年は全ての型の鍛錬と研究だった。父上は教えるのは

あまり得意ではなかったらしく。

「いいか、四の型は敵をじーっと見て、呼吸合わせてビュビュビュンって感じで避けるんだ」

こんな教え方では分かるはずもない。そこでスクアーロ師匠が細かく教えてくれた。

「いいか、五風十雨は回避系の防御最強の技だ。敵の呼吸に合わせて攻撃がどこに来るか瞬時に考えることが大切だ」

てな感じでおしえてくれた。別に父上は馬鹿と言っわけではない。頭がよすぎるからこそ、才能があるからこそ、才能があまりないものに教え込むことができない。だから父上は何度も型を見せてくれた。そして、俺の稽古もしてくれた。

修行開始頃

「ぐはあ！！」

俺は後ろに吹っ飛ばされた。

「どうした、お前の覚悟はその程度か？刃」

俺を本気で殺すかのような殺気を放つ父上。だが

「俺はいつでも本気だぜ。そりゃあああああああ」

竹刀を父上に向けて振り下ろすが

「甘い!」

「うはあ!」

俺の竹刀は空を裂くだけだが父上はいつの間にか目の前に現れ胴を決め込む。

「眼と意気込みはいいぜ刃。だが、まだまだ甘い」

「はあ、はあ、はあ」

息を切らす。だがそれでも俺の闘志は折れない。

「もういいんじゃないか」

「?」

「本当は分かってんだろ。自分じゃできないことくらい」

確かに、俺は正直に言って時雨蒼燕流を受け継ぐことができないかもと、心のどこかで思っている。だが

「・・・そんなもんで諦めるなら、俺はとっくの昔に諦めてるぜ」

そうだ。叶う、叶わないじゃない。やるんだ!!

「そつか・・・なら、まだいくぞ」

「はは、そつこなくちやな父上」

何度打ちつけられても俺は諦めなかった。

「いくぞ」

「おう」

二人同時に前に出て竹刀を打ち合った。

現在

俺は今、夏侯惇さんと対峙している。雪蓮や曹操は周りで見ている。

「勝負は一本勝負よ。二人とも異論はないわね」

「はい、華琳さま！」

「ああ、それでいいぜ」

それだけ言うと俺と夏侯惇さんは少しだけ距離をとり、夏侯惇さんは腰につけた大剣を構えて、俺は・・・短剣を構える。

「では・・・はじめ！」

開始の合図を言った直後

「はあああああ！！！！！！！」

夏侯惇さんは速攻をしてきた。

「くっ！」

横振りの攻撃をなんとかかわすが

「でええええい！！！！！」

即座に横と縦の波状攻撃をしてくる。それを俺は

「ぐお！！！」

短剣で横の攻撃を防ぎ、その衝撃で縦の攻撃を避ける。

「まだまだあああ！！！」

攻撃は止まらない。上下左右の四連撃を放ってくる。

「くそ！！！」

左右と下からの攻撃をぎりぎり避けたが

「あと一撃、ちい！」

縦の攻撃はかわしきれないため短剣で防いだ。

「うおおおおお！！！！！」

力の限り押されて後ろに飛ばされる。もちろんその隙を見逃す夏侯惇さんではない。

「終わりだああああ！！！！」

追撃に対し俺は何とか防ぐ。

「どうした！その程度か！！」

どうやらこいつは・・・

\*雪蓮

私は最初に刃が短剣を出した瞬間からおかしいと思った。

「おかしいわね」

「ああ」

「そうじゃな」

「ですね」

どうやら冥琳達も同じだったらしい。

「なぜ刃のやつ攻撃をせんのだ？」

「それに背中 of 剣も使っていないですね」

他の人が見れば夏侯惇が有利のように見える。でも知っている私たちは戦闘をしようとはしておらず、なおかつ後ろに背負った時雨金

時を使わないことに疑問をもった。

「！！祭、気付いた？」

その時、私は刃の方を見て気付いた。

「ああ、見えた」

やはり祭も武人。刃は夏侯惇に飛ばされたときから・・・

\*雪蓮OFF

「・・・・・・・・」

俺は黙っていた。

「もう終わりか？最強が聞いてあきれな」

その後も攻撃をなんとかかわした。そして俺は

「・・・・はは、はははははは」

ついに声に出して笑った。

「な、何がおかしい！！」

夏侯惇さんは馬鹿にされたのだと思い怒る。

「いや、わりい。この世界に来てから、武人と言う武人とまだ戦ってなかったから」

だから俺はつい嬉しくて笑った。久々に・・・

「久々に、燃えてきた」

そう言っておれは短剣を下に向けて落とした。剣は地面に刺さる。その光景を夏侯惇さんは・・・いや、夏侯惇さんだけでなく皆がじつと見ていた。

「夏侯惇さん。あんたを武人として認めよう。そして俺は・・・」

後ろに背負った時雨金時を出す。

「あんたを武人として、剣士として、戦って勝つ！」

時雨金時は形を変え、刀となる。

「さあ、いくぜ！！」

\*曹操

どういうこと？さっきまで春蘭は完全に押していた。しょせんは口だけだと思っていた。だがいま私たちの眼に映る男は何なの？取り出した武器がいきなり変わったことにも驚いたけど・・・だがそんなことよりも、今の山本刃はさっきまでの山本刃とは全然違う

「華琳さま・・・」

「ええ秋蘭、ここからが本当の勝負になるわ」

そして私はこの勝負を見つめる。

「最強と言っただけの力、見せてもらっわよ」

\*曹操OFF

\*雪蓮

その顔は最初の盗賊討伐で見せた時でも、今までの黄巾党の戦いで見せたものでもない。

「純粹に勝ちたいという思いの・・・武人の顔ね」

「ふむ、今度あいつと模擬戦でもやってみようかの」

祭がそう言う。それには私も同意ね。

「考えてみれば、今まで刃さんの本気を出す機会なんてなかったですよね」

「今回が本気かどうかも、まだ分からないわよ」

武人の顔は見せたけど本気かどうかはまだ分からない。それに本当の意味で本気を出すには水辺でないとダメみたいだし。

「さあ、あなたの実力みせてよね刃」

\*雪蓮OFF

「さあ、いくぜ!!」

周りの人たちは目の前にいる夏侯惇さんを含めて俺を凝視している。

(時雨蒼燕流、攻式一の型)

その状況で俺は最強の突きを放つ。

(車軸の雨!!)

「なっ、ぐうう!!」

なんとか大剣で防ぐが防御が一瞬崩れる。

(時雨蒼燕流、攻式八の型)

その隙を見逃さず時雨金時を即座に逆手持ちにする。

(篠突く雨!!)

四つの連撃がほぼ一斉に夏侯惇さんへむかう。

「あさいな」

二撃ほどかすった感覚はあるが一本は取ってない。

「なめるなあああああ!!!!」

夏侯惇さんも負けじと攻撃をしてくる。

（時雨蒼燕流、守式四の型）

先ほどの上下左右の四連撃がくるが

（五風十雨！！）

すべて避ける。

「なに！！」

かわされたことが意外だったのが驚く夏侯惇さん。

「く、まだまだああああ！！」

なおも攻撃を続けるが俺は師匠に言われた通り、見て、観察している。

「でやああああああ！！！！」

指、腕、脚、目の焦点を見て、次にどんな攻撃がどこにどう来るのかを頭の中で瞬時に計算して、最低限の動きで攻撃を避ける。

「く、なぜ当たらない！」

そして苛立ってきた夏侯惇さんに隙が生じる。

（時雨蒼燕流、攻式五の型）

思いつき振り振る。それを防ぐため防御するがぎりぎり間に合っただろう。だが

(五月雨!!)

持ち手を変えることでタイミングをずらされ、完全な隙ができた。  
そこに渾身の一撃が

「うおおおおおあああああ!!!!!!」

「なっ!!!」

入らない。体を思いっきりひねって後ろに下がり避ける。しかし、  
当たってないとはいえ、今は体にかかりの負担がかかったはずだ

「やるな、あんた」

「はあ、はあ」

でもま、次で終わりにするか。俺は一気に駆ける。止めの一撃を入  
れるため。

『うおおおおおおおおおおお!!!!!!』

そして、同時に打ち合った。この時点で勝負は決まった。

「な、な・・・」

打ち合っている構えを解いて時雨金時が元に戻った。しかし、夏侯  
惇さんは全く動かない。いや、動けないのだ。

「どうしたの、春蘭!!!」

「姉者なぜ動かない!!」

曹操と夏侯淵さんは叫ぶが、俺は竹刀に戻った時雨金時を軽く頭に叩いて一本を取った。

「俺の勝ちだ」

「き、きさま、なにを、した」

軽めに打ったからすぐに動き出した。

「鮫衝撃〔アタッコ・デイ・スクアール〕だ」

「あた、なんだ？」

「鮫衝撃〔アタッコ・デイ・スクアール〕、渾身の一振りを強力な振動波に変え、相手を麻痺させる衝撃剣だ」

思えば、この技だけは最初から使えた。

再び修行開始頃

俺は父上と剣を同時に打ち合った。すると父上に隙ができたと言っより動かなかった。

「隙ありいい!!!!」

「っ!まだ、甘い!!!!」

父上は自分の腕を打って反撃をしてきた。

「じゅあ……」

面、手首、胴にもろに当たった。

「いてて、ちょ、まじいてえ」

当たった部分を摩っていると

「どうやら、あいつを呼ぶ必要があるみたいだな」

これが理由でスクアー口師匠も俺の修行を手伝ってくれることとなった。

再び現在

「てなわけで、俺の勝ちだぜ曹操」

「ええ、最強かどうか置いておくとして、あなたが夏侯惇よりも強いと言うことはわかったわ」

なるほど、それはこれから先の戦いで見るってことか。

「楽しかったぜ夏侯惇さん」

と俺が言つと

「春蘭だ」

『な!』』

その場にいた人は雪蓮達も含めて驚いていた。

「いいのかよ、真名だろそれ？」

「私は今、武人としてお前を認めたのだ。だから真名をさずける」  
「どうやら夏侯惇さんに気に入られたようだ。」

「・・・そうか、姉者が認めたのなら私も名乗ろう秋蘭だ」

「二人が真名を名乗ったのなら、主である私が名乗らないわけには  
いかないわね華琳よ」

「・・・ほ、本当にいいのかよ」

真名がどれ程大切なものはすでに知っている。だからこそ戸惑っ  
た。

「刃、そこまで言ってるのだから呼んであげなさい」

雪蓮はそう言う。

「・・・なら、改めてよろしくな。春蘭、秋蘭、華琳。おれの世界  
では真名がないから刃って呼び捨てでいいぜ」

「ええ、わかったわ」

「うむ」

「次に相手をする時は私が勝つからな、刃」

こうして春蘭（夏侯惇）VS山本刃の戦いは山本刃の勝利で終わり、刃は彼らから真名をもらった。

第七話「久々に、燃えてきた」(後書き)

さあさあ、次回ついに来ます。

だれかって？ツンデレのあの人は。

今回も変なことかあれば言ってください。  
感想お待ちします。

## アンケート

どうも、アニメ好きの愚者です。

次の話を描こうと思っっているのですが・・・ちょっと悩んでいます。

そこでアンケートを取りたいと思います。

これから先もう一人天の御使いを入れようと思っっていますが・・・

オリキャラにするか一刀にするかで悩んでいます。

どちらかによってこちらの話の内容も変わります。

だから皆さんの意見を取り入れようと思います。

勝手なことを言っっているようかもしれませんが意見をくれたら嬉しいです。

自分、あまり文才がないので・・・

そう言っわけなのでよろしく願っします。

ちなみに期限は25日を過ぎるまでです



第八話「あなたは俺が守る」(前書き)

さて遅くなりましたが今回ついに蓮華きます。  
おかしいとことかあねばどづぞ言ってください。

## 第八話「あんたは俺が守る」

あの後、華琳達は別の場所に黄巾党の分隊が現れたらしく、そちらを叩いたのち本隊のいる所へ向かうらしい。俺達は孫権と合流するため、別行動だ。

「春蘭は今度会った時には、たぶん強くなってるだろうな」

「何でそう思うの？」

俺が呟いたことが聞こえたらしく雪蓮が聞いてくる。

「あいつが一流の剣の達人だからだ」

おそらく春蘭はまだ伸び盛り。そこで俺に会ったことで、俺を超えるためにひたすら鍛錬をするだろう。次に会う時はほんとに負けるかもしれない。

「けど、負けるつもりはないけどな」

はつきりと言う。いや、言わなきゃ時雨蒼燕流がどこの前のただの臆病者だ。

「ふふふ、これからも頼りにしてるわよ」

うう、そう言われたら正直照れる。

「そっぴや、孫権とはいっ合流するんだ？結構時間もたつぜ」

「ああ、それならあそこを見てみる」

と冥琳が指差した方向を見てみると・・・

「あ、旗だ！」

ここからではまだ遠いためそこまで見えないが孫という字はぎりぎり見えていた。

この10分後

「姉様！聞きましたよ！単騎で敵に突撃するなど何を考えているのです！！」

「わわわ」

会って一番最初に雪蓮に言ったことは説教だった

「あなたは呉の王なのですよ！こんな所で、蛮勇を振りかざしてどうします！少しはご自分の立場と命のことを考えてください！！」

「はい、ごめんなさい」

こんなやり取りを見て思ったことは一つ

「どっちが姉だか分かんないなこりゃ」

「・・・その意見には同意するぞ刃」

冥琳の苦勞がちょっとだけ分かった気がする。

「でも、優しい人みたいだな孫権って」

「ほう、なぜそう思ったのだ？」

冥琳に聞かれるが、そんなもん決まってる。

「家族を大切に思う人に悪いやつはいない」

俺には家族の記憶はもうない。けど、父上との、山本武殿との記憶はここにある。

あの人は俺を本当の家族みたいに育ててくれた。修行の時は厳しかったけど、それは俺を思ってくれたからこそであろう。孫権がああやって雪蓮を怒ってるのも、雪蓮を心配しているからだ。

「ふ、なるほどな」

冥琳が呟いたとほぼ同時、先程まで雪蓮に説教をしていた孫権がこちらに近づいてきた。

「お前が、天の御使いと言われる男か？」

「まあ、世間一般ではそう言われてんな」

俺は孫権の質問に正直に答えた。

「胡散臭いわね」

「まあ、そうだな。あ、そうだ自己紹介まだだったな。山本刃だ、よろしくな」

俺は笑ってそう言っ手て手を差し出した。

「ふん、お前が何者かなどどうでもいいが、姉様に危害を加えるつもりなら、許さんぞ」

そう言っ手て俺を睨みつけて去って行っ手た。ちなみに俺は手を出したまま停止している。

「・・・なあ、冥琳」

「なんだ？」

「俺、何か悪いことしたかな？」

ちよっ手だけ涙目になっ手て聞いた。

「そのくらいで涙目になるな」

「こっ手いっ手こと対しての態勢は俺にはないんだよ」

「気にするでない。あれはお前が嫌いで言っ手てるわけではないぞ」と言っ手た祭さん。

「冥琳、この辺りに顔を洗っ手ことができる川とかないか？」

「どっ手いっ手意味じゃ！ー！ー」

「いやだっ手てさ・・・」

どう考えても、あの言葉は嫌って言うてるとしか思えないんだけどな。

「いつも通りのお前である。それで大丈夫だ」

冥琳のアドバイスを聞いて少しだけ元気は出た。

「俺らしくね・・・一応、雪蓮にも聞いてみるか」

そう思い雪蓮に話しかける

「なーしえ、うおー!!」

俺の目の前には剣を向けてマジギレの孫権がいた。

「貴様、今何を言おうとした」

「えと、雪蓮に用がっっておわー!!」

いきなり剣を振ってきたので避けた。俺じゃなきゃ死んでるぞ!!

「貴様！なぜ姉様の真名を口する!!」

「まあまあ、落ち着こうぜ孫権」

「貴様・・・私を馬鹿にしているのか!!」

だめだ話を聞いてない。

「はいはい。落ち着きなさい蓮華」

どうしようかと思っていると雪蓮が来てくれた。

「刃には私を真名で呼ぶことを許してるわ。私だけじゃなく冥琳と祭と穩もね」

雪蓮がそう言ったあと孫権は、いや孫権だけでなくその後ろにいた二人の少女も驚いてる。

「私にはただの胡散臭い男にしか見えませんが」

紫色で腰には紅い剣を持っている少女がいうと

「胡散臭いはともかくとしても、本当に祭様達が認めた人物なのですか？何か違和感を感じるのですが・・・」

隣にいる背に長刀をもった黒髪で長髪の少女が冥琳に聞いた。

「ふむ、まあ、この男はお前達の夫になる男かも知れないからな」

『ええ！！』

三人とも顔を赤くして驚く。まあ、そりゃそうか。

「えと、それはどういう・・・」

黒髪で長髪の少女は戸惑いながらも問う。

「天の御使いの胤を孫呉に宿す。こう言えばわかるかしら」



んできた。

「とにかく、あなた達も真名を教えなさい」

と雪蓮はいうが

「ちょっと待ってくれ雪蓮」

「あらどうしたの刃？」

「名前を教えてもらうのはいいけど、真名はこいつらが俺を認めてからにしてくれ」

俺はそう言った。いや、むしろ当然だ。信頼もしていないのに真名を言いたくなどないだろう

「・・・それでいいの？」

「ああ。つまりは結果を出せばいいだけなんだから大丈夫だぜ」

「そ、ならいいわ。それじゃ、みんな名前を教えてあげて」

「はい、あの・・・性は周、名は泰、字は幼平です。よろしくお願  
いします」

周泰と名乗った女の子は礼儀よくお辞儀する。

「おう、山本刃って言うんだ、よろしくな。」

と言って手を出す。

「えと、この手は？」

「握手だ。これから一緒に闘う仲間なんだしな」

「は、はい。でわ」

少し緊張しているが握手をした。うん、いい子だな。

「姓は甘、名は寧、字は興覇だ」

「ああ、よろしくな甘寧」

「よろしくしてやるかは私が決める。まあ、貴様のような軟弱者など認めんがな」

酷いこと言つなと思つていと

「まあ、見た目はあれじゃが、強さは保証するぞ」

「祭様のことを疑うわけではありませんが・・・私にはどうも」

いつもは強さを隠してるし、そう思われても仕方ない。

「実際、お前と幼平が二人同時でも倒せんと思うぞ」

ちよ、祭さん何言つてんだよ！そんなこと言つたら・・・

「ほう、では試してみてもよろしいですか？」

いや、よろしくないからな!!

「どつじゃ、策殿」

「おもしろそうね、やりなさい」

く、この人達楽しんでるし。・・・しかたねえか。

「・・・こいよ甘寧」

俺は武器を持たず拳を向ける

「なら、いくぞ!!」

速いな。春蘭よりも速いかもしんない。けど速いだけだな。

「ほい、つかまえた」

「なっ!!」

五風十雨の応用で後ろに回り込み手首を抑える。この中で見えていた人はおそらく眼の言い祭さんくらいなものだろう。それでも完全にではないだろうが。

「俺の勝ちだぜ」

「くっ!!」

手を放してやったが尚も睨んでくるがもう無視することにした。

「で、あんたが孫権さんだな」

「ああ、そつだ」

無愛想な顔で俺を見る。

「あんたが俺を信用しないのは当たり前のことだと思つ。だからさつきも言つたように俺を認めてくれるようにがんばつからさ」

「あつたばかりの人間をすぐに信用することなどできんだが、お前の心意気と強さは今見せてもらった」

お、少しは認めてくれたのかな

「んじゃ、握手を・・・」

しようとしたが

「いや、すまんそついつのには慣れてないんだ」

拒否された。まあ、今回は仕方ないけど

「さて、あいさつはそこまでにして、部隊を編制を変えてすぐに敵の本拠地へ向かうぞ」

冥琳に言われてみんな部隊をまとめ直す。ちなみに俺は後曲の中央、つまりは雪蓮の護衛と手綱を管理すること・・・ある意味もつとも大変な場所であつた

約二時間後 黄巾党本拠地の付近にて

「お、ありゃ華琳のこの旗だ」

「ええ。それに袁に公孫、随分とそろったわね」

俺達の周りには様々な軍の旗が見えた。そこに少数の軍の旗が来た

「ありゃ、どこの部隊だ？」

「あれは・・・義勇軍の劉備だな」

劉備か・・・どんな人なんだろう

「あ、そう言えば知ってる刃？」

「なにを？」

「劉備軍にも天の御遣いがいるって話なんだけど」

俺以外にもこの世界に来てる奴がいるのか。

「ま、そんなのどうでもいいじゃん。俺は俺のすべきことするだけだし」

「ふーん。案外興味無いのね」

「まあな」

と言いつつも実は興味があった。

(俺の知り合いかな？それとも別の未来の平行ワールド来たやつかな？)

そもそも平行ワールドはもしもの数だけあるのだ。俺がいた世界から来たとは考えにくいが・・・だが否定もできない。ま、いつかは合うことがあるだろうし、気にしないでおくか。

「さて、これからどうするんだ？これだけの数なら相手に圧倒できると思っぜ」

「ふむ、数ではまだ5万ほどこちらが負けているが、なぜそう思う？」

冥琳は聞いてくる。たぶん俺を試してると言っただことだろう

「たとえ多くても正規の軍に勝てるわけがないだろ。もともとあいつらはただの食い詰め農民だし」

「ふむ、やはりお前は・・・」

「言わなくていいから!!」

「まだ何も言っていないのだが」

言わなくても分かる。どうせ軍師に向いてると言いたいんだろう。ううう思い出しただけでも心臓に悪いぜ・・・

「ほっ、そうか」

く、冥琳のやつわざとやってんな。

「さて、からかうのはここまでとして・・・」

やっぱりか・・・

「刃なら我々がすべきこともわかるな」

「ああ。他の軍を利用しながら抜け駆けして、一番おいしいところ貰うってことだろ。すげーえぐいな」

「それを暗黙の了解というんだ」

なるほどな。

「で、どうやって攻めるの？」

「力押しでは時間がかかるぜ」

雪蓮と俺が問うと冥琳は少し考えて穩を呼んだ。

「穩、この城の地図があつたはずだな」

「はい、ありますよ。元は太守さんの城でしたから」

そう言つて穩は地図を広げて皆がそれを見る。

「ふむ、厄介だなこの城は」

冥琳がそう言つた訳を俺も地図を見て分かつた。

「攻めずらく守りやすい・・・まさに教科書に書いてあるようなお城ですね」

「全軍を展開できるのは正面のみ。左右は狭いから、大軍で攻めるには無理があるわね」

「うしろには絶壁がそびえており、回り込むことは不可能でしょう。」

皆の意見はもつとだが

「もつめんどくさいから正面から突入しようよ」

雪蓮はほんとにめんどくさそうに言う。

「何を馬鹿なことを言っているのですか」

孫権がツッコミを入れたが・・・

「結構本気なのに・・・」

「うむ、儂も策殿と同じ意見だったのじゃが・・・」

「・・・なおタチが悪いです」

まったくもってその通りだ。

「刃、お前はどっと思っつ？」

不意に冥琳が聞いてくるので俺は現状と地図を見て考えた。

「んー、敵は正規の軍じゃないってことは、どこかで兵糧を集めてそれをどっかに置いてるはずだ。穏、この城に蔵みたいなのはあるか？」

「はい、ここですね」

その場所を見てとあることにきずく。

「これ、蔵のところが死角なってるか？」

「ああ、確かに、そうですねえ」

なら決まりだな。

「おそらく、ここに敵の食糧やら武器があるはずだからここ潰せば、敵側は混乱するだろうな」

「では、どうするのだ？」

冥琳が問う。

「正面をいくつかの部隊で攻撃し、敵の目を引き付ける。その隙に俺は闇に目がきくし、足も結構速いから、同じく闇に目がきいて足の速い人と一緒に夜に侵入して火を放つてとこかな」

「冥琳、どっ？」

「……できるな。祭殿、諸侯の軍が引き上げた後に部隊を正門に

集結させてください」

「心得た」

「その隙に刃と興覇と幼平の部隊が城に潜入して放火活動を行ってくれ。」

『御意』

「了解」

「敵が混乱し始めたら雪蓮は祭殿と合流して城内に突入だ」

「どうやらこの案でいくようだ。」

「ちょっと待て。絶対に成功するという保証が無いのに、お姉様が前に出るのは反対です」

孫権の言いたいことも分かる。けど

「孫権、こと戦争においてはいかなる時も絶対はないぜ」

孫権はおそらく自分でも分かっているのだろう言い返せないでいる。

「刃の言う通りよ。あなたも、そのくらい理解しているんでしょ」

「すみません。しかし、母様が死んだときと状況がよく似ていて・・・」

「城攻めで私が死ぬかもですって？ないない。それに、私が指揮す

るのは突入部隊だけ。城攻めの指揮は祭に任せるから」

「うむ、任せられよ」

自信満々に言う祭さん。

「そう言うわけだから、安心して私の背中を見ておきなさい。孫呉の王の戦いぶりをね」

そう言われて孫権は渋々頷いた。

「聞き分けのいい子は好きよ。じゃ、蓮華は後方に下がっておいて」

その後俺は隠密に向く精鋭を選び夜を待った

夜

俺は月を眺めていた考えてみれば、この世界に来て月をこつやって眺めるのは初めてだ。

「憎らしいくらい綺麗な月だ。そうは思わないか孫権？」

「……気付いていたのか？」

そう言って天幕の裏に隠れていた孫権が顔を出す。

「なにをしているんだ？」

「考え事をしてたんだ」

すかさず孫権は訪ねてきた。

「何を考えている？」

「……俺の作戦で、沢山の人が死ぬと思うと気持ちが悪くなるからどうしようか悩んでな」

「………恐いのか？」

そう聞かれて俺は初めてきずく。

「ああ。そうかもしんね」

すると孫権はくすりと笑う

「ん、どうした？」

「いや、男のくせに軟弱な奴と思ってね」

軟弱か……まだまだ俺も修行が足りないな。

「で、そう言う孫権はなんでここに？」

「わ、私か？私は、その……」

この様子を見るとたぶん

「緊張してんのか？」

「こ、これが私の初陣なんだ。緊張して何が悪い」

恥ずかしいのかったのか少し怒って言う

「いや、別に。ただ気おつけてな」

「ふん、盗賊ごとき下郎に遅れを取るつもりはない。貴様こそ、気をつけるよ」

「大丈夫だってなぜなら・・・」

そのあとのことを言う前に

「時雨蒼燕流は完全無欠、最強無敵なんだろう？」

孫権に言われた。

「姉様達から聞いた。今までの戦いのことも、指輪から出る炎とボツクスのこと、そして、時雨蒼燕流のことも」

なるほどな。でもま、隠してるわけじゃないし別にいいんだけど。

「それをも踏まえて言う。お前は私が守る」

「え？」

どういうことが分からなかった。

「お前はいつも少しだけ無理をしていると聞いた。だから・・・その・

・無理をしすぎんように私がその・・・」

孫権の言いたいことはなんとなく分かった。

「ありがとな孫権。でも俺からも言わせてもらっせ」

「？」

「あんたは俺が守る」

「ふ、ふん！一応期待しておくわ」

そう言っつと

「あ・が・う」

「ん？今、なんて」

よく聞こえなかったので聞くと

「な、何でもない！バカ！」

と言っつて顔を赤くして去っつて行っつた。

「なんだっつたんだろう」

穏に性教育を受け、雪蓮に襲われたのにまだまだ鈍感な刃だった。

作戦開始、敵城内にて

「潜入成功だな周泰、甘寧」

何気なくそう言つと

「あの、明命ともうします」

「それって真名か？」

「はい。雪蓮様達から話を聞いてあなたを信頼できる人物だと思つたので」

やはり教えていたか他の奴にもまあいいんだけど

「貴様を完全に信用したわけではないが、私も名乗ろう思春だ」

「本当にいいのかよ」

「これは私たちの意思です。ですからそう呼びください」

信頼の証かなるほど……

「なら、あらためてよろしくな明命、思春。俺は真名がないから刃つて呼び捨てでいいぜ」

「はい！」

「ふん」

んー、明命はともかく思春は認めてくれているのだろうか。

「じゃ、さっさと終わらせますか」

その後敵の蔵に火を放った。これに敵が混乱し始めた。

「よし、作戦成功だな」

「では撤退して、合流しましょう」

明命がそう言う。でも

「明命、思春、俺の部隊と供に先に行ってくれ」

「な、刃様はどうするおつもりですか？」

心配して明命が言う。

「いくら黄巾党本拠地とはいえ、もとは一般人がいた場所だ。捕ま  
つてる人がいるかもしれないから、それを確認してくる」

「しかし・・・」

「俺は大丈夫だから、早く」

「・・・分かりました」

そう言って明命達は戻って行った。

「さて、探すとするか」

約十分後

「どうやら、いないみたいだな」

そう思い撤退しようとする

「姉さん、早く！」

「でも人和どこに逃げるって言うのよ！」

「私もうっーかーれーたー」

逃げ惑う三人の女の子を見つけた。

「おい！お前ら！」

三人に声をかける。

「ひい！」

「くっ！」

「あー」

「お前達、もしかして・・・」

彼女たちは脅えている。やはり・・・

「黄巾党に捕まってた人か？」

『えっ!』

少し驚いた顔をしたが

「え、ええそうなの。それで、逃げる途中だったんだけど正門はあの状態だから」

眼鏡をかけた女の子は言う。

「そうか・・・けど、俺が入った場所は普通の人じゃ出るのは無理だし・・・よし」

逃げ道がないなら作るまでだ。

「少し下がってる。開扉」

雨燕をだす。

「な、なに?!」

三人とも驚いてるようだがそんなことよりも

(時雨蒼燕流、特式十の型、燕特攻(スコントロ・ディ・ローンデ  
イネ)！)

壁に人が通れる穴をあけた。

「ここから逃げろ！安全なところにつくはずだ」

「あ、ありがとう」

「ど、どうも」

「お兄さん、ありがとう」

三人はそう言って脱出した。

「あつちには華琳の軍がいたから、悪いようにはならないだろう。さて、俺も撤退するか」

このとき逃がしたのが黄巾党勃発の主犯とは知るよしもない刃であった。

戦闘終了後、呉の野営地にて

あの後少しだけ冥琳に叱られたが心意気は見事だと褒められました。そして俺はまた月を見ている。

「また、考え事か？」

孫権が近くに来て話しかけてくる。

「まあ、そんなところかな」

「今度は何を考えている？」

「勝ってよかったなってことと、これからどうなるのかなーって思

つてぞ」

今回の戦いで黄巾党は滅んだが、これからどうなっていくかは全く分からない。

「ま、なるようになんたる」

「・・・呑気な男ね」

「ちょ、ひでえなあ」

これでも結構考えてるのに・・・

「それで、ここに来たってことはなんか用があんだろ」

そういうと孫権は黙っていたが

「・・・一つだけ聞いていいか？」

「なんだ？」

「お前はなぜそこまでして最強を目指す」

そのことが

「べつに、守る力がほしかったからだ。それなら最強の方がいいし」

「今、お前が守りたいものは何なんだ？」

そんなもの言われなくても分かってる。

「呉のみんなを、守れるだけ守る」

全員を守るなんて甘い考えなんてことなどできないだろう。なら、俺は守れるだけの人を守るだけだ。

「・・・そうか、甘いわけでもないのだな。」

「まあな。で、要件はそれだけか？」

「いや、もう一つある」

孫権は一度だけ深呼吸をして言った

「私の真名は蓮華だ。以後はそう呼んでくれ」

「・・・いいのか？真名で呼んで」

「お前の覚悟と、今回の戦いを見て分かった。お前は私が知る中では誰よりも勇敢で、誰よりも強い。なにより、誰よりも優しい心を持っている。だから真名を教えただ」

こりやまた、随分期待されてんな俺。だったらそれに応えられるようにがんばるか。

「なら、改めて俺も自己紹介だ。山本刃、真名はないから刃って呼び捨てでいいぜ。よろしくな、蓮華！」

そう言って無意識に握手するための手が出た。

「っと、わりい慣れてないんだっとな」

と謝ったが、蓮華はすっと手を出し

「こちらこそだ刃」

と言って握手してきたので俺はすごく嬉しかったが同時に

(あれ、なんだろう？心臓がどくどくいってるような気がする。疲れ  
てんのかな)

山本刃はまだまだ鈍感な子供だった

????にて

「おい、これがお前の策か？」

「いえいえ、これはただの前哨にすぎません」

二人の男は暗闇の世界で話す。

「ち、まどろっこしい！もう一人イレギュラーもいるんだぞー!!」

「落ち着いてください。あの山本刃は強いですが、剣士です。それも自らですが最強と言っほどの」

「それがどうした？」

少年はは苛立ちを見せながら眼鏡の男に言う。

「なら、同じく、天下無双と名乗る最強に出会ったとき、我慢できませんかな」

「・・・なるほど、そのための布石か」

「はい、これで漢王朝に統治能力がないと皆が知りましたしね」

男たちは暗闇で不敵に笑う。彼らの考えを知る者はいない。

無論、この後に起こる戦いのことも……………

第八話「あなたは俺が守る」(後書き)

さて終わりましたが・・・次回の拠点の8・5話で刃の作った型、  
事実上で十番目の型である十二の型がでます。

守式か、攻式か、それともふふふ・・・

次回もがんばって書きます。

あと意見の方ともよろしければお願いします。

第8・5話「時雨蒼燕流、十二の型」(前書き)

と言っわけでタイトルの通り、刃の作りだした技がでます

第8・5話「時雨蒼燕流、十二の型」

庭にて

「あ、うめえ」

肉まんを食べて思ったことを素直に口にした。

「さすがは本場の肉まん、味が一味も二味も違っぜ」

ちなみにこの肉まんはつい先ほど厨房に行ったときに優しい料理長のおばちゃんにもらった。

「うん、やっぱりうまいなって、ん？」

二つ目の肉まんを食べようとしたときに、近くから剣がぶつかり合う音が聞こえたのでその場所に行ってみることにした。

「はあっ、ぶ、やあ!?!」

「.....!」

そこでは蓮華と思春が模擬戦をしていた。

「んー蓮華は別に弱くはないけど、まだ思春ほどじゃねーな」

蓮華の放つ気合いの入った剣撃を思春は無表情で受け流していた。

「闇雲に切り込めばいいというわけでもありません、蓮華様」

思春の言う通りだな。時折フェイントも混ぜて攻撃してるけど、

「ええい、その余裕を今日こそ崩してみせるわ！でええええい！！」

熱くなりすぎだな蓮華の場合は

「熱くなるのは蓮華様の悪癖です。それでは剣捌きが多少さえても、心が乱れてしまいます」

「言わせては、・・・おかぬっ！」

あーあ、ありやだめだ。蓮華は弱くはない。むしろ、その辺の一般兵など足元には及ばないけど、フェイント入れて攻撃しても思春の言う通り、心があだと

「くう！！」

ああやってすべて弾き返される。

「思春、いつまで余裕を見せている。早く打って来い！」

「・・・分かりました。思春、参ります」

思春は素早い猛攻をかける。と言うか

「俺の時はやっぱり手を抜いてたか」

速いだけではだめだが、思春はあのスピードをうまくコントロール

してんな。

「く、ぐううう、ぐう！」

もはや勝負は目に見えてる。だいたい、熱くなった奴と冷静なやつが戦った時の結果なんてもんは元から見えている。

「死中に活を見出すのが孫呉の剣・・・！食らえっ！！はあああああああ！」

決死の一撃をあたえようとするが

「・・・・・・・・む！」

「・・・・・・・・！？」

蓮華は一瞬、集中を乱した。そして蓮華の剣は思春に簡単に弾かれて、回りながら蓮華の背後の五、六メートルくらい先のところに突き刺さった。

「勝負ありだな」

最後の時に集中を続けてたらもう少しはいけたかもしれないな。

「何故、集中を乱されたのです・・・蓮華様」

「く・・・・・・・・目に」

蓮華のためとはいえ、結構厳しいこと言うな。ま、俺もそうだったんだけど。

「そのような取り組みをなさるのであれば、以後、鍛練のお相手は出来かねます。思わぬ事故に繋がりがねませんので」

「鍛練の最中に気を抜いたのは、私の落ち度。この通り頭を下げよう。」

「……ふう、あまり根を詰めても仕方ありません」

とか言いつつも、あいつの態度を見れば蓮華に対する優しさはよく分かる。

「……」

ところで、さっきから蓮華と目が合ってるんだが？ 気配は《あれ》を使い消したつもりなんだけど、いつこっちに気がついたんだ？

「……見ているなら声くらいかける」

「うお！ー！」

つて、思春は後ろ向いてんに気づいてるし！

「刃……山本、刃」

んでもってこっちを睨みつけてくるし。

「蓮華様の集中が乱れたのは、その間抜け面が原因か」

「ちょー！、ひどくねーか！さすがに出会い頭にそれは」

前回の戦いで真名は教えてくれたけど、やっぱり俺のことをすべて認めたわけではないみたいだなこりゃ。

「なんだ、その眼は。言いたいことでもあるのか？」

「まあまあ、そんなカリカリすんなよ思春。肉まんでも食つか？」

そう言った瞬間、剣を俺の顔面に向けてきた。

「なんでこういう状況になったか説明してくれるか？」

「ふざけたことを言うからだ」

「いや、至極本気なんだけど」

「そうか・・・ならやはり死ぬ」

いや、それはないだろ！！

「そのくらいにしておけ思春」

ふう、ようやく助け船が来たぜ。

「《いきなり現れて》、平和そうな顔をしている刃を見て集中を乱されたのは事実だが、それはあくまで私の心の弱さが原因だ」

「そうは仰いますが・・・」

「ちょっと待て！蓮華、今最初になんて言った？」

蓮華の言っていたことに疑問を持ち聞いた。

「？だから、いきなりお前が現れてと」

やはりある程度は効いてるみたいだ。それにしても、

「二人とも一体いつ俺に気づいたんだ？」

とりあえず気になったことを近づいて聞いてみると二人は答えた。

「ちょうど、私が最後に思春へ攻撃しようとしたときに」

「私もそのくらいだったな」

んー、となるとやっぱあれはあまり使えないな。

「いやさ、一応気配は消してたんだけどな、これで」

そう言つて二人に霧属性のリングを見せる。

「なんだこれは？お前の持っている指輪とは違うのか」

蓮華は聞いてきくる。思春も気になっているようだ。

「まあ、違つと言えば違つかな。」

俺はそう言つたあと俺の知っている限りの、教えられる限りのことを教えた。全てを教えれば父上の言う「沈黙の掟」オメルタに反する。マフ

イアでないとはいえ、それだけは守るように言われてるし。

「つまり、お前がいつも使っている指輪とは能力が違うと言っことか」

「そういうことだ。ちなみにこいつの能力は一定時間の気配遮断だ。とはいえ、一定の距離だと、さっき見たいにすぐに分かるみたいだし、あんまつかえねーけどな」

とりあえず説明は終わり、二人ともなんとなくだが理解してるようだが

「なぜそのことを話さなかったのじゃ？」

そこに、隣に明命を連れてくる祭さんが来て質問してきた。

「使う機会がなかったことと、・・・言うの忘れた」

俺の言ったことに全員がずっこけた。

『そういうことは忘れるなっないでください！！』

「いやーわりい、わりい」

と三人に謝るが、祭さんはこちらじっと睨みつけていた。

「刃、本当にそうなのか？」

何のことか分からず俺は首をかしげる。

「えと、どづいことだ？祭さん」

「お主の言うことが本当なら、それで策殿を暗殺するつもりではないか？」

『！？』

三人は驚いた顔してこちらを見る。あーなるほどな。そう言われれば、そう思われても仕方ねーな。

「それはねえな」

はつきりと答えた。

「その証拠は？」

やべーな、信じてもらいたいけど、証拠がねえ。

「俺は嘘は言わねえ。これが証拠だ」

こう言うしかない。実際ほんとのことなんだから堂々としていればいい。すると

「くくく、はははははははは」

祭さんは腹を抱えて狂ったように笑いだした。てことは……

「祭さん、俺をからかったのかよ」

「いや、すまん。まさかあのような答えを言ってくるとは思わんか

「ったのじゃ」

でも、あれを聞いて祭さんが雪蓮の暗殺のことを疑ってもおかしくない。

「疑ってたんじゃねーのか？」

「そんなわけなからう。だいたい、本気で暗殺するつもりなら、最初からやっておるだろうに」

「あ、そっか」

と言って俺は納得する。

「普通はお前の言うことだろう・・・」

先程まで黙っていた蓮華がツッコミをいれた。

山本刃はたまに抜けてるところがあった

「今、どこから俺を馬鹿にするような声が聞こえたような」

しかし、そんなことは無視して祭さんは言う。

「しかし、お前が最初から言うておれば、このようなことをせずともよかったのじゃ。何か罰を受けんどのう」

そう言った祭さんの顔はものすごくいい笑顔だ。・・・めっちゃくち

や嫌な予感がした。

河原にて

俺は祭さんに模擬戦をするようにと言われた。しかも

「三対一かよ・・・」

そう俺の相手は祭さん、明命、思春の三人とだ。

「まあ、やれるとこまででかまわん相手をしてくれ」

まあ、それは別にいいんだけど・・・

「なんでここでやんの？」

ここはいつも俺が鍛錬につかっている河原だ。

「ここならお主が本当の意味で全力が出せるじゃろ」

なるほど、つまり祭さんは俺の本気を見たくて三対一にして、二対一でやろつと言った訳か。

「なるほどな、けど・・・」

それでも納得できないことが一つあった。

「やーいばー、がんばれー」

「明命ちゃん、がんばってください！」

「思春、いつも通りのお前で行け！」

「やれやれ、このようなことになるとはな」

そこには雪蓮を始めとした、呉の武将……だけではなく

「うおおおお、山本様と黄蓋様達の戦いだー！！！」

「お前はどっちが勝つと思う？」

「そんなもん、数が多い方に決まってるだろ！」

「いやいや、おれは山本様だと思うねー」

なぜか呉の兵たちもたくさん集まっていた。

「はあー、もういいや。早くしようぜ」

考えると頭痛くなってくるし、今は目の前の相手のことを考えよう。

「うむ、それでは始めるぞ。明命、思春、構えろ！！」

俺も時雨金時を構える。下手に短剣や木刀を使うと負ける可能性があるあるし、何よりこの三人は全員武人なんだそれなりの敬意も見せないといけない。寸止めの自身もあるし。

「じゃ、早速行かせて……」

もらっぜと言っ前に三人がかりで三方向から攻撃してきた。

「はあああああ！！！！」

「でやあああああ！！！！」

「うおおおおお！！！！」

（時雨蒼燕流、守式七の型）

瞬間、水を回転するように刀で巻き上げ攻撃を防いで全員の動きを止めた

『！！！！』

（繁吹き雨）

その隙を狙いまず祭さんに攻撃を仕掛ける。

（攻式八の型、篠突く雨！！）

懐に飛び込み、鋭い斬撃を突き上げようとするが

『はあああああ！！！！！』

「！！」

左右からくる明命と思春の攻撃を避けるために中断する。その隙を祭さんはすかさず狙ってきた。

「うおりゃあああああ！」

(く、時雨蒼燕流、守式四の型、五風十雨)

三人の武人から動きを同時に見極めるのは至難の業だがすべて回避した。

「ふむ、やはりやりおる」

「く、ここまでやるとは」

「祭様の言う通り、私と思春殿だけではまず間違いなく勝てそうにありません」

祭さん達はそう言うが、俺は結構大変だった。武人クラスの間人を三人まとめて相手をするのは今回が初めてだし。

「今度はこっちから行くぜ!!」

俺は三人に向かい走り出す。

「散開しろ!!」

祭さんの言葉を聞き三人ほぼ同時に散開する。

(時雨蒼燕流、攻式五の型)

狙いは一番反応が遅かった明命に向ける。

「そりゃ!!!!」

思いっきり振り振り明命は防御しようとする。しかし、そこには刀はなく逆手である。

（五月雨！）

「なっ！」

タイミングを崩されてもガードしたが武器が弾き飛ばした。この時点で明命は脱落だ。

「てやあああああ！」

真後ろから跳躍して思春が攻撃を仕掛けてくる。普通の奴ならこれで終わりだが

（時雨蒼燕流、守式二の型、逆巻く雨）

刀を水につけて一気に突き上げることで大きな水柱ができ、思春にぶつかった。

「くそ！」

思春は着地をした後、周りを見渡す

「どこに消えた！」

（逆巻く雨から、攻式九の型）

「！、そこか！」

先程の逆巻く雨によってできた、俺の水面に映った影を見つけたのか、それに攻撃するが水を切るだけである。

「なんだと、しまっ!!」

気づいたようだがもう遅い。

(うつし雨!)

横振りをして、持っていた剣を弾き飛ばした。これによって、思春も戦闘不能とみなされる。

「残りは祭さん、あんただけだぜ」

「ふむ、そのようじゃの」

しかし祭さんは先ほどから俺の動きも見てるだろうし、そう簡単にはいかないだろう。なら

「来いよ祭さん。俺が作りだした技で決めてやるぜ」

そう言って俺は体を少しだけねじり、刀を水につけた。

さて、祭さんがどう出るかは分からないが、ここはこれで決めよう。

「時雨蒼燕流、十二の型」

俺はその型の番号を言った。自分の作りし技の……

\*祭

(まさか、ここまでやられるとは思わなんだ)

儂の言う通り、明命と思春では齒が立たないことは当たっていた。しかし、儂も加わったことで、三対一となったのでこれならとも思った。しかし、状況はこちら側の圧倒的不利だ。

(さて、どうするか)

動きはある程度予測はできるが完全ではない。このままでは刃に勝つことは難しいと思っていた。そこに

「来いよ祭さん。俺が作りだした技で決めてやるぜ」

挑発をかけてきて体を少しねじり、刀を水につけて構えてこう言った。

「時雨蒼燕流、十二の型」

(なるほど、こやつ、わしを誘っておるな)

しかしそれが分かったとはいえ、ここで誘いに乗らなければ勝てる可能性はもうほばないだろう。故に

「なら、行かせてもらおうぞ!」

前に出ることにした。一気に刃の懐まで飛び込もうとすると

「どりやあああ！」

水の柱を横向きにし、再度横向きの水柱作り、姿を隠した。先程思春に使った技を、最初に見せた技のように回転するように刃を覆っている。

(攻撃をやめるか・・・いや、ここは縦に一振りで決める)

もとより懐に飛び込むためにでたこの瞬発力を無駄にするわけにはいかないかった。

「うおおおおお！」

今までで一番速く、そして強い一振りだったが

「なんじゃと!!!」

水の渦の回転によって弾かれた。そのとき同時に水の渦から刀が迫っていた。

(じゃが、これならなんとか・・・)

明命の時に使った技と同じくらいの速さだと思っていたが

「な、速い!!!」

防ぎきれず、避けきれず、刀の峰がわきに当り転倒した。

これにより勝負は決した

\*祭OFF

水の回転によって敵の攻撃を弾くことによって防いで隙を作り出し、水の流れによって速さが倍増した刀が襲い掛かる。

「時雨蒼燕流、功守式十二の型、渦巻く雨!!」

功守式、防衛にも攻撃にも向く、カウンター系の必殺技。

この技を作り出すために俺はすべての型の研究を始めた。その結果、逆巻く雨と繁吹き雨の応用でこの技を作り出した。当初は守式のつもりだったが、水の流れて刀の振る速さが上がることを知り、今の技となった。

「ふう、俺の、勝ちだぜ」

時雨金時を元に戻してそう言った瞬間

『う、うおおおおおおお!!!!!!!!!!』

さっきまで静かに観戦していた人たちが雄叫びを上げた。

「すごい、すごい!やるじゃない刃!」

雪蓮が近ずいてそう言う。他のみんなも驚いているようだ。

「ははは、ありがとな雪蓮」

そう言ったあと、祭さん達が近ずいて来た

「すごいです、刃様！我ら三人を相手に勝つなんて！！」

明命ははしゃぎながらそう言う。

「正直、これほどの力量とは思わなかった。少し疑っていた。すまない」

思春はおそらく本当の意味で俺を認めてくれた。

「しかし、蓮華様にはなれなれしく近ずくな」

わけでもなかった。

「ふむ、これからお前の力、期待しておるぞ刃」

祭さんは本心で言ったのだろう。少し恥ずかしい。

「・・・なあ、刃」

すると今度は蓮華が話しかけてきた。

「ん、なんだ蓮華？」

「その、今度から、思春と一緒に私の鍛練に付き合ってくれないか？」

その眼は炎に燃えているようだ。なら断る理由はない！

「ああ、いいぜ」

この次の日より俺も鍛練に参加することとなったが、思春が俺の方をずっと睨んでいたのは言うまでもない。

## 第8・5話「時雨蒼燕流、十二の型」(後書き)

今回は刃のリングの解説もします雨属性のリング(精製度A)

時雨金時にも合うものが選ばれている。霧属性のリング(精製度

B)能力として気配遮断と???しかし、刃の炎は微弱なため、そ

こまで力を発揮できない。間違いや感想、意見などがありました

ら言ってください。次回は迷いましたがオリキャラを出します

第九話「・・・なんで、泣くんのだ？」（前書き）

さて、少し遅くなりましたが九話です。  
楽しんでくれたら幸いです。

第九話「・・・なんで、泣くんだ？」

黄巾党壊滅からすでに一か月が経った。黄巾党の本隊を倒した雪蓮の勇名は大陸全土まで広がり、今では江東の麒麟児と噂されるようになった。するとその噂を聞きつけて、街の人達が雪蓮の下へと集まってきた。それと同時に有力者からの援助もあり、俺達の軍は少しずつだが、確実にその規模を大きくしていった。だが、そうなる」と袁術の目と耳を気にしなくてはならない。そんな時、独立に向けてのさらなる吉報がきた。つい最近、権力争いによつて、大將軍何進が十常侍に暗殺され、その十常侍も何進の副将である袁紹によつて殺されてしまい、その十常侍の筆頭だった張讓も董卓によつて殺されるといふ、まさに血で血を洗う権力争いの暗殺劇が続いた。そして、権力争いは巨大な嵐となつて大陸を覆う。反董卓連合という、巨大な戦となつて・・・

刃の修行所の河原にて

「ふっ！ぜやあー!!」

ある時は水柱ができ、ある時は波となり、またある時は水をえぐつて鍛錬をする。

「どおりやああああー!!」

こうすることで俺の抑えられそうにない怒りを放つ。

「ヴオオオオオオイ!!」

口調が変わっていくのが自分でも分かる。

「うおおおらああああ!!」

渾身の一撃で的を粉々にした。

「はあ、はあ、はあ」

「ずいぶんと熱くなってるわね」

唐突に声がしたので振り向くと眼の前に雪蓮がいた

「のあああ!!びっくりしたぜ・・・いつの間に行った雪蓮？」

俺がそう聞くと

「あなたが鍛錬を始めたころにはもういたわよ」

「・・・え？」

俺が気付かなかった・・・いや、気付く暇がなかったってことか。

「はあ、どうしたの刃？今日の軍議の時から思ってたけど、いつものあなたらしくないわよ。なにかあったのなら言ってみなさい」

さすがは雪蓮だ。まさかあの時から気付いてるとは。

「べつになんでも・・・」

「う、そ、で、しょ!」

くっ、これは言い逃れはできそうにねーな。

「……これから戦いに行くところにいる、董卓ってやつのことを聞いてさ、ちよっと熱くなりすぎたんだ」

洛陽を制圧し、自分の欲望の思うがままに権力を振り回して、さまざまな人間を不幸にしているという董卓のことを聞き、俺は怒りに燃えていたのだ。

「……前から思ってたんだけど、あなたは どうしてこういうことに対してそこまで怒りを出してるの？」

雪蓮は聞いてくる。そう言えば、俺の過去をまだ誰にも言っていなかったな。

「……俺は昔、家族と親戚の人を全員、とある組織によって皆殺しにされたんだ」

雪蓮は一瞬だけ悲しそうな顔をしたが、俺のためかすぐに元に戻ったので話を続けることにした。

## 回想

その時の俺の名前と家族達の名前はもう覚えていない。どういう人間だったのかすらも。

「おい、生き残りがいるぞ！」

「ほんとだ！急いで保護を！」

この言葉聞いた後に気絶し、俺は気付いた時には施設のベッドにいた。そこで俺の家族達のこと聞き、俺は精神が一時的に壊れた。同時に記憶のいくつかもなくなってしまうた。

それから数ヶ月後

俺は施設から俺の養子である父上、山本武殿に引き取られた。その後俺に教育係の人がついた。(父上では人にものを教えるのは難しいため)俺はその人とも仲良くなって、ボンゴレファミリーに所属してなくとも皆家族同然だった。だが

「え……うそ、だろ？」

俺の教育係だった人がリチャーナファミリーによって殺されたと聞いたのだ。俺は怒りに燃え、そいつらのアジトに一人で乗り込もうとした。でも父上が止めた。

「刃、復讐の後に残るのは達成感じゃねー。ただ、自分の悲しみが増えるだけだ」

「だったら、あいつらを許せと言っのかよー!!」

俺の問に答えたのは父上でなく、

「そんなわけがないだろ!!」

ボンゴレファミリー十代目のボス、沢田綱吉こと、ツナさんだった。

「山本はお前に復讐の道に進んでほしくないからこそ言っているんだ。もちろん、お前の気持ちもわかるさ。だが、すでに俺達は動き、ヴァインディチェ「復讐者」も動き出している。お前は復讐で動くことはするな」

「復讐だけじゃねー！！あいつらは、俺だけじゃない。何人もの人間を殺した！その人たちの幸せを奪った！！」

しかもその理由は自分たちのファミリーへの勧誘を断った、ただそれだけの理由だ。

「自分の欲のために動き、他人のことをゴミのようにしてるあいつらを俺は許しておけない！だから・・・」

「だから、自分から死に行くようなことをして、誰が喜ぶ？」

「！！！」

何も言えなくなってしまった。

「お前が自分だけでなく、他人のために怒り、涙を流すことは、悪いとは言わない。だが、お前を心配し、大切に思っているものたちの気持ちも忘れるな」

その瞳は、まるですべてを飲み込み、俺の悲しみも怒りも払いのけるかのごとく優しい瞳だった。

## 回想OFF

・・・今思い出してみれば、あのとき雪蓮が言ってくれた言葉に似

てるな。

「その後、組織は壊滅した。けど、俺はそれでも自分の守りたい人や、いろんな人たちの幸せを守りたいと思い、父上に最強の剣術を習うことにしたんだ」

ツナさんが言いたいことは分かる。でも、俺は他人の幸せを自分の欲のためだけに奪う奴が許せない。

「今回の董卓っ奴にしてもそうだ。こう言う奴は生かしておいたら何が起るかが分かんねー」

こういう奴は放っておくと取り返しのつかないことになる。けどあれから俺も少しは成長してる。

「怒りに燃えたままじゃ、俺は本来の力を出せない。だから、ここで頭を冷やしたんだ」

そして全て教えると雪蓮は少しだけ涙を流していた。

「・・・なんで、泣くんだ？」

「それだけの人生を歩んだ人の話を聞いて、泣かない方がどうかしてるわ」

雪蓮はそう言う、「決めた！」と言って俺を見る。

「これから先、あなたが闇に落ちそうになったら、私や、呉のみんなが、さっきあなたが言っていたツナって人みたいに止めてあげるわ！」

まさか、こんなことを言われるとは・・・でも

「ありがとな雪蓮」

きつと俺は大丈夫だろう。雪蓮が、みんながいる限り・・・

そしてその三日後、俺達は反董卓連合が駐屯している合流地点へと向かっていった。

「そっぴゃさ、反董卓連合に参加してんのって俺たち以外でどれだけいるんだ？」

俺がそう聞くと冥琳が答えた

「発起人である袁紹と、その尻馬に乗った袁術を筆頭に、北方の雄、公孫賛。中央より距離を置きながら着々と勢力を伸ばしてきた曹操やはり華琳も勢力は伸ばしてきたか。いずれは戦うことになるだろうな。」

「他には前の乱で頭角を顕した、平原の相の劉備」

「あとは涼州連合や、喬瑁さんに張貌さんといった太守達が参加していますね」

そうになると、いつぞやの黄巾党の城攻めの時よりも数は多いだろう。

「大なり小なり、みんな野心を持って来てんだろうな」

「さもありません。．．．すでに後漢王朝が死に瀕している今こそが、飛躍にはもってこいも時代だからな」

冥琳がそう言ったあと、雪蓮が付け足す。

「でも、全員が飛躍できるわけでもないけどな」

ま、そりゃそうだろう。

「有能な人もいれば、無能な人もいますからね。一年後はどれだけの勢力が残るかなかなか予想が付きませんね」

「いや、そうでもないぜ穩。少なくとも二人は脱落決定だ」

「へー誰と誰？」

「一応聞いておくか」

雪蓮も冥琳も分かっているのに聞いてんだろうな。

「袁紹と袁術」

「それはどうして？」

聞くまでもない。

「袁術は俺達が倒すけど．．．その前に馬鹿だ！ここ重要、袁術がそんなんだから、従妹の袁紹もそこが知れるって言うのが俺の意

見

三秒ほど何も言わなかったが、みんな納得した顔をして笑った。

「しかし、そうなると俺達を除いて誰が飛躍できるかな？冥琳、雪蓮は誰だと思っ？」

「まず一人としては曹操だな。人材、資金、兵力、これら全てを潤沢に用意している。確実に力をつけるだろう」

やはり華琳か。それにしても黄巾党の乱以降、一気に勢力上げたよなー華琳の奴。なにしたんだろうな。ま、それはどうでもいっか。

「私はもう一人気になる子がいるわ」

なんとなく雪蓮の想像がつく。

「劉備か？」

やっぱりな。つか、史実だとそんな感じだったし。

「そ、義勇軍の大將だったのにいつのまにか平原の相にまで成り上がってる」

たしかに成長スピードは速い。すぐに俺達や華琳に追いついて来るだろう。・・・その前に地の利も必要だろうな。東には公孫贇に袁紹、南には曹操がいるんだからな。

「天の時を得ているわね。それに配下には勇将、知将がそろってて噂だし、人の輪もある。しかも・・・」

とそこまで言って雪蓮は俺を見て続ける。

「しかも、刃と同じく天の御遣いがいるって言うし」

あー、そんなこと言ってたな。

「確かに、気になると言う人物であるのは理解できる。・・・英雄になる人物かもしれんな」

冥琳がそう言つと雪蓮はほんの少しだけ考えて言った

「なら、一度話してみましようか」

「それが良いかもしれん」

確かに。味方にできるのなら、それは多い方がいいしな。

「なら、時期を見て合流しましょ」

さてさて、味方にできるかどうか。

「ところで、祭さんや蓮華はどうした？さっきから姿が見えないけど」

「お二方には健業に行ってもらってます」

穩が言う健業って、たしか

「私達の本拠地があったところよ」

本拠地だったところってことは、孫家に関係のある人間が多いってことだ。つまり……

「なるほど、この戦では端役を決め込むつもりか」

しかし雪蓮、冥琳、穩は首を横に振る。

「そうしたいけど出来ないのよねえ。袁術ちゃんに二心を疑われないようにしなくちゃいけないし……」

「しかも、この戦いで知勇兼備の軍であるという風評も得ることも必要だ。」

「それも兵力の損失を最低限に抑えて、ですね」

それは……またなんとも

「難しいな」

「難しくとも、やらねばならん」

そりゃそうだけど……

「ま、今回は新人や若者達の修練の場ってことでいいんじゃない」

「新人か……」

「そつだお前を筆頭にな」

「俺もかよ!?!」

冥琳にいきなりそう言われたので驚く。俺は戦場に出てたんだけど  
「幾たびかの戦いをくぐり抜けているとはいえ、戦場では経験がも  
のを言う。・・・しっかりと励めよ」

「はあ、分かった」

まあ、いつも通りにすればいいだろう。

「がんばってね、新人さん」

今日はやけにその言葉が響いた。

一方、反董卓連合、劉備軍野営地にて

\*????

「桃香様。新たな部隊が到着したようです」

黒髪の長髪でポニーテールの女の子、関羽が主である劉備に告げる。

「新しい部隊ってどこの人かな?」

ほんわかしているが、何者にも負けない瞳をもつ劉備は尋ねる。

「旗は孫ってことはありゃ、最近江東の麒麟児って言われてる部

隊だろ」

「江東の麒麟児？ご主人様は知ってるの」

危うくずっこけそうになるのを抑える。

「桃香、お前はもうすこし世間の噂とか、そういう情報とかに耳を傾ける」

「あう、ごめんなさい」

「たく、朱里、説明してあげろ」

となりにいる見た目はベレー帽を被っているただの子供だがその実体は歴史に名を残すかの有名な軍師、諸葛亮（真名は朱里）だ・・・今でも少し信じられないけど。

215

「はい、孫策と仰る方です。先代は孫堅さんで、こちらの方も江東の虎と呼ばれた英雄さんです」

「はい、ご説明ありがとうございます（頭なでなで）」

「はわーどうもです」

なぜか顔を赤くしてそう言った。

「英雄さんの娘さんかあ・・・じゃあきつと、すごく強い人なんだからうね」

「頼もしいお味方であればいいのですが」

関羽こと、愛紗が少しだけ不安そうに言う。

「安心しろ、愛紗。そこんところは大丈夫だろう」

「そうそう、きっと大丈夫だよ」

俺と劉備こと桃香がそう言う

「相変わらずお気楽な二人なのだ」

朱里よりも小さい鈴々こと張飛が笑いながら言う。

「うっ、ひどいよ、鈴々ちゃん」

「そうだぞ鈴々。俺は確かにお気楽だが、桃香は極楽だぞ」

「ご主人さまが一番ひどーい！」

泣き顔でおこる桃香。うん、やはりからかいがある。

「ふっ・・・まあ孫策殿がどのような人物なのか、我らの敵になるのか、味方になるのか。その辺は会って話してみないことには分からないでしょう」

水色髪の超雲こと星が言う。

「そうだね。・・・じゃあ、今からお話に行ってみよ」

と言う桃香を愛紗は止めた。

「い、いけません桃香様。あと半刻ほどで軍議が始まるのですから」

「あ、そっか。忘れてた」

やれやれだな。

「まあ、孫策と話すのは桃香が軍議から帰って、機会を見てからにしよう。朱里、後で使者を出しといてくれ。俺は寝る」

「はい。あと、どさくさにまぎれて軍議から逃げようとしなくてください」

ち、ばれたか。

「めんどくさいがしゃーない。いくぞ桃香」

「はい」

それにしても確か孫策のそこには俺と同じく天の御遣いなんて言われてるのは確かあいつだったな・・・まあ、あとで会うだろうし。

「ご主人さま、どうしたの？ぼーっとして」

と、考え事してたら立ち止まってたみたいだな。

「今行く。でも、いつもぼーっとしてるみたにお気楽な桃香に言われるとはな」

「ご主人さまひどーい！ー！」

劉備をからかいたながら進むその男の右手の中指には指輪がつけられており、そこには……

「VARIA」というイニシャルがあった

第九話「・・・なんで、泣くんのだ？」（後書き）

一応オリキャラ出しましたが、少しだけでしたすみませんOTL  
しかし、次回はついに刃と接触です。

彼は何者なのか？なぜ桃香（劉備）といえるのか？

そして刃との関係は？

次回楽しみにしてくれたらうれしいです。

意見、感想などありましたよろです。

## 第十話「ほんとに久しぶりだな」(前書き)

今回は二話連続で出しますので、後書きは二話目に出します

## 第十話「ほんとに久しぶりだな」

「おおぅ、こいつは凄いぜ、前回の黄巾党の城攻めの時の二倍はいるんじゃないか」

「当然だ。袁紹や袁術、曹操・・・野心のある人間ならば、勢力拡大に力を入れるさ」

冥琳も周りの軍を見てそう言う。

「けどよぉ。少し早くねーか？」

「それだけ風雲が近付いてきているってことでしょ・・・それより冥琳。軍議に行ってきた」

言うと思った。

「いや、雪蓮、こづいつのは普通は軍の代表の雪蓮が出るべきだろ」  
返ってくる答えはなんとなく分かるけど一応言うておく。

「却下、興味無いもの」

『はあ・・・』

俺と冥琳は同時に深い溜息を吐いた。

「二人はそうやって溜息を吐くけど、どうせみんなが主導権を握るために腹の探り合いをするのが目に見えてるんだから。そんなとこ

る行きたくないわ」

「私だつて行きたくないわよ」

まあ、そりゃそうだろうな！

「でも行つてくれるんでしょ 冥琳、優しいし」

冥琳は再びふかーく溜息をついたあと

「……貸しーつよ」

承諾した。

「了解、こんど閨で返しましょうか？」

閨でねえー……………  
閨！……！

「いや、ちょ、閨つて！」 結構知識が付いてきている

「変な想像はするなよ、刃」

「なんで？良いじゃない。私たち愛し合っているんだから」

さつきからとんでもない爆弾発言を聞いている気がするぞ……！

「……言つてなさい。じゃあ、私は軍議に出る。穩！部隊への支持はお前に任せる」

「はい では皆さん、天幕を張っちゃいましょう」

相変わらずのほんわかとした口調で、穩は兵士に指示を出して陣地設営をしに向かった。

「それで、雪蓮はどうすんだ？軍議には行かねーんだろ」

「そうね・・・私は刃とお話でもしていよっかな」

「・・・そういうことだ。雪蓮のお守りをたのんだぞ刃」

そう言っつて冥琳は軍議に向かった。

「お守りが、随分と難しこと言っぜ」

「むう、意外とひどいこと言っつね、刃」

雪蓮は顔をふくらませて言っつた。

「まあ、なにせ俺らの大将は気分屋だからな」

「気分屋っつて？」

「軍議だよ。本当に行かなくてもよかつたのか？」

とりあえずそれだけ聞いておく。

「大丈夫よ。それに、他人の腹の探り合いなんて、見ていて楽しいものじゃないし」

雪蓮がそこまで言うってことは、それほど嫌なものなだろう。

「それに私が出るよりも、冥琳が出た方が色々と情報を集められるでしょ？」

そりゃそうだろうけど……冥琳がんばれ！今の俺にはそれしか言えない。

「まあ、適材適所ってやつだな」

「そういうこと。それより刃、一緒に話しましょ」

はなすってもいい、

「なにを話すんだ？」

「てきとー」

また……

「どう、生活には慣れた？」

「まあ、慣れたな。みんな優しいし……思春はちょっと怖いけど毎回、蓮華と鍛錬をしているときにこちらを殺すような視線で見てるからな。」

「ふん。でも、それはたぶん妬いてるのよ」

「はい？焼くって、何を焼くんだ？」

分からないので尋ねると「はあ」と溜息をついて

「鈍感ね、やっぱり」

「？」

意味が分からない

「ま、それは今はいいわ。蓮華とは最近どう？」

「れ、蓮華か……」

その名前を言われてなぜか少しだけドキッとした。

「どうしたの？」

「いや、なんていうかさ、蓮華を見たり、思い出したりしてるとさ、たまになんか心が弾むって言うかって……雪蓮？」

見ると雪蓮はにっこりと笑っていた。

「刃、その気持ちはいつかあなた自身で気付くべきものよ。がんばりなさい」

そう言われても何をがんばればいいんだ？

「つか、こんなどうでもいい話をする意味あんのか？」

「そうでもないわよ。それが重要なんだから」

「どう言う意味だ？」

疑問に思ったので聞いてみた。

「呉の人間はね、本来は自分たちの所有していたものを、すべて袁術にかすめ取られたの」

知ってはいたことだが、やはり聞いているとつらい。自分たちの大切なものを含めた全てを奪われる。しかもそれが、あの袁術みたいな奴にやられたのだ。とてつもない屈辱だろうな。

「で、その持ち物を取り返すためにずっと戦ってきた。けど、戦いだけの毎日じゃ、獣と変わらないわ」

「！」

そう言われて昔、師匠と父上に言われたことを思い出したが今は雪蓮の話聞くのに集中した。

「だから、私たちが人間だって、やっていることは間違っていないで、再確認して一息つくためにはすごくいいことなんだから」

「・・・分かるような気がするな」

「そう？」

「ああ。師匠と父上も似たようなこと言っていたし」

## 回想

最終試験（継承の儀）の一週間前

「だいぶよくなってきたし、こりゃ一週間後はいけるな」

「たく、ここまで来るのに三年もかかりやがって」

父上と師匠はそう言う。

「ありがとうございます！」

「じゃ、最後に一つだけ教えるぜ」

俺はそれを聞く態勢になる。

「お前がこれからどんな剣士になるかはお前が決めることだ。俺のすべてを受け継ぐ必要はない。けど・・・」

「誇りだけは捨てんな！！」

父上が言う前に師匠が言った。

「誇り？」

「そうだ！これから先、お前が人を切ることがあっても、それだけは見失うな」

「それを捨てた奴はもう剣士じゃねえ。ただの獣いや、鬼だ」

その言葉は昔の俺に対しても言われていることでもあった。

## 回想OFF

「てなことを言われたんだ」

「・・・ふーん。あなたが尊敬する理由が、なんとなくだけど分かったわ」

父上と師匠に言われたことは今も俺の心の奥深くに残っている。だから、俺は俺の誇りを忘れず、守るための戦いをする事ができた。・・・何度か暴走しかけたけど。

「ま、俺と話すだけで気持ちが悪くって言うのなら、いくらでも力になるし、支えにもなってやんぜ」

「ありがとう。私も刃になら寄りかかりたいかも」

「おう！肩ならいくらでも貸すぜ」

「肩だけじゃなくて、身体も貸してね」

そ言つと俺に寄りかかって頬に軽くキスされた。

「な、ななな」

いや落ち着け俺！！

「め、冥琳が見たら怒るんじゃないか？」

とりあえずこの状況から逃げるために言ってみる。

「冥琳も刃なら良いって認めてくれるから、刃を食べちゃっても大丈夫よ」

やばい！いつぞやの時のようになる！と思った時

「・・・ただし、人に面倒事を押しつける時は除いてね」

冥琳が帰って来ていた。・・・ちよつと怖い顔で。

「あ、あら冥琳。お早いお帰りなのね・・・」

「・・・」

冥琳は鋭い眼光で睨んでくる。それを見た雪蓮はまさに蛇に睨まれた蛙状態だ。

「し、しかもちよつとご立腹？・・・私、まだ刃を食べてないわよ」

「そこじゃないわ。・・・他人の腹の探り合いにあてられたのよ」

あー、なるほど。どうや随分と嫌な所だったみたいだな。雪蓮も納得している。

「で、軍議はどうだったの？」

雪蓮は冥琳に軍議で話したことを聞く。

「反董卓連合の総大将は袁紹に決まった。……が、恐らく裏では、袁術がしつかりと糸を引いていることだろう」

やはりか……まあ、それは分かりきっていることだな。

「ふむ、それで？」

「連合軍は一致団結して洛陽を目指すそうだ」

これも当然のことだな。

「なるほどね。……んで？」

当然あとは作戦だろうと思っていたが

「それだけだ」

『……………はい？』

俺と雪蓮は二人して間抜けな声をあげた。

「えと、どうやって洛陽を目指すとか、そういうのは……」

「無い」

なんと……

「いや、あるにはあるな」

お、なんだあるのか。しかし冥琳の顔を見ると、ろくでもない作戦なのは分かるが

「じゃあ、なんでそんな憂鬱な顔してんだ？」

あまりにもひどい顔をしていたので聞いてみる。

「……これを作戦と呼ぶのは軍師として許さん」

どんなひでー作戦なんだよ！

「それで、どんなの？」

雪蓮も気になり問う。

「連合軍は洛陽に向かう。途中にある？水関と虎牢関を力尽くで押し通ってな」

「うわぁ……」

「そ、それは……」

まさか作戦ですらないとは……

「え〜とき、マジで策もなく？ただそれだけ？」

俺は最後の希望を持って聞いてみる。

「はぁ……呆れて果てて何も言えなかったわ」

・・・そりゃあ、呆れもするな。

「まあ、それはもういいわ。で、先陣はだれが取るの？」

雪蓮は本当にもうどうでもいいのか、冥琳に別のことを聞いた

「劉備の軍が取ることに決まった」

劉備のこの軍ってまだあそこは軍の数が少ない。てことは

「どう考えても捨て駒にするつもりで扱ってんな」

「状況を考えれば当然そうでしょうね。それで、劉備は受けたの？」

雪蓮が聞くと冥琳は少しだけ黙りこんで言った。

「最初は、劉備の隣にいた刃と同じ天の御遣いが断った」

ついに来たか。いつかは会うと思っていたが、やはりここで会うことになるか。

「それで、どうしたの」

「いや、断ったのだが・・・袁紹が連合軍全軍を劉備軍に向けると言い出してな」

なるほど・・・それで

「そのせいで断れなくなったということね」

雪蓮もそう思ったらいい。が

「いや、逆に来るなら来いと言って殺意を込めた眼で袁紹を睨んだよ」

「な、マジかよー!」

とんでもねーやつだな。

「それで、それで、そのあと何があったの？」

雪蓮はなんか紙芝居の続きを楽しみにしている子供みたいに聞いているし。

「その後、どうしても行つてほしいなら、兵を貸して、兵糧をよこせと言ってきてな。袁紹はその瞳に負けて、一万の兵を貸し、二十日分の食料を渡すことで納得した」

随分と胆が据わってるみたいだなそいつは。

「圧力を掛けてくる相手に、逆に眼で圧力を掛けるなんてね」

「ああ。だがそれでも足りんだろうがな。しかし、この状況をうまく乗り越えれば、あの勢力は大きくなるだろう」

「その根拠はなんだ？」

俺には少し分からなかったので聞いてみた。

「天の時と人の和。その二つをこの目で確認したからよ」

冥琳は話を続ける。

「関羽、張飛といった豪傑を従え、知将も多くそろっている。また、刃と同じ天の御遣いと、前の大乱を利用して成り上がれる天運もある」

「天下を担う英雄になり得るってことね」

「ああ。しかも曹操よりは与しやすいだろう」

「味方に引き込むのか？」

俺の間に冥琳は頷いて言った。

「可能だろうな」

「ふむ・・・なら、劉備を助けましょうか」

雪蓮は少し考えてそう言った。

「恩を売るってことか？」

「そう言うこと。ま、私が話してみて、気に入らなかつたら捨てるけどね」

「それも手か。では劉備の陣地に使者を出しておこう」

冥琳は近くにいた伝令を呼んで劉備の陣地に向かわせた。

(さて、俺以外の天の御遣いってのはどんなやつかな)

十分後、劉備軍陣地にて

「待て！お前たちは何者だ？なぜ我らの陣に入ってくる？」

偃月刀を持ったポニーテール黒髪の女の子が道を塞いでいって、その隣には背丈に合わない大きな槍をもった赤髪の少女が立っていた。

「控える。こちらにおわすは我らが呉の盟主、孫策様だ。・・・陣を訪れることは先触れの使者から伝わっているはずだが？」

「ああ、あなたが江東の麒麟児か」

「なにそれ？」

雪蓮は知らないのか俺に聞いてきた。

「雪蓮のことを、最近は皆そう呼んでるんだぜって、ほんとに知らねーのか？」

「全然。へへ私ってそんな風に呼ばれてるんだ」

自分に対する評価は自分じゃ分からないって言うけど、まさにこれだな。

「あなたの勇名は大陸中に響いていますからね」

「お姉ちゃん、かつくいいのだー」

黒髪の女の子と赤髪の少女は雪蓮にそう言った。

「あははっ、ありがとう。……でも、そう言うあなた達二人の名は」

「わが名は関羽、字は雲長」

「鈴々は張飛なのだ」

名前を聞かれて答える二人。つーか、こいつらがあの関羽と張飛か……慣れたとはいえ、やはり女の子とはな……

「あなたが関羽ちゃんに張飛ちゃんなのね。……ねえ、劉備ちゃん居る？ちよっとお話したいから、呼んで欲しいんだけど」

雪蓮の言ったことに対し関羽は

「呼ぶことは構いませんが、一体どのようなご用でしょうか」

にこやかな笑顔だが、その内には高い警戒を浮かべて雪蓮の顔を覗き込む。てか、こういう本性を隠して動くのは雪蓮の最も嫌いなパターンだけど……

「……下がれ下郎」

「なにっ!?!」

(やっぱりこうなるか)

分かりきっていたことだけどな。

「我は江東の虎が建国した孫呉の王！ 王が貴様の主に面会を求めているのだ。家臣である貴様はただ取り次げばよい」

「なんだとっ！！ 我らには主を守る義務がある！ 例え王であろうとも不信の者を桃香様に会わせられるか！」

関羽は武器を構える。

「それでもまかり通るといふのなら、この関羽が相手になるう！」

「ほお、大言壮語だな関羽。・・・ならば相手になってやろう」

雪蓮も武器を構えて一触即発の雰囲気・・・でもないな。雪蓮はからかつてるだけだし、関羽の方も殺気は感じないし。向こうさんがなんかしてきたら止めるくらいでいいだろ。

「でええええい！！」

そして関羽が思いつきり突っ込もうとして

「ぎゃふん！！」

盛大に転んだ。

(とつか、今顔からいつちまったな・・・ありゃいてーぞ)

皆は呆然としていたが、関羽の足首に鎖が巻きついているのに気付いた。

(つか、この鎖は……)

そう俺が思っていると声が聞こえてくる。

「やめる愛紗、こんなところで喧嘩なんかしたら大変だろ。だいたい、俺は前の鍛練の時にいかなる時も冷静に対処しろって言っただろ」

茶髪でほぼ黒一色の服を着た男が片手に関羽の足首を縛ってた鎖を持って現れた。

「はじめまして孫策さんと、久しぶりだな我が親友、山本刃」

そこにいた男に俺は心の底から驚いていた。

「ちえ、チエイン!？」

久々に親友に会えるとは思ってもいなかったからだ。

「ご主人さま!愛紗ちゃん!どうしたの!？」

すると今度は息を切らせながら別の女の子が来た。

「愛紗と孫策お姉ちゃんがちょっと喧嘩しそうになったのだ。でも二人とも本気じゃないし、途中でお兄ちゃんが止めたから、お姉ちゃん、心配しなくてもいいのだ」

「あら、私が本気じゃないって、どうして分かるのかしら？」

「武器を構えていたのに、殺気がなかったからなのだ。だから鈴々は、安心して見ていたのだ」

それに気付くとは・・・この子、見た目と違いかなりの技量の持ち主だな。

「ふーん。・・・すごいわね、張飛ちゃん」

「お姉ちゃんもなー。・・・愛紗、武器を収めて下がるのだ」

「ぐぐう・・・分かった」

張飛と名乗る少女に説得され、武器を収め、鼻を押さえながら後ろに下がる。

「すみません。愛紗ちゃんをご迷惑をお掛けしました・・・」

恐らく劉備であろうその女性はぺこりと頭を下げ謝る。

「別に構わないわ。どうせ関羽も本気じゃなかったでしょうし。・・・それより、あなたが劉備？」

「は、はい」

やはりこの人が劉備か。なるほど・・・なんとなくツナさんを連想させる瞳を持っているな。

「あの、あなたは……?」

「孫策、字は伯符、呉の王よ。……王といっても今は領土もなく、家臣も少ないけどね」

「あ……。あなたが孫策さんだったんですか」

口を丸くぽかんと開けて、劉備と名乗る女性はマジマジと雪蓮を見つめる。

「あの、それでご用件は?」

「その前に……」

雪蓮は劉備の隣にいるチェインに話しかける

「あなたが劉備軍の天の御遣いっていわれてる人?」

「俺か? まあ、天の御遣いっていうのは桃香達が勝手に言ってることだけど、一応そうだと言っておこうか。とはいえ、この軍を率いているのは桃香なのは変わんねえ」

雪蓮は「ふーん」と言って次の質問に移った

「じゃあ、うちの刃とはどういう関係なの?」

「さっきも言っただろ? 親友だ」

「ほんとなのか刃?」

冥琳が俺に聞いてくる。

「ああ。父上に引き取られてすぐの時に会って、それから仲良くなつた奴でな。ついでに、父上が所属していた組織の一員でもある」

「正確にはその中の独立暗殺部隊だけだな。チェイン・バラードだ」  
静かにそう名乗る。

「さて、俺は刃と話したいんでね。言いたいことは桃香に言つてくれ」

「……雪蓮、いいか？詳しくは後で話すからさ」

「構わないわ」

承諾してくれたので、俺とチェインはこの場を離れようとしたが関羽が止めてきた。

「お待ちくださいご主人さま！この者は本当に信用になる人物なのですか！？」

「愛紗、こいつは少なくとも俺を後ろから刺すとか、そんな汚いことをするような奴じゃねえ。だから安心しとけ」

「しかし……」

そのあと何か言おうとしたがチェインは関羽の頭を撫ではじめた

「だーいじょぶだって。それに、ほんととは分かってんだろ？こいつ

が武人だっことはよ

「……………」

「お前も武人なら分かるだろ？こいつはそついうことはしねえ」

関羽は少しだけ黙っていたが

「わかりました……………」

と言って納得した。

反董卓連合夜営地より少し離れた所にて

「それにしても、ほんとに久しぶりだな。お前がヴァリアーの幹部になったときに見に行ってからだから結構時間が経ってるな」

こいつは今まで空席だったヴァリアーの雲属性の波動を持った幹部となっている。

「だな。で、お前は何でこの世界にいて、あの孫策ってやつに仕えてんだ？」

俺はここに来時の内容と雪蓮の所にいる理由を教えると

「ははははははは！な、なるほどなあ、はははははは」

腹を押さえて笑っていた

「そ、そこまで笑うなよ」

「いや悪い、悪い。しかし、お前を種馬にねえー」

全然謝ってる気がしなし。

「で俺の方は教えたんだ。お前の方も教えろよ」

「へいへい。んじゃ、回想行きまーす」

と言つちエイン。つーか

「誰に言ってたんだ？」

「いや、なんとなく言わなきゃいけない気がして」

第十一話 チェインと劉備（前書き）

タイトルが違うのは今回だけだと思いますので。

では始まりです

## 第十一話 チェインと劉備

回想

刃が雪蓮に拾われる二か月前ヴァリアーのアジトにて

\*チェイン

「あの、スクアーロ先輩、二つほどいいですか？」

「なんだあ？手短に離せ」

長髪の白銀髪の男、スクアーロに俺は言う。

「じゃあ、まず一つ目。なぜ、あそこでボーとして寝ているフラン先輩でなく、なぜ俺なのですか？」

蛙のかぶり物をつけたフランという男に俺は指をさして問う。

「いやですー。ミーはこうやって寝ることに忙しいので、つまんない任務はそっちでやっといてくださーい」

「ブチ あ、手が滑った」

俺特製の鎖針（殺傷用）がフランの頭を貫通した。

「ぐえ！ 痛いなく先輩にそんなことしていいんですかー？」

さらにムカついたのでとりあえずもう一撃決めておいた。

「ヴオオオイ！！新米幹部なんだから少しくらい我慢しろおおお！！！！」

「俺、もう幹部になって二年ですよ」

「マーモンがいたときの方がずっと良かった。代理とはいえ、このフランが幹部で、しかも事実上、俺の先輩なのもムカつく。」

回想一時OFF

「お前、さっき関羽にいかなる時も冷静にって言ったよな？」

「おう」

「冷静のれの字もないじゃねーか！」

無視して再び回想

「じゃあ、二つ目、一方の任務はボンゴレに害なす敵を消すつてのはわかりますけどね、もう一方はただのパシリでしょ」

「ぶ」

ちかくでムカつく蛙の笑い声聞こえたので即座に狩った。

「ヴオイ、ただこれを渡しに行くだけだあ、どこにいるかは手紙を

見れば予想はつく」

そういうスクアーロの手には一つのボックス兵器。

「ち、めんどくせー」

「ししし まあ最初はこんなもんだ。あと、フランを殺るなら徹底的にした方がいいぞ」

金髪で頭に王冠を着けたベルがそう言う。こいつとは結構仲がいいが、フランを殺るときにはものすごく仲がいい。

「チエイン、構わんから今殺してしまえ」

とスクアーロの後ろにいるレヴィが言うが

「てめーに言われなくても自分でするさ。レヴィ・アンポンタン先輩」

「レヴィ・ア・タンだ！」

この人はあんまり仲良くなれない。暑苦しいし。

「ヴオオオイ!!!余計なこと言ってんじゃねー!!」

スクアーロはレヴィの腹と股間に本気の蹴りを入れた。

「ふ、二つにはいつ・・・」

そして盛大に吐き出した。

「ん〜やっぱりあたしたちって、身も心も汚いくて、カオスな集団よね〜」

それを見ていた自称ヴァリアーで一番の美人こと、ヴァリアー一番の変態な、ルツスーリアがそう言ったがまさにその通りだ。

「ヴオオオイ！！！！分かったらさっさと行けえええええ！！！！！！！！」

そんなこんなな理由で任務に出た。内容はボンゴレが管理する、イタリアの文化美術館に最近、不審な者がいるという。そのものを追跡し、ボンゴレに害をなす者なら消せとのことだ。

「なんでこんなめんどいことを」

そう言いながら辺りを見渡すと、早速報告にあった不審者を発見した。しかも手にはなにか持ってるし。俺はそいつを少しづつ誘導しながら追い込んだ。

「はいはい。さて、ためーは何もんだ？正直に答えて、その手に持っている物を渡せば、助けてやってもいいぜ」

俺は眼鏡をかけた白服の男にそう言ったが

「……………ふ」

と微笑する。

「OK、そんなに死にたいのなら、今すぐあの世に送ってやるぜ」  
俺はポケットからボックスを出して開匣する。

「雲鎖〔チエーン・デイ・ヌーボラ〕」

出てきたのは雲属性の炎をまとった鎖針。ウエポンタイプのボックス兵器だ。

「そらよおー！」

俺の投げた鎖は一直線に相手に向かう。

「ふ、こんな攻撃」

と言って男は横に避ける

「いや、その避け方はハズレだ」

その瞬間、鎖の先端にある針の部分が別のところからいきなり出てくる。雲属性の特徴である増殖によって針の部分が増えたのである。

「なー!!」

「終わりだ」

しかし相手はとっさに手でガードしたが手に持っていたものを落とすとして、《パリーン》割れた。どうやら鏡のようだ。

「ち、こりゃ、俺の給料から引かれるな」

しかし、その瞬間、突然割れた鏡が光りだした。

「な、なんだこりゃ？」

「ふふふふ、自業自得です。その身で、世界の真実を見るといいです」

その時、先ほどの男の声がしたが身体も口も動かせずに意識を失った。

回想再び一時OFF

「で、この世界に来ることになったのか」

「ああ。そうだ」

俺の時もそうだが、奴らの言っていた真実ってなんだ？まあ、今は話の続きを聞くか。

「で、そのあとは」

「おっ」

再び回想

「うーん……………」

目覚めて最初に見たのはどこまでも続く荒野。

「おかしいな、確かあのム力つく眼鏡やろーを追い詰めた後、鏡が割れて……」

考えても訳が分からん。とりあえず近くの街まで行こうとしたら

「おい、いい服着てんな兄ちゃん」

黄色い布をかぶったデブ、チビ、ミドルの三人組みの男がいた。

「さて、大人しく持ちもん全部置いてもらおうか？」

「お、大人しく渡したらいいんだな」

「しし、兄貴、さつさとやりましょうぜ」

そいつらが全員俺に剣を向けてきた。

十五秒後

「で、なんなのお前ら？」

俺は全員を三秒でボコボコにして土下座させ、中央のミドルには頭に片足を置いて聞いた。

「いやーそのですね・・・僕たち盗賊なんで、有り金奪ってあなたを奴隷にしようかなーなんて・・・」

俺は足に力を入れる

「なにふざけたことやってんの？ねえ？」

「い、ごめん・・・」

「しゃべんな」

その一言で黙り込む。

「・・・・・・・・ふう、てめーらは俺が殺してないだけありがたいと思えよ」

しかし男たちは何も言わない。

「何とか言ったらどうだ？感謝の一つもねーのか？」

するとチビが震えながら何か言いだす

「い、いえ、あなたが先程、sh・・・」

「ああ！」

『すみません！ごめんなさい！！そして殺さなくてくれてありがとうございます！』

三人が同時に声を合わせて言った。



「今まで生きてきたな中でも最高の恐怖を味あわせて殺すから、覚悟しとけ？」

『ブルブル、わわわ、わかりました』

「もういいから行け。見てると今すぐ殺したくなる」

『はい！！失礼しましたー！！！！！！！！』

三人組は脱兎のごとく逃げていった。

「さてと街をってさっきの奴らに聞けばよかったー！！畜生、やっぱ次に会ったときに殺そう」

またまた回想一時OFF

「はは、相変わらずだな、お前はさ。ははは」

「？」

やはり分かってないようだ。昔からこいつの言うことの約六割が矛盾しており、なおかつその中には理不尽なものも含まれているから余計にたちが悪い。このことで笑って受け流せる奴は俺くらいのものだ。

「で、そのあとは」

「むむむ」

またまた回想再開

「さて、どうするかな、そこにいる君たちは何か知ってるー？」

と言うと近くの岩陰から三人の女の子が出てきた身に着けている服を見ると中国っぽいのが、いまだき中国の人間もこんな服は着ない。

「気付いていたんですか？」

真ん中にいる女の子が聞く

「ああ、最初からな」

「にゃーお兄ちゃんすごいのだー」

「確かに。三人を相手にして、あつという間に・・・私や鈴々でもあそこまでは無理でしょう」

そしてその隣にいる赤髪の少女と黒髪のポニーテールの女の子がそう言う。

「そいつはどうも。で、あんた達はなにもんだ？」

とりあえず名前を聞いてみることにした

「私は劉備。字は玄德！」

「鈴々は張飛なのだ！」

「関雲長とはわたしのことだ」

(劉備、張飛に關羽だと！だが、こいつらの目に嘘はない)

俺は確認のために尋ねた。

「えっと、マジでそう言う名前なのか？」

「そう言う名前なのだ！」

「うんうん。ウソなんてつかないよねー」

やはりこれはパラルワールド・・・いや確信するのはまだ早い。

「ところで、お兄さんのお名前は？」

劉備と名乗る女性が俺の名を聞いてくる。

「俺はちえ・・・いや、フランだ」

俺は偽名を名乗る時は一番嫌いなやつの名前にすると決めている。

「ふらんさん・・・変わった名前ですね」

「素直に変な名前と言ってくれて構いませんよ」

どうせ偽名だし、あいつの名前だし。

「いえいえそんな・・・」

「変な名前なのだー！」

「お、おい鈴々そういうことは……」

うん、あいつの名前がことごとく馬鹿にされるのを快感にして次の質問に移る。

「で、ここはどこだイタリアじゃないみたいだが……」

「いたりあ？なにそれ？どこの州？」

……いくら世間知らずでもこの年でイタリアを知らないやつはそうはいない。それに、州ってことは、ここは大陸だ。だが最後の確認として

「なら聞くけど、今は漢王朝だよね」

これで笑われたらそれでよし。

「はい。そうですよ」

ハイ、確定！

(面倒なことになったな……)

なんて思っている

「やっぱり……。思った通りだよ！愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！」

劉備と名乗った女の子は目をキラキラと輝かせながら言う。

「この国にない街の名前を言ってるし、私達の知らない言葉を喋ってるし、それに、なにより服が変!!!」

「・・・確かにほぼ黒一色の服だから否定はしないが、俺から見るとお前たちの服装も変なのだが」

しかし、劉備は無視して話を続ける。

「この人がきつと天の御遣いだよ!この乱世の大陸を平和にするために現れた愛の天使様なんだよ」

まさか天使と言われるとは思わなかった。

「で、なにその天の御遣いって?」

まあ、聞いてみるだけ聞くと関羽が答えた

「管輅というエセ占い師が言っていたことです。流星と共に現れし使者。そのものは、全ての悪を縛り上げる鎖を持ち、なにをも寄せ付けぬが、すべてを支える浮き雲のようなもの。」

「それで管輅ちゃんに言われた場所に行くと言われ、流星が落ちてきているのを見て、来てみるとあなたを見つけたんです」

関羽と劉備が言ったこと聞いた時、思ったことはただ一つ

(都合いいな、おい)

ここまで都合がいいものなんて、三文小説にもないぞ。ま、それはいいとして

「で、あんた達は俺が 天の御遣いだったら、用があるのかい？」

『!?!!』

凶星か。

「……単刀直入に言います。私達に力を貸してください！」

「やはり、俺を使って名を得るってことか」

まあ、天の御遣いなんていう胡散臭いものでも、人に畏敬を抱かせるには十分だろうしな。特にこの時代だと。

「あなたの力を得れば、より多くの人が救えます。だから……お願いします!!!!」

「……一つだけ聞こうお前達の目指しているものはなんだ？」

これを聞かなければ始まらない。どうでもいいやつに俺は付く気はないし。

「この大陸のみんなが、平和に暮らせる国を作ることです!!」

こりゃまた、随分と

「甘いな、砂糖よりも」



いた。

「いやです」

「？」

「それだけじゃ、嫌なんです!!!」

先程までの劉備とは思えない声で言った。

「確かに、犠牲が出ることは嫌です。けど、ただ周りの人だけを助けて、その時、他の人たちが悲しむのはもっと嫌です!!!」

「だから、犠牲になった者の家族はどうでもいいってか？」

少し挑発する感じで言ってみた。

「違います!!! いつかは……いつかは、その人たちも笑えるようにして見せます。必ず!!!」

その瞳を見たとき俺は思った。

(こいつ、沢田綱吉と同じ眼をしていやがる……ムカつくけど、認めちまってる)

俺は……決めた

「面白い! お前の覚悟は分かった。なら、その覚悟が何を生むのか  
見てみるとしよう」

「!!それじゃあ・・・」

「ああ。お前達に協力しよう。先ほどの名前は偽名でな本名はチエイン・バードだ。言いにくければお前達の言いたいようにすればいい。」

そう言ったあと劉備は考えて

「じゃあ、ご主人さまで」

なぜ？

回想OFF

「その後、俺達は公孫贇の力も得て、独立し、仲間も増やし、今に至る」

全てを聞き終わった後、俺は劉備の覚悟と、その心の強さに驚いていた

「なるほど、頑固なお前が認めるわけだ」

「ふ、まあな」

しかし

「お前がご主人さまって言われてる理由がまさかそんな理由とはな。ははは」

「てめ、笑うなこらー!」

俺達は久々に馬鹿をやりながら時を過ごした

第十一話 チェインと劉備（後書き）

いかがだったでしょうか？

変なことかあつたらすいません。

感想や意見を楽しみにしています。

さて、次回より久々の戦闘です。

がんばりますので、応援よろです

## 第十二話「分かってねえ」(前書き)

はい、久しぶりの投稿です。

ここ最近、尊敬してたじーさんが死んで少し萎えてましたが、  
ようやく復帰できました。これからはなるべく早く投稿できるよう  
頑張ります。

## 第十二話「分かってねえ」

「さて、いずれは本格的な戦乱の世になるけど、お前と同盟を結べるのなら安心だな」

「いや、まだ決まってねーからな刃」

「おっとそうだったな。ずいぶん話したし、早いとこ戻るか」

そう言って戻ろうとしたとき

「待て刃。こいつを渡しとくぜ」

チエインは懐から出したものを軽く俺に投げってきたのでそれをキャッチした

「ん、こいつは・・・ボックス兵器か」

色は青ってことは、こいつは雨属性のボックス。なぜチエインが

「そいつは、スクアーロに言われてお前に渡すように指示されたもんだ」

なるほどな。あの人、父上ほどではないが顔に似合わず結構お人好しなところがあるからな。恐らくこれも《あの技》の完成のためのものだろう。

「で、こん中にはなにが入ってたんだ？」

「俺も詳しくは知らないな。あ、一応言っておくが、万が一も考え  
てここでは開けるなよ」

ありゃ、ばれたか。

「さて、戻るぞ刃。そろそろ話しも終わってるだろうしな」

「おう」

反董卓連合、劉備軍陣地にて

「うーす。もどったげ桃香。……話し合いはどうかやら終わって  
るようだな」

「あ、ご主人さま。とりあえず、？水関では孫策さんと共闘するこ  
とになりました」

とりあえずか、それだけで何となく理解ができた。

「つまり、俺達を信用するかをそこで決めるっことだな劉備」

「あ、はい。えと、ご主人さまの親友の山本さんでしたね」

「ああ。よろしくな」

「は、はい。こちらこそ」

俺が挨拶すると笑顔で返してくる。うん、いい人だ。

「刃、そろそろ戻るわよ。……劉備、孫呉の戦い振り、その目に焼き付けておきなさい。もし私が信賴するに足りない判断したのならばそれはそれでよし。……いつか戦場で矛を交えるだけよ」

劉備に背を向けて雪蓮は言う。その背を見て俺はかっこいいと思った。

「……分かりました。孫策さんの信義、しっかり見させて頂きます」

劉備は雪蓮にそう言う。

「ええ。では一刻後に出発することで良いわね」

「はい」

そして雪蓮と冥琳は自分たちの天幕に戻りはじめたが、俺はまだ一つ用事があった。

「劉備、この戦いの後に俺達と同盟を結ぶにしても結ばないにしても、話したいことがあるんだ。できれば、チェインは外して」

「いいですけど……何を話すんですか？」

と聞いてくる劉備に

「それはまた後でな」

と言って俺は去った。

その後、雪蓮から劉備のことを聞いたが……やはり抜け目ない人だと思った。最初に見た時から強い人だと思っていた。力ではなく、心のほうが。それは Cheney と雪蓮から聞いたことで確信した。

「けどま、初戦の？水関で信用を得ればいいんだろ？」

と俺が言ってみたが冥琳が言う

「言葉だけではなんとでもなるが、どうする??水関に籠る敵兵の数は八万から十万。我らと劉備、それにあの Cheney という男が袁紹から借りた兵を併せてもそれには遥かに及ばないわ」

「しかも、？水関っていう鉄壁の盾に守られてるしな……打つ手が無いなこりゃ」

と俺と冥琳が悩みながら言っている

「打つ手無し?そんなの必要ないでしょ。火の玉になって寄せるだけよ」

と雪蓮が突然ふざけた提案を出してきた。

「いやいや、始めと主旨がちがうし。つか、袁紹の出した命令に似てんぞ……」

「刃の言う通り。……雪蓮の言葉は戯言だから、気にせんで良

い  
「

冥琳がそう言う」と

「戯れ言なんてひどい」

雪蓮は顔をぶーうと膨らませて言った。

「ひどい発言なのだから仕方無いな。ところで、刃お前の意見を聴かせてくれ」

雪蓮の発言にツツコミを入れて聞いてくる。

「案か・・・正面からじゃまず無いな。八万だか十万だかの軍隊が籠る難攻不落の砦を落とすのを俺らの軍勢だけでやるのが間違ってたんだから」

まあ、ボックスを使えばそうでもないけど・・・チエインいわく、あまりこの世界で未知の力を使い過ぎると時空間に影響を及ぼす危険性がある為、滅多なことでは使うなと言われたからな。

「正論だな。なら、どうするのだ？」

冥琳は再び尋ねてくる。

「そうだな・・・そういや、？水関の兵を率いてる将って誰だ」

唐突だったが聞いてみた。

「ああ、？水関の兵を率いているのは張遼と華雄。どちらも優れた

武人だ」

「華雄って、母様にコテンパンにやられちゃた武将じゃない。．．．大したことないんじゃない？」

と、雪蓮が思い出したらしく冥琳に言うが

「さてな。あの時は華雄の同僚が暴走し、部隊が混乱した隙を文台様が突かれたことによって敗走したが、あの時の戦いを基本にして、華雄の能力を推し量るのは危険だろう」

冥琳の言う通りだな。それに人は反省して成長する生き物だ。すでに過去の戦いのことは克服していると見て間違い名だろうな。

「でもさー華雄ってそんなに有能な将だったけ？」

と雪蓮が聞く。

「こと武に関してはな」

冥琳のその言葉を聞き、俺は考え付いた。

「なあ冥琳。それを利用できねーかな？」

「どづいうことだ？」

「今言ったことが本当なら、間違いなくそいつは自分の武に誇りを持ってるはずだ。なら、それを逆手にとって相手を誘い出せるんじゃないか？例えば、そいつを外から罵ってみたり」

俺がそう言つと冥琳は「ふむ」と言つて少しだけ考えた後に言った。

「悪くはないが、もうひと工夫も必要だな。ただ罵つただけで突出するような愚か者に？水関の守りを任せるはずがなかるう」

「あ、そつか。ならどうする」

「きつかけを作ればいい。例えば充分に罵り、愚弄した後に戦いを仕掛けて退いてみるというのはどうだ」

そ、それは相手はまず間違ひなくキレるな。というか、今ので分かつた。冥琳を敵にまわしたら恐ろしいと。

「冥琳つてば性格悪いんだから」

雪蓮がにっこりと笑つとまんざらでもなさそうな顔で冥琳は話し出す。

「策と言つてもらおうか。……だが、問題点がある」

「それは、なんだよ冥琳？」

俺が問うと冥琳は答える

「一つは罵倒する人間の質だ。……残念ながら、我らの軍には大陸中に名の知れたものは現状で二人」

「二人？一人は雪蓮としてもう一人は？」

と聞くと冥琳は少し驚いた顔して溜息をついて言った。

「お前のことだぞ刃」

「て、俺かよ！」

なんかこのセリフに似たことをさっきも言ったような・・・

「なにを驚いている？お前の名は自分で広めたようなものではないか」

「そうよ。知らなかったの？二人の天の御遣いの噂はもう大陸のすべてに広まってるんだから」

まさかそこまで噂になってるとは・・・けど

「俺、そこまで罵倒は得意じゃないんだけど」

「そんなこと見ればわかる」

だよなあ。

「私がやってもいいならやるけど？」

と雪蓮が言っが

「却下」

あっさりと冥琳に言われた。

「面白そうなのに・・・」

「却下」

雪蓮は渋々納得して黙った。

「そしてもう一つとして、あからさまにしゃしゃり出るのは不味い。・・・袁術に勘ぐられる可能性もある。今はなるべく目立つ行動は控えなければならん」

冥琳の言ってることは分かるけど・・・

「大丈夫じゃねーか？あの袁術なら」

「そうかもしれないが、万が一もある。それにある程度の力がなければ、太守になどなれん」

なるほどな。

「なら、どうすんだ？」

「だからこそ劉備に会ったのだよ」

冥琳はがそう言ったこと俺はすぐに理解したとき雪蓮が言った。

「あら、劉備にその策を伝えるの？」

「ええ。劉備軍なら大丈夫でしょう」

たしかに、関羽に張飛みたいのがいるからな。

「つまり、最初は劉備軍だけが戦うけど、すぐに俺達が駆けつけるんだな。先鋒を支えるという理由で」

「ああ。それなら、袁術の眼も誤魔化せる」

「じゃ、決まったことだし、いきましようか」

一刻後

ついに出陣！！      なんだけど・・・

「さあ皆さん！ 雄々しく！ 勇ましく！ 華麗に出陣しますわよ！」

金ぴかの鎧を着けた金髪でまるでドリルのような髪をした女、袁紹から脱力ものの命令が発せられた。

「うおーし！先鋒、劉備軍進めー！」

「はいっ！」

ボサボサで黄緑色の髪をした袁紹軍の将、文醜の号令で劉備軍が動き出す。

「続いて曹操さん、孫策さんの部隊、前進してくださいーい！」

その隣にいる将、顔良の号令で華琳と俺達の軍が動き出す・・・

「華琳のやつ、めちゃくちや不機嫌そうだな」

「気持ちはよく分かるがな」

どつやら冥琳やみんなも同じのようだ。やはり袁紹は袁術の従妹だということが分かる。

「ま、それはいいとして、みんな出陣するわよ」

『はっ』

「はっい」

「ああ」

「了解」

峡谷を抜けると、左右を絶壁に囲まれたただっ広い道に着いた。その目の前には巨大な砦が見えた。

「あれが？水関か・・・これは苦戦しそうだな」

それもそのはずだ。包囲されないから、正面を守るだけでいいし。しかも部隊の展開もできない。間違はなく、最強の鉄壁と言ってもいいだろう。

「まあ、なんとかなるでしょ」

と言つ穩。

「はは、お気楽だなあ」

「眉間に皺を寄せてうーんとか唸ってても、現実には変わりませんからねえ」

「だよなあーははは」

「あははは」

と二人でお気楽に笑っていると雪蓮も賛同して三人で少しだけ笑った。

「それじゃ、作戦を実行に移しましょう。冥琳、劉備ちゃんのところに行つて作戦の説明をしてきて。私達は戦闘準備をしているわ」

「了解した」

そう言つて冥琳は劉備の元へと向かった。

「さて、準備に取りかかりましょうか。」

その一言で皆気合いを入れだす。

「前曲は我ら仕りましょう」

「お願いね、思春。後は作戦の結果次第で臨機応変に対応して」

「俺はどうすんだ？」

「刃は私の護衛として、私の横に居てもらおう」

「了解」

そしてついに作戦が決行されようとしていた。

「さて、華雄を引きずり出せば、張遼も釣られて出てくるはずだな」

劉備軍にいる刃のことを少しだけ心配しながらそう言っていると、関羽と張飛が罵声を浴びせていた。

「あつ雪蓮様、冥琳様！前線の方で動きがありそうですよ」

「よつやく動くか」

穩の言葉を聞き皆臨戦態勢に

「あ、嘘でした。ごめんなさい」

と穩がすぐに言ってきたことによってそうはならなかった。

「嘘？どういふこと？」

雪蓮は疑問に思ったことを穩に聞いた。

「城壁の上がブワーって動き出したんですけど、どうしてか動きを

止めちゃいました」

「ふむ・・・突出しようとして張遼が止めたということか」

「そんなところでしょうね」

俺もその意見に同意だった。

「お、こんどはチェインも罵声するつもりだな」

\*チェイン

桃香と朱里に止められたが俺はそれを無視して前に出た。もちろん愛紗にも怒られたが今はそんな場合じゃないということで納得した。

「さて・・・おい！？水閼将、華雄！！てめーは心底臆病者で負け犬根性が強いみてーだな！ここまで言われた動かねーやつとは、飽きれるな！。まあ、負け犬は負け犬らしく、尻尾を振りながら逃げ回るのがお似合いだ。そうだ、俺がお前の本を出してやるよ。題名はそう、臆病者の負け犬、その名は華雄だ！！貴様みてーな負け犬なんかと相手にするくらいなら、豚と相手にする方がマシだな。ではな負け犬！！」

俺が罵声を終えると再び旗が動き出したがまたすぐに止まった。

(ち、どうするかな)

そう思っていると後ろから誰か来た。

「あ、あなたは孫策！いいのかよ、こんなとこにいて!?!?」

「刃の親友のチエインだったわね。その点なら心配いらないわ。袁術ちゃんは許可をもらってる。」

許可って……まあ、あの袁紹の従妹だし、当たり前か。

「あなたはいったん下がってくれない？挑発は私がやるから」

「……分かった。釣り上げた魚の調理は任せろ」

「感謝するわ」

「そりゃこっちの言うことだ。感謝するぜ孫策」

「それはどういたしまして」

その言葉を聞き俺は下がった

チエインOFF

チエインの罵声でも動かなかったの見て雪蓮はすぐさま袁術のもとへ向かい、劉備と連携して戦う許可を得てきた。というか、それを認めるって……いや、もう分かりきってることだから考えないでおこう。

「よし、ついで……かないな」

雪蓮が罵声してまた旗が動き出そうとするがすぐに止まる。どつちから周りの人間が必死で止めているようだ。

「どうすんだ雪蓮？」

「そうね……今のうちに城門に寄せちゃおっか」

なるほど、無造作に寄せってくる敵を見れば、さっきまでの罵声もあるし、今度は周りの兵も抑えられなくなるな。

「でも、大丈夫でしょうか？」

劉備が不安そうに言う。

「安心しろ桃香。ここにいる孫策の兵が俺達を守ってくれるはずだ。そうだろ？孫策」

「ええ。もちろん」

チエインと雪蓮の言葉を聞いて劉備は安心する。

「それじゃ、はじめましょ！」

\*華雄・張遼

「華雄將軍！連合軍が寄せて参りました！」



華雄の号令のもと、華雄隊の兵は皆、出撃準備に取り掛かった。

「くっ、あかん、これはもう止められん！・・・誰かおるか！」

「はっ！」

「虎牢関の賈馱っちに、もう？水関はもう保たんと伝えてくれ。おいおい状況は伝令で伝える言つてな」

命令を聞き、伝令はすぐさま動く。

「華雄を見捨てる訳にはいかん。・・・張遼隊！うちらも行くぞ  
！！」

華雄・張遼OFF

「ついに城門が開いたぜ雪蓮！！旗は漆黒の華一文字！華雄だ！！」

「ようやく釣れたわね。・・・後方に伝令！これから大物を引っ張って行くから、しっかり対応しろと命令しておけ！」

「御意！」

「続いて袁術にも伝令を出せ！前方に動きありとな」

「御意！」

二人の伝令はすぐに向かった。



戦闘開始から約30分

「てりゃー!!」

「死ねー!!」

「うおらああああー!!」

「まだだ!!」

「きえろおおおおおおお」

周りで聞こえる声は、少しでも恐怖を消そうとする兵の声である。

(時雨蒼燕流、攻式八の型)

「死ねええええええええええ!!」

「終わりだ!!」

(篠突く雨!!)

その一撃で俺に向かってきた兵を倒す。その光景は敵に恐怖を与え、味方に安堵を与える。

「ふー、みんな、あと一息だ!孫呉の兵として、気合いを入れる!!」

『はっ！！』

これで新兵の強化もできたし、恐怖心も消えた。そのことで安心をしていると

「貴様がこの部隊の将だな、私と勝負しろ！！」

大きな斧を持った銀髪の女性が勝負を仕掛けてきた。

「あんたが華雄か？」

「いかにも！はああああ！！」

振り落としてくる斧を時雨金時を横にして逸らす。

「まだだ！！」

「よっ」

そこからさらに横と縦の連続攻撃を繰り返してくる。

「どうした、避けてばかりか！」

攻撃をよけながら俺は分かった。

(弱くはないが・・・春蘭や祭さんよりは弱い！！)

全ての攻撃をその後も避ける。

「ふん、この程度か？これでは 最強の 私には勝てんぞ！！！！」

その言葉を聞き俺は華雄の斧を腰に着けていた短剣で弾き返す

「なに！！！」

まさかこんな短剣で弾き返されるとは思ってもいなかったのが、華雄は少し後ろに下がる。

「華雄、あんたいま、自分を最強と言ったか？」

どうしても聞きたいことを俺は聞いた。

「ふん、何を当たり前のことを」

「……分かってねえ」

「なに？」

「あんたは、それを名乗ることがどういう意味か、全く分かってねえ」

「なにが言いたい？」

やはり分かっていない。最強を名乗ることがどれだけの覚悟いるかを

「ふう、俺はあんたを武人とは認めない。最強の意味を知らないあんたを、武人と認めるわけにはいかねえ」

「なんだと！！！！ほざくなー！！！！！」



華雄は致命傷を負っていないため動けるが武器を持っていないので戦えない。

「華雄様！ここは一時撤退を」

「くっ、覚えていろ」

そんな言葉を残して華雄は去った。

「追わなくてもよろしいのですか？」

一人の兵が聞いてくる。

「無防備な敵を切るのは、剣士とて、武人としても失格だ。それより、撤退したとはいえ、まだ敵は？水関にいる。気合を入れとけ」

「はっ！」

こうして？水関の戦いは終わりを迎える。だが、刃はまだ知らない。かつてない敵と戦うことなど

## 第十二話「分かってねえ」(後書き)

さあさあ、次はいよいよ呂布VS刃です。

果たして勝つのは……

感想、意見、間違っているとありましたら書いてくれると嬉しいです。

では、次回もがんばります!!

第十三話「これはもしかすると、まじやばい?」(前書き)

はい、追試をやって死亡していた男ですOTL  
これから先遅れることもあります。頑張ります!!

第十三話「これはもしかすると、まじやばい?」

\*チエイン

「そら、行け!」

俺は両手に持った愛用の鎖針を投げる

「ぐぎゃ!」

「ぐぼお!」

その攻撃で二人の兵を倒したがその時、その周りにいた兵は信じられないものを見たかのような顔をする。

「ぎゃああああ!」

「ぐおおおお!」

「な、なんだ、この武器、まるで蛇みてーにぐああああ!」

そして全員貫かれて絶命する。

「はっ、たあいもねえ」

俺は鎖針を生きてる蛇のごとく動かして敵を貫いた後、手元に戻す。

「さて、そこで殺気を殺して見ているやろー出て来い。正直ウゼー」

「ほう、よう分かったなあ」

「どれだけ殺気を隠そうが、砂粒程度のもれた殺気を俺は見逃さねーんだよ」

そして俺は出てきた女性の将を見て俺はほぼ確信した

「てめーが張遼だな」

「ああそうや。．．．一つ聞いてもええか？」

張遼がそう言うので俺は頷いて認める。

「さっきの技、あれはなんや？」

「教えるかよつと言いたいところだが、特別に教えてやるつ」

そして俺は構える。

「実戦でなあ！！！！」

向かっていくのは鋭い針をつけた鎖、それを張遼はうまく避ける。  
だが

「その避け方はハズレだ」

「？．．．．．！！やば」

とっさに身をひるがえして避けたがそれでも鎖の部分が当たり服が

切れる。

「ほお、今のを回避するとはやるな」

「はあ、はあ、なるほど、その鎖の一つ一つが強力な剣みたいなのちゅーわけか」

そう俺の鎖針は鎖の部分も鋭く、触れると簡単に切れる。だが俺はそれの対策用の手袋と服を着けているから安心して使えるのである

「せやけど、さっきの蛇みたいな動きの正体はあんたにあるな」

「ふん、なんのことやらあ！」

次は同時に隠し持った鎖針をだし、計四つの鎖針が張遼の元へ向かう

「せやりゃー!!」

今度は先ほどと違い弾いて軌道を逸らす。

「こんどは正解だ」

「うおりゃあああああ!!」

向かってくる張遼は勝利を確信したかのごとく気合いの一撃を決めようとする。

「だが、その攻撃はハズレだ」

「なっ!!」

気付いたがもう遅い。すでに四つ鎖針軌道を変え張遼の方に向かっている。避けれる可能性はほぼない

「墮ちろ、墮ちる天使の鎖《チェーン・デル・エンジェル・チェ・ジャツジ》」――」

正面から見るとまるで敵に鎖でできた天使の翼が生えて見える。そしてその全ては敵に向かい、自らの羽で死んでいくように見える。

全ての攻撃が終わるとそこには傷はあるが致命傷には至ってない張遼の姿だった。

（なるほど、あえて攻撃を避けるでも弾くでもなく、最小限つけることで、ダメージを軽くしたか）

「わかったで、その動きの正体……信じられへんけど手の指を使って複雑な動きをしとるんやな」

「正解だ。俺は鎖に付いたの穴に指を入れ、それを動かすことでの動きを実現している。ま、俺じゃねーとできないがな。ヴァリアー・クオリティーてんだ」

かなりのダメージとなっているのでここで決める。しかし

「張遼様、お逃げください！ここは我らが」

「お、おまえら」

何人かの兵が張遼の前に立った。

「はやく、行ってください！」

「我らの思いはただ一つ、あなたを守ることです」

「せやけど・・・」

「お願いします、行ってくだ・・・ごあああああ！！！」

言い終わる前に一人の兵を貫く。

「おら、邪魔すんな。命は大事にするもんだぜ」

「絶対にどかん！！」

すると貫かれた兵は鎖を両手で持ち、戻せなくする。しかしその手は血で染まっていく。

「・・・絶対に行かせはせん！」

その覚悟は凄いとは思うが、自分を犠牲にした覚悟などぶざけてる。

「・・・やめだ」

「なん、ごはああ！！！」

一瞬手の力が弱まったので鎖針を抜く。血が出てくるがこれもまだ致命傷ではない。

「おい、張遼と他の兵！そいつ連れてさっさと行け。治療すればま

だ助かるはずだ」

「・・・なんで逃がす必要があるんや」

張遼は殺気を殺さず俺を睨みつける。

「自分から死ぬような奴を殺す気などおきんのでな」

実際、こういう奴はほっといても死ぬ。なら、そんなやつを殺すのなど時間の無駄だし何よりめんどくさい。

「そいつ退きそうもないし、もう飽きたし、殺す気がおきないからな」

「信用してええんか？」

「くどいぞ。だいたい、殺せるのなら今この場で殺してる」

俺がそう言つと兵に指示を出して先ほどの兵を担ぎ退く

「・・・感謝するぞ」

「いらん、そんなもん・・・あ、そうだついでに」

懐から紫色をし、ヴァリアーのマークが入ったボックスを出す

「じい、開匣！」

目の前にいる張遼達以外には誰にも見られていないのでそれをだす。

「雲シユモクザメ（スクアーロマルテツロ・ディ・ヌーボラ）」

別名ハンマーヘッドシャークとも言われる雲の炎を纏ったシユモクザメが現れる。

「な、なんやこれ？」

「そんなことはどうでもいい。そいつここにも乗せる」

「……信用……するで」

「そいつはありがとうよ。でもま、一応保険として、増殖」

数が3匹に増える。

「な!! 増えた!!」

「一々驚くな。さっさと行け、こいつらが守ってくれる」

「……ほんま、感謝するで」

感謝の言葉を言ったあと張遼は？水関へ撤退した。

チエイノフ

戦闘終了後、俺らと劉備軍は同盟を結ぶこととなった。いずれ戦う同じ敵、曹操こと華琳との戦いのために。ちなみに劉備はそれが分

からなかったらしくチェインに

「桃香、お前は情報だけじゃなくて、人を見る目も見極める」

と言われてでこピンをされたことは蛇足である。

そして俺は雪蓮にも許可を取って劉備さんと話をしようとしてんだが・・・

「関羽、その殺気をどうにか抑えてくんねーか？」

「同盟を結んだとはいえ主を一人にすれば何をするか分からんからな」

「いや、なにもしーねーって」

しかし関羽は殺気を抑える気はなさそうなのでもう気にしないでおくことにした。

「それでだ、劉備」

「あ、はい」

「チェインのやつ、いつも迷惑かけてんだろ？単独行動したり、作戦聞かなかったり」

劉備はさすが親友だなーと言いたげな顔で苦笑していた。やっぱりか。

「でも、ご主人さまはいい人ですよ。なんらかんら言っても、民や私達のために動いてくれてるんですから」

「まあ、あいつのやることは結構無茶苦茶だけど、それでも誰かのためになってるからな」

チェインはヴァリアーに入隊してすぐの時もXANXUS以外の命令はあまり聞かなかつたが、それでも、それが誰かのためになっていた。故に、あいつはヴァリアーの雲の幹部になれたのだから。

「ま、話したいことってのはチェインのことなんだけど、このことじゃねえ」

俺がそう言つと劉備は首をかしげる。

「あいつから、あんた達に協力する理由を聞いたけどさ・・・別に俺は何も言わない。けど、これだけは言っておきたい。いや、」

俺は一息置いて言つ。

「本当は、分かってんだろ？あいつがお前達に協力してる理由」

それを聞いた劉備とその隣にいる関羽は少しだけ暗い顔をする。

「はい」

劉備達はやはり分かっているようだ。

「ご主人さまは、私の覚悟は認めてくれたけど、私の理想を認めたわけじゃないってことですよね」

そう、あいつはそういう奴だ。あいつが見ているのは、常に現実と他人の覚悟。あいつはその覚悟の下で動く。まあ、今回は下じゃなくて、上に立ってるけど。

「あんだ達はそれでいいのか？」

どうしても聞きたかったことを俺は聞いた。

「……いえ、認めてくれないなら、認められるような力をつけるだけです」

その瞳を見て俺もチェインと同じ思いだった。

(ツナさんに似てるな)

あの人は少し違うがこの人も自分の行動にある程度の覚悟をもっている。

「なら、俺から言うことは何もねーな」

そう言って俺は席を立つ

「ありがとうな、劉備。話せて嬉しかったぜ」

そしてそれだけ言ってその場を去った。

(あいつが認めるだけの覚悟はあった)

願わくば、あの人たちとは戦わないことを祈ろう。

虎牢関付近の道にて

「なあ冥琳、先方が変わったって本当か？」

「ああ。劉備の部隊と私達の部隊は、後曲に配置換えだ。……先方は袁紹と曹操が取るらしい」

「初戦で劉備さんと私たち、大活躍でしたからねえ。焦ってるのかもしれない」

「おもに袁紹がな」

俺がそう言つと皆笑いだす。

「さて、今度は飛將軍呂布もいるけど、華琳はどう動くか見ものだな」

「応言っておくが、俺は袁紹には0・1%も期待していない。」

「……つまらないわね」

と、唐突に雪蓮が言った。

「なにがだ雪蓮？」

「袁術ちゃんよ。あいつ、まだ動いてないでしょ」

確かに、現状の袁術軍は闘っていないため無傷。

「袁術の部隊が無傷というのは後々に厄介になるな・・・刃、お前ならどうする？」

と聞いてくる冥琳。

「一応、手がないわけでもねーけど」

「けど、なんなの？」

雪蓮はあるなら使えばいいのにと言いたげな顔で言う

「袁術の部隊がいるのは、俺達よりさらに後方。敵の近くまで攻めて、敗走するふりをして敵を誘い込むという手なんだけど、正直分の悪い賭けにしかならない。それに、華琳と袁紹がこの作戦に参加しなくちゃなりたたねー」

華琳はともかく、袁紹が気付くとは思えない。

「だが、現状ではその策しかないのも事実だ。その策を使わしてもらうぞ」

「けどよぉー！」

「刃、この状況を打破する策はもうこれしかないってことは、あなたも理解しているんでしょ？」

雪蓮の言う通り。袁術に痛撃を与えることのできる最も最善の策は、今はこれしかない。

「それに、案外出てきた敵にびっくりして、袁紹も強制的に策に参加するかもしれないし」

「……めっちゃくちゃあり得るから困る」

しゃーねーが、今は動く時。ここで動かなきゃいつ動くだ。

「わかった。そのかわり、俺を前線に出してくれ、こんな無茶な策を立案したけじめをつけなきゃいけねーし」

雪蓮は少しだけ黙ったが

「いいわ。そういうところ男らしくて好きよ。でもあなたの命も大切だから、明命を付けるわ」

「ああ。たのんだぜ、明命」

「はい！」

作戦を開始すると思った以上にことが動き始めた。華琳はこちらの策を瞬時に見破り乗ってきた。

袁紹に関してはおそらく被害を受けるからであろう、撤退を始める。そして袁術はいきなりきた敵を見てあわてて迎撃準備をする。これでは被害はままならにだろう。

「ここまでうまくいくと気持ち悪いくらいだぜ」



「おーやっぱり刃様はお強い!!」

「みんなー俺達には刃様が付いてるぞ!!恐れるもんはねー!!」

『うおおおおお!!!!!!!!』

それは味方にさらに力を与える。

「よし、それじゃ……!!」

その時俺はとんでもない殺気を感じた

「お、おい、ありゃ……」

「りよ、りよ、呂布だああああああ!!!!」

兵士たちが脅えるその先いたのは……

「……………」

意外と普通にかわいい女の子だったが、

(俺には分かる……こいつは強い……おそらく、スクアーロ師匠と父上並みに)

動けない状況が三十秒ほどたった時だった。

「……………いく」

「は？・・・うおー!!」

いきなり目の前に呂布が来て攻撃をしてきた。

(よく見てなかったとはいえ、速い!!)

「・・・・・・・・・・・・・・・・避けられた・・・・・・・・おまえ、つよいな」

「そいつはどうも、呂布」

時雨金時を構えて戦闘態勢に入る。

「山本刃だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・呂布」

つか、その間はなんなの？

(いや、落ち着け、流されるな。・・・時雨蒼燕流、攻式五の型)

今度は俺が前が出る。

(五月雨!)

呂布はその攻撃を防ごうとするがそれは空振り、すでに逆手に持ち変えている。おそらくここに来て一番速い攻撃だろう。・・・しかし

「ぶっ」

「なっ！！」

あるうことかそれを後ろに引いて避け、

「嘘だろ！！！」

そこから一気に前に出て攻撃をしてきた。五月雨の最中だったためすぐにガードできず、攻撃をかする。

「あばねー」

あと一秒反応が遅かったら死んでいただろう。

「これはもしかすると、まじやばい？」

と呟いてみたのだった……

## ボックス説明

雲シユモクザメ（スクアーロマルテツロ・ディ・ヌーボラ）

増殖の力で数を増やすだけでなく、このボックス兵器は単体で雨イ  
ルカの使うボックスコンビネーションができる。（ただし、他のボ  
ックスとは相容れない）互いに脳波をおくり、コンビネーションで  
敵を喰らいつくす。最大増殖数300。これらが連携を取る姿はま  
さしく鮫の中でも珍しい群れで行動するシユモクザメそのもので  
ある

第十三話「これはもしかすると、まじやばい?」(後書き)

さて、本格的な呂布VS刃は次回です。  
遅れるでしょうが、頑張ります!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1366/>

---

真・恋姫?無双～蒼燕流受継ぎし者

2010年10月10日20時20分発行